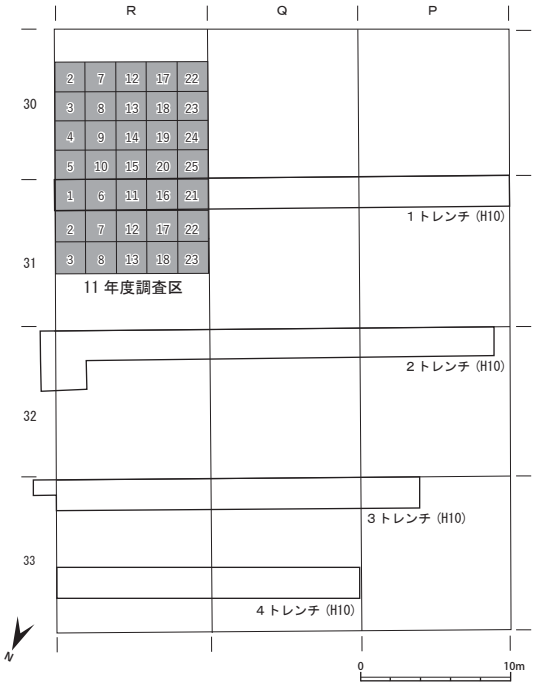
（２）平成 11 年度調査〈第５次調査〉

１）調査の概要

平成 10 年度の調査で確認された２号竪穴建物跡の全体像を面的に確認するため、発掘区を拡張して調査を行った（第 90 図）。表土を除去後、精査を行ったが、発掘区の南西側（R -30 区）は岩盤まで削平されており、岩盤まで掘り込まれた柱穴で遺構の有無を確認した。調査の結果、発掘区の北東側（R - 31 区）で２号竪穴建物の広がりと配石遺構を確認するとともに、R － 30 区で竪穴建物とみられる柱穴を検出した。



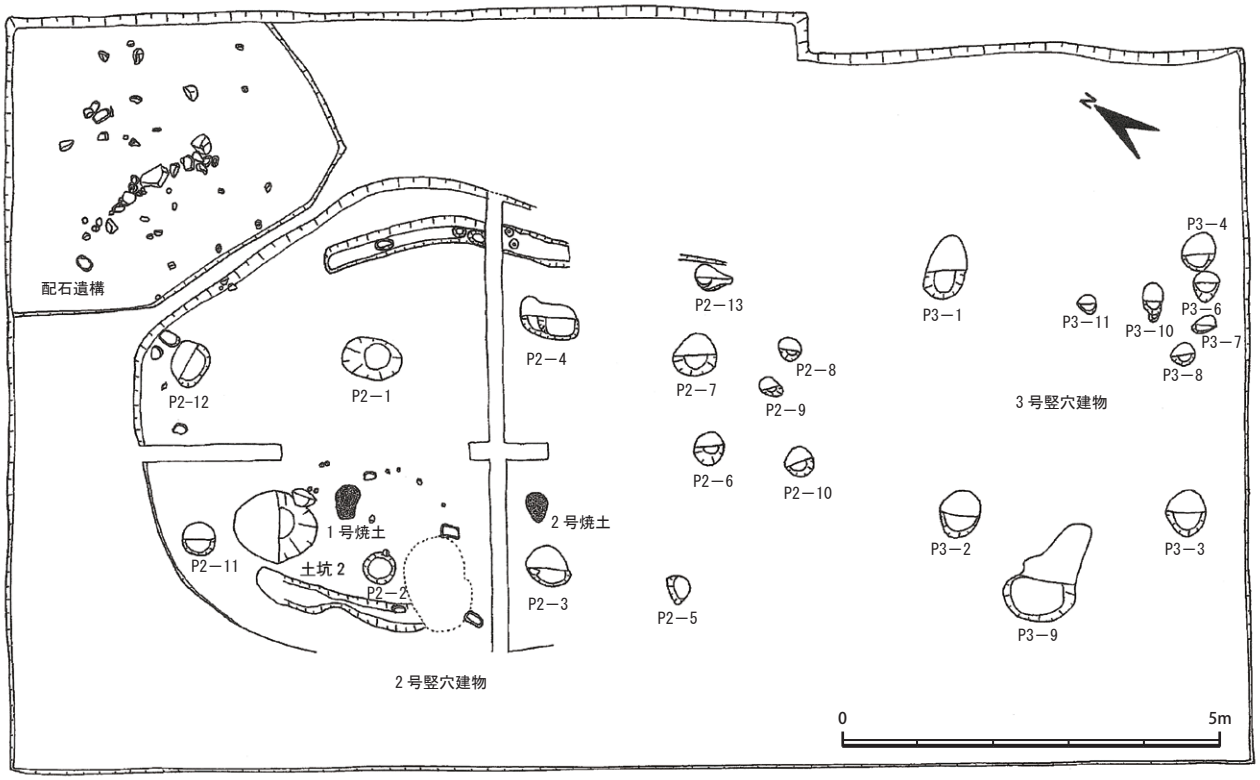
第 90 図　台囲地点（第５次調査区）発掘区位置図

２）遺構

２号竪穴建物（第 91 図、写真 120 － 1 ・ 2）

平成 10 年度の調査で竪穴建物の東側の壁と周溝、西側の周溝、２基の柱穴、地床炉を確認した。調査区を拡張したが、近代の溝と畦道及び削平により南西側は竪穴建物の壁、周溝は失われ、柱穴のみ遺存していた。斜面上方に位置する北東側は壁、周溝の遺存状態がよいが、斜面下方の壁は残っていない。北東側は地山の黄褐色シルトに遺構が掘り込まれ明瞭であるが、北西、西側は包含層、貝層に掘り込まれているのでや不明瞭である。

堆積土は４層確認できた 床面は斜面に沿って傾斜している。竪穴建物の範囲を推定すると、長軸長約 11 m、短軸長約８ｍである。主柱穴は２列、８本（Ｐ２－１、２、３、４、５、７、11、12）と南東に１本（Ｐ２－６）、計９本確認されている。周溝内にも小柱穴がある。 Ｐ２－ 13、９、10 はそのような柱穴である。



第 91 図 ２号、３号竪穴建物、配石遺構平面図

床面には２箇所に焼土があった（１、２号焼土）。１号炉は明瞭な焼け面で、周囲に焼けた小礫がある。抜き取り痕は確認できなかったが石囲い炉であった可能性がある。２号焼土は小豆大の焼土 塊が集中している。廃棄された焼土の可能性もある。大型の竪穴建物で竪穴建物の中央に炉がないことから、12 号焼土が同時存在したふたつの炉の可能性もある。しかし、焼土の残り方は１号焼土の方がより強く焼けている。同時存在の可能性を指摘しておく。

竪穴建物の床面で２号土坑を確認した。人頭大の円礫があり、その下から鹿角製剥離具（写真 119 － 28・120 － 5）が出土した。鹿角の裁断法が叩き切りであること、坑内から薄手の縄文土器が出土することから、竪穴建物内の遺構と推定できる。

床面から三叉文土器が出土していることから、この竪穴建物は晩期初頭の時期と推定される。

［出土遺物］

竪穴建物内の埋土から土器、石器が出土している。竪穴建物は一部縄文前期の遺物包含層、貝層に構築されているので、その時期の土器がもっとも多い。それ以降の時期を示す土器は、縄文後期後葉の瘤付き文土器（第 92 図 2）と晩期初頭の三叉文（11・13・14）入り組み文土器（１・３・４・6 ～ 10）がある。床面から鯨椎骨を加工した骨皿（写真 119 － 24）が出土している。埋土からはほかに、石棒を再加工した細長ハンマー（27）、有溝砥石（26）、鹿角片（21 ～ 23）などが出土している。

３号竪穴建物（第 91 図、写真 120 － 6・７）

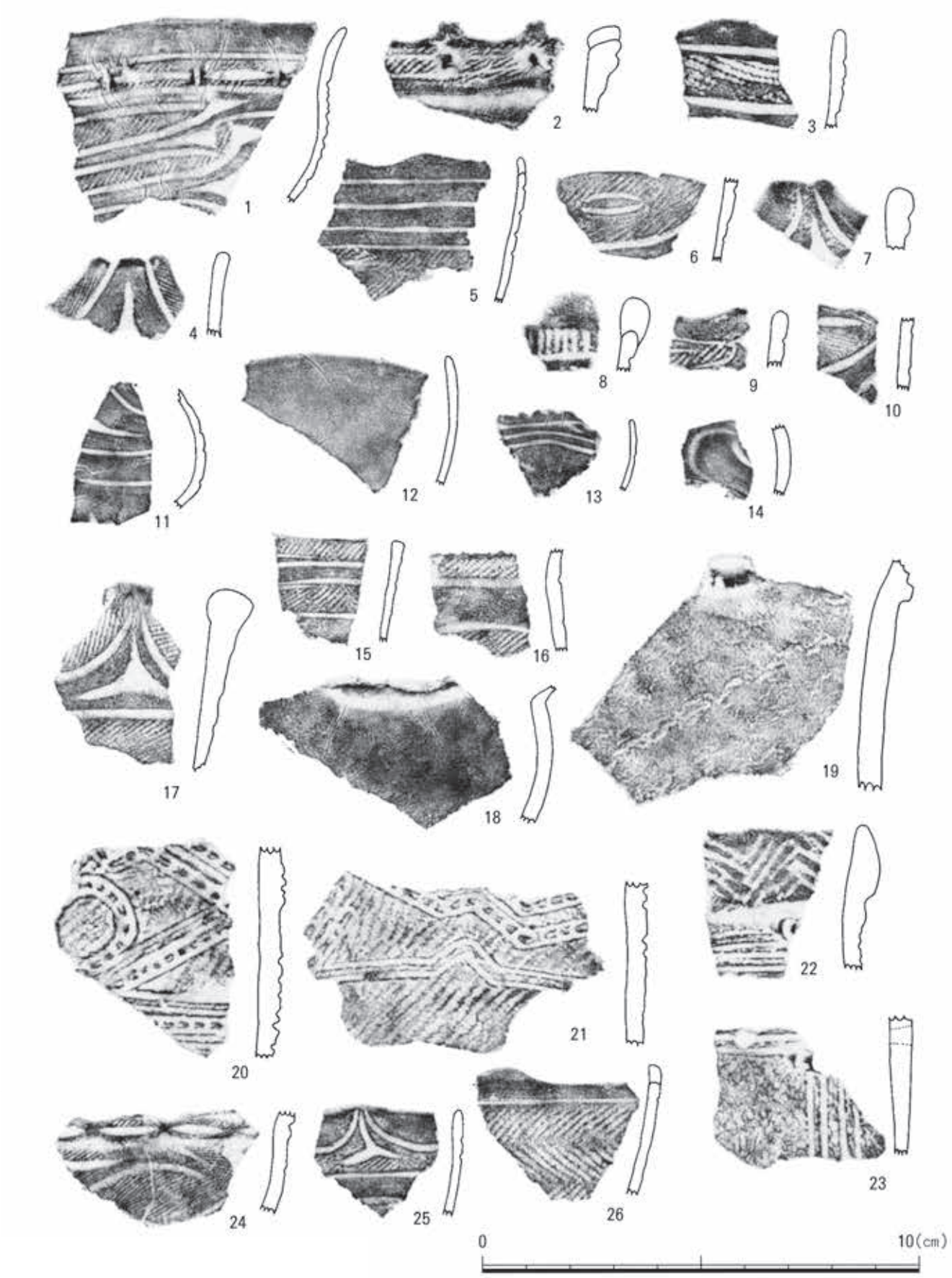
Ｒ -30 区に位置する。削平された岩盤上で確認された。竪穴建物の壁や炉はすでになく、柱穴を組み合わせることで、竪穴建物となる可能性を指摘しておきたい。柱穴はＰ３－１～４の４本が主柱穴と推定される。柱穴の埋土から薄手の縄文が施文された深鉢土器破片（第９図 26）が出土しているので、縄文時代後期から晩期の竪穴建物と考えられる。

配石遺構（第 91 図、写真 120 － 8）

Ｒ -31 区に位置する。調査区の北西隅で２号竪穴建物の確認面から約５㎝掘り下げたところで、検出された。配石の中に縄文前期の土器片（第 92 図 23）が挟まっていたので、その時期の遺構と推定される。配石に用いられている石は、宮戸島の基盤凝灰岩角礫を用いている。調査区外にさらに広がるものと推定される。

３）まとめ

台囲地点の調査では縄文晩期初頭の２号竪穴建物の広がりとともに、縄文後期から晩期と推定される３号竪穴建物（柱穴のみ）を確認した。また、調査区の北西隅で縄文前期と推定される配石遺構を部分的に検出した。



第 92 図 里浜貝塚台囲地点出土土器

1 ～ 19：2 号竪穴建物出土土器　　20 ～ 23：配石遺構出土土器　　24 ～ 26：3 号竪穴建物出土土器

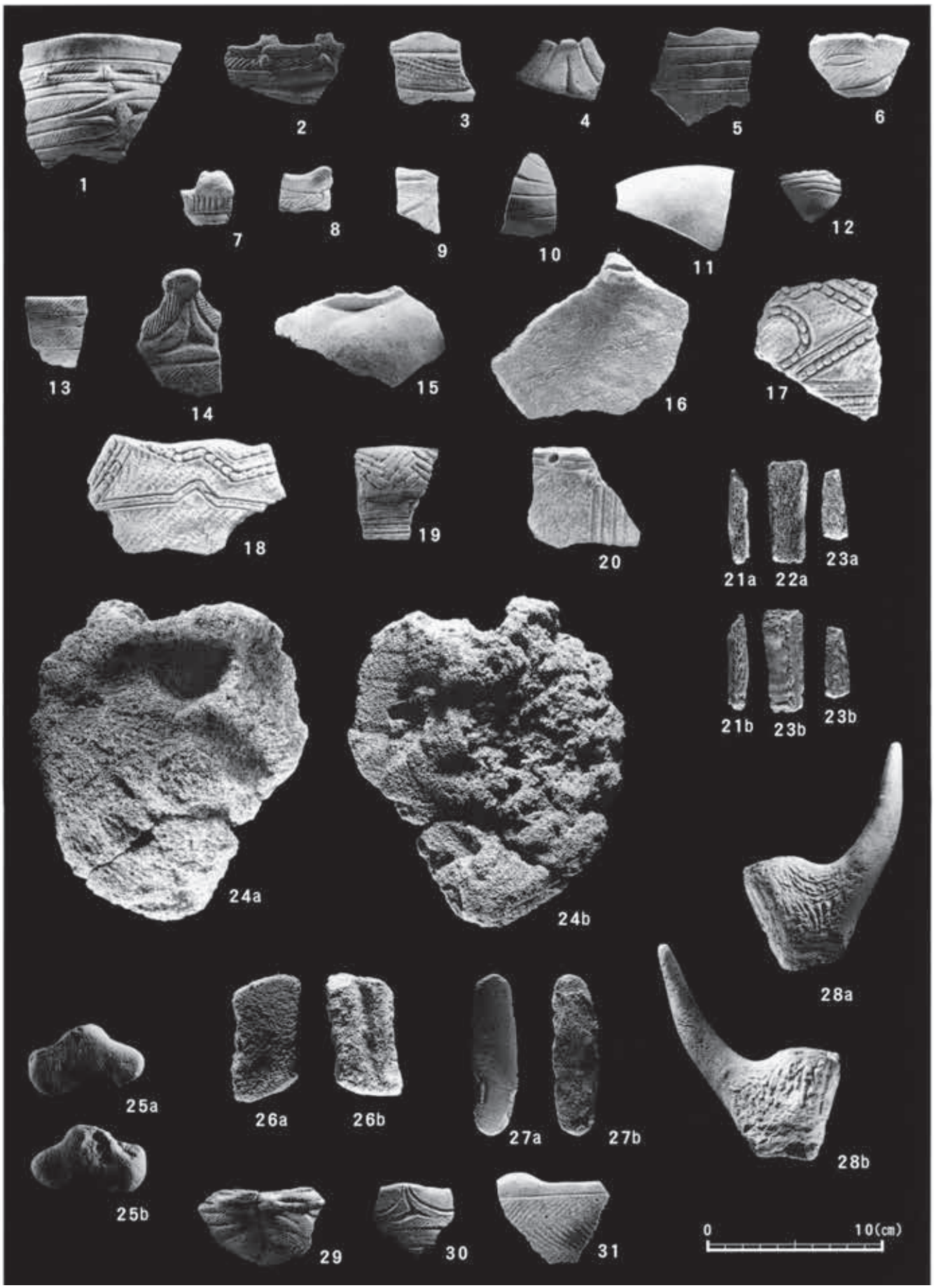


写真119 里浜貝塚台囲地点出土遺物

1～16：2号竪穴建物出土土器　17~20：配石遺構出土土器　21~23：鹿角片　24：鯨骨製骨皿　25：有孔石　26：有溝砥石　27：細長ハンマー
28：鹿角製剥離具（1~16、21~28: 2号竪穴建物出土）　29~31: 3号竪穴建物出土土器

１．２号竪穴建物（東から）

２．２号竪穴建物（南西から）

３．２号竪穴建物 鯨骨骨皿出土状況

４．２号竪穴建物 ハンマーストーン出土状況

５．２号竪穴建物２号土坑 鹿角製剝離具出土状況

６．３号竪穴建物跡（北東から）

７．３号竪穴建物（南東から）

８．配石遺構（南から）

写真120 台囲地点調査（第５次調査）

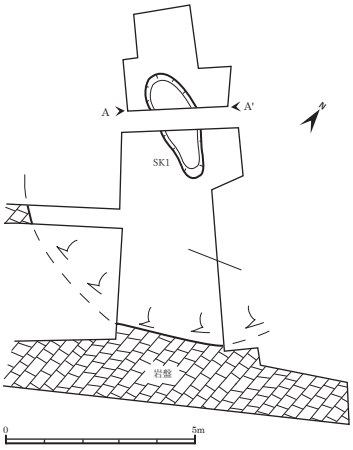
２．台囲東地点

（１）平成 15 年度調査〈第９次調査〉

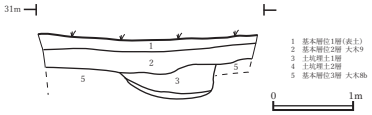
１）調査の概要

調査は、丘陵東端部の四阿建設計画地付近（北区）と南側のやや高まった部分（南区）に、それぞれ東西・南北の方向にトレンチを設定して行った（第 81 図）。

調査の結果、南区から北区の南半部にかけての区域は、表土下 15 ～ 20cm 程で岩盤（凝灰岩）に達した。貝層および遺構は検出されず、遺物も表土中からやや摩滅した縄文土器片が若干検出される程度であった。この周辺は現状ではほぼ平坦な地形を呈するが、本来はやや起伏のある地形であったものが、後世の削平によって改変されたものと考えられる。一方、北区の北半部は、北側に向かって地形が傾斜しており、縄文中期後葉（大木８b ～９式）の遺物を含む黒色土層の堆積（基本層位２、３層）が認められ、３層上面では土坑１基（ＳＫ１）が検出された（第 93・94 図）。



第 93 図 台囲東地点遺構平面図



第 94 図 ＳＫ１土坑断面図

２）出土遺物

台囲東地点の調査により約 500 点の縄文土器が出土したが、小破片や摩滅しているものが多い。

ＳＫ１土坑出土遺物（第 95 図１～ 14）

４は隆沈線によって渦巻文・横位楕円形区画文が描出され、区画内は刺突文が充填される。５は隆沈線によって渦巻文が施される。６は頚部無文の下に沈

沈線を巡らせ、胴部は不整形の区画文が描出される。７～９は、６と同様に沈線によって不正形の区画文が施される。10 ～ 12 は沈線で「∩」文が描出され、沈線間を磨消縄文で施されている。これらの土器は、１～９が大木８b 式、10 ～ 14 が大木９式と考えられる。

１層出土土器（第 95 図 15 ～ 18）

小破片が多く全体の器形は判明しないが、いずれも深鉢と考えられる。18、19 は隆沈線によって渦巻文・楕円形区画文が施されている。15、17 は沈線によって区画文や平行線文が施される。これらの土器は、隆沈線によって渦巻文や縄文施文後に沈線で文様を描出されていることなどから、大木８b 式と考えられる。

２層出土土器（第 95 図 19 ～ 26）

19、20 は隆沈線によって渦巻文・楕円形区画文が施されている。21 は隆沈線によって平行沈線が施される。23 は隆沈線による渦巻文に付随する棘状文と思われる。24 は平行沈線を描出、沈線間は磨消されている。26 は隆沈線によって横位の楕円形区画文が描出され、磨消縄文が施されている。これらの土器は、19 ～ 23、25 が大木８b 式、24 が大木９式、26 が大木 10 式と考えられる。

３層出土土器（第 95 図 27 ～ 45）

32、36、39、41、42 は沈線によって「∩」文・楕円文が描出され、沈線間を磨消縄文で施されている。31 は隆沈線によって不整形の区画文が施される。27 ～ 30、33 は隆沈線によって渦巻文・横位楕円形区画文が施される。40 は沈線によって平行線文や曲流文などが施される。43 は隆線によって横位楕円形区画文が施され、内部は磨消されている。また、隆線上には刺突文、胴部には撚糸文が施されている。これらの土器は、27 ～ 34、37、38、40 が大木８b 式、36、39、41、42 が大木９式と考えられる。

３）まとめ

これまで台囲の丘陵東斜面（台囲東斜面地点）では縄文時代前期の貝塚が確認されている（東北歴史資料館　1982）。今回の調査区はその斜面上位の平坦面に位置しており、縄文前期の遺構が検出されること想定していたが、調査の結果、縄文時代中期後葉の遺構、遺物が出土した。今回の調査では、貝層や居住域を示すような遺構は検出されなかったが、南西斜面に貝塚を形成した中期後葉のムラ（第４次調査）が丘陵の東端部まで広がりをもつことが確認された。

第 95 図 台囲東地点出土土器

第 49 表 台囲東地点出土縄文土器観察表

番号	出土層位	器種	文様、装飾等の特徴	型式
1	SK1	深鉢	隆線による渦巻文、LR縄文	大木8b
2	SK1	深鉢	沈線による渦巻文、LR縄文	大木8b
3	SK1	深鉢	沈線による楕円文、LR縄文	大木8b
4	SK1	深鉢	隆沈線による渦巻文・横位楕円形区画文（区画内刺突充填）	大木8b
5	SK1	深鉢	隆沈線による渦巻文・不整形区画文、ＲＬ縄文	大木8b
6	SK1	深鉢	頸：無文、胴：隆沈線による不整形区画文、ＬＲ縄文	大木8b
7	SK1	深鉢	沈線による楕円形区画文、ＬＲ縄文	大木8b
8	SK1	深鉢	沈線による不整形区画文、ＲＬ縄文	大木8b
9	SK1	深鉢	沈線による不整形区画文	大木8b
10	SK1	深鉢	沈線による「∩」文、磨消縄文	大木9
11	SK1	深鉢	沈線による「∩」文、磨消縄文、ＬＲ縄文	大木9
12	SK1	深鉢	沈線による「∩」文、磨消縄文、ＬＲ縄文	大木9
13	SK1	深鉢	拠糸文	大木9
14	SK1	深鉢	沈線	大木9
15	1層	深鉢	沈線による区画文	大木8b
16	1層	深鉢	隆沈線による楕円形区画文	大木8b
17	1層	深鉢	平行沈線、RL縄文	大木8b
18	1層	深鉢	隆沈線による渦巻文	大木8b
19	2層	深鉢	口：隆沈線による渦巻文・楕円形区画、胴：RL縄文	大木8b
20	2層	深鉢	隆沈線による渦巻文	大木8b
21	2層	深鉢	隆沈線による平行線文、沈線、RL縄文	大木8b
22	2層	深鉢	撚糸文	大木8b
23	2層	深鉢	隆沈線による（渦巻文の）棘状文	大木8b
24	2層	深鉢	平行沈線、磨消縄文、LR縄文	大木9
25	2層	深鉢	沈線、LRL縄文	大木8b
26	2層	深鉢	隆沈線による横位楕円形区画文、磨消縄文	大木10
27	3層	深鉢	口：隆沈線による渦巻文・楕円形区画、ＬＲ縄文、胴：隆沈線による渦巻文	大木8b
28	3層	深鉢	隆沈線による渦巻文	大木8b
29	3層	深鉢	隆沈線による渦巻文、不整形区画、RL縄文	大木8b
30	3層	深鉢	隆沈線による渦巻文	大木8b
31	3層	深鉢	隆沈線による楕円文または不整形区画、LR縄文	大木8b
32	3層	深鉢	隆沈線、LR縄文	大木8b
33	3層	深鉢	隆沈線による横位楕円形区画文	大木8b
34	3層	深鉢	沈線による区画文（区画内刺突充填）	大木8b
35	3層	深鉢	縦位沈線	大木8b
36	3層	深鉢	沈線、磨消縄文、ＬＲ縄文	大木9
37	3層	深鉢	沈線による曲線文、撚糸文	大木8b
38	3層	深鉢	沈線による曲線文、RL縄文	大木8b
39	3層	深鉢	沈線による「∩」文、LR縄文、磨消縄文	大木9
40	3層	深鉢	沈線による曲流文、RLR	大木8b
41	3層	深鉢	沈線による「∩」文、磨消縄文	大木9
42	3層	深鉢	沈線による「∩」文、円文、磨消縄文	大木9
43	3層	深鉢	隆沈線による横位楕円形区画文（内部磨消）、隆線上刺突、撚糸文	
44	3層	深鉢	底部：網代痕	中期後葉
45	3層	深鉢	沈線、撚糸文	中期後葉

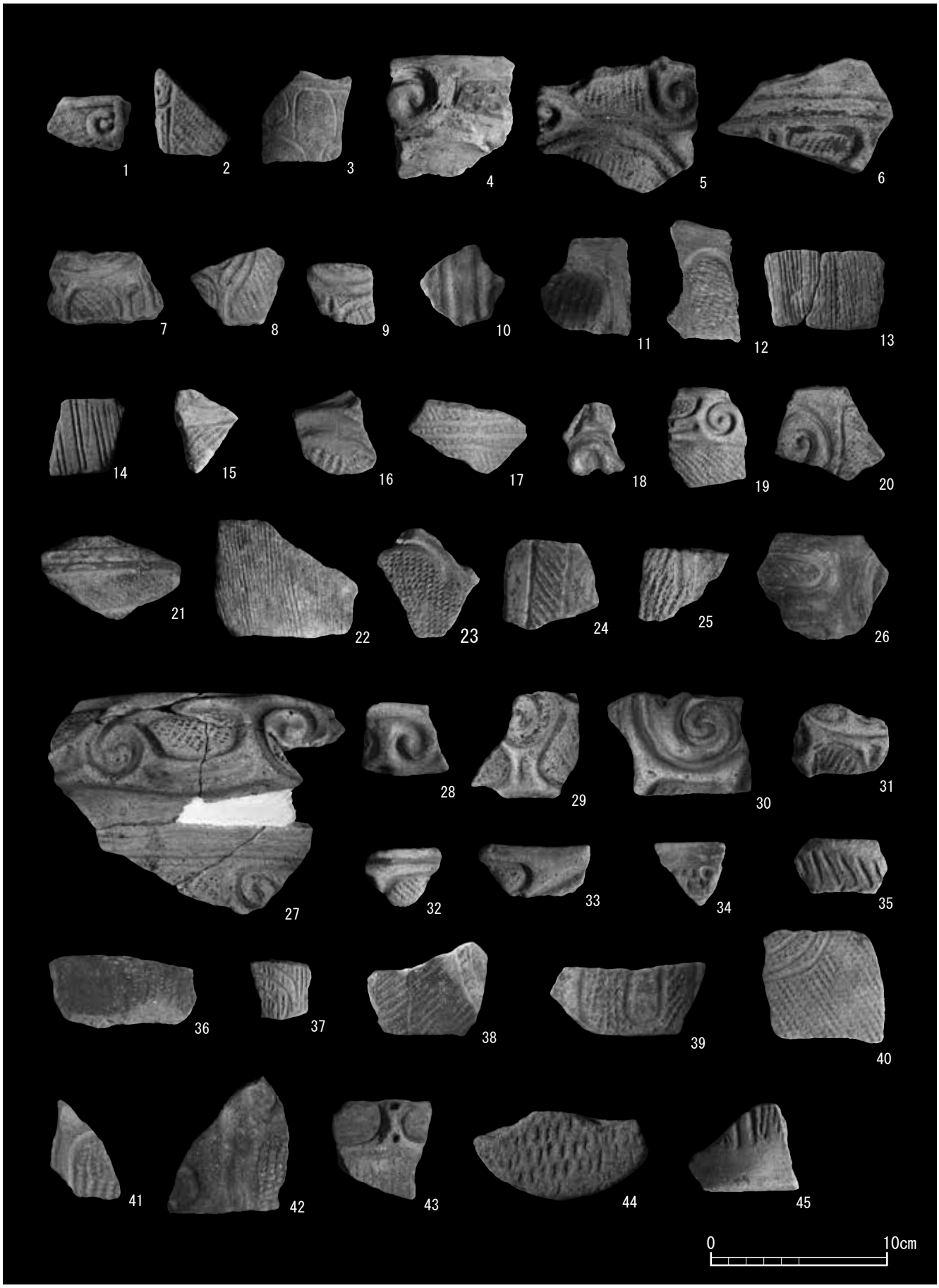


写真121 台囲東地点出土土器

台囲東地点遠景
（整備後、北東から）

台囲東地点
調査区（第９次調査）全景
（南から）

台囲東地点北区調査状況

ＳＫ１土坑検出状況（東から）

写真122 台囲東地点調査（第 9 次調査）

第４節　東貝塚の調査

１．梨木・畑中地点

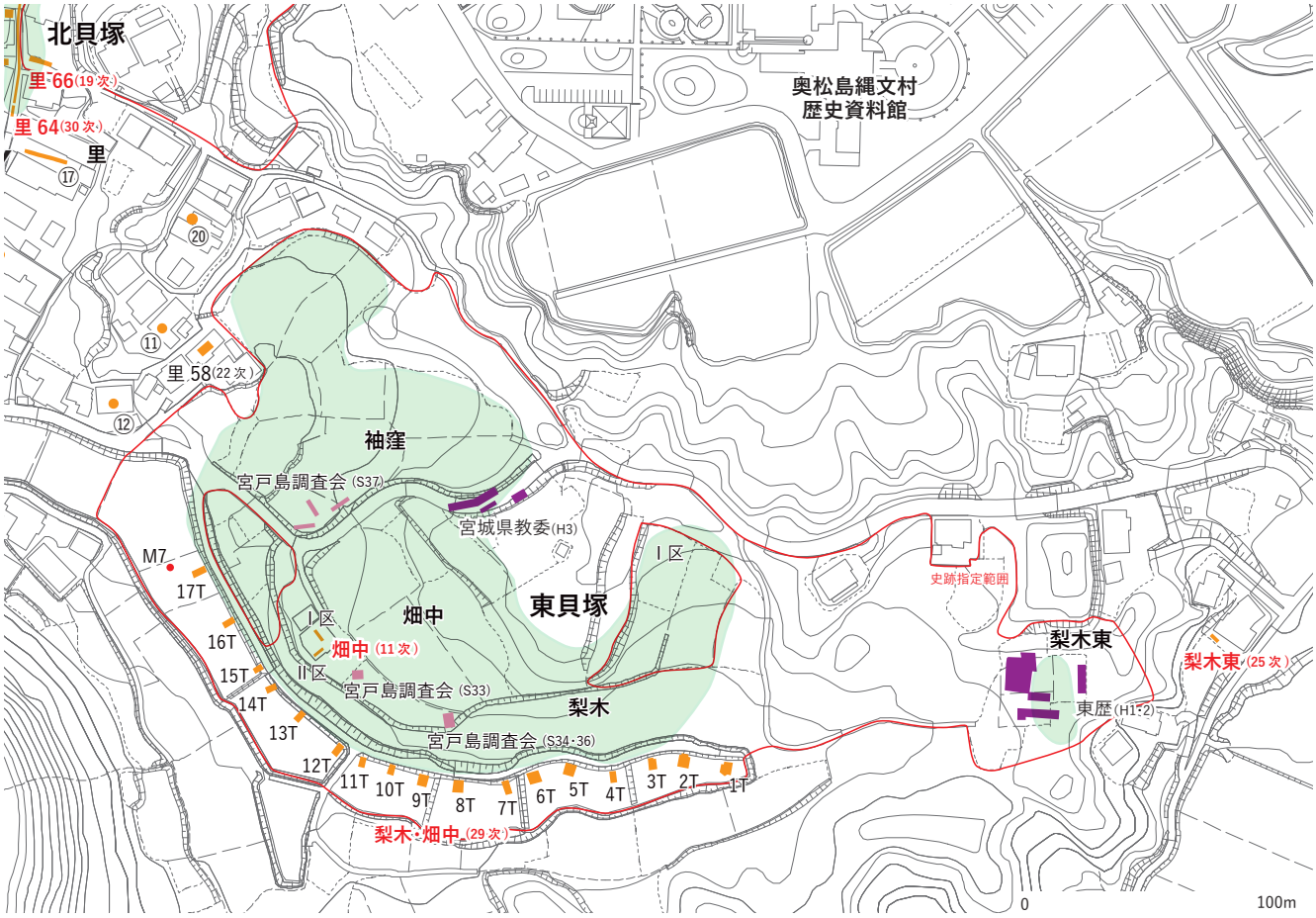
（１）平成 29 年度調査〈第 28 次調査〉

梨木・畑中（宮田 24 ～ 31）地点

① 調査の経緯

東貝塚（梨木・畑中・袖窪地点）は、外洋の波津々浦から曲がりくねって入り込む谷の奥部に位置する。梨木・畑中地点は、袖窪地点とともに里浜貝塚の南東部に位置する一連の貝塚である。昭和 30 年代に宮戸島遺跡調査会によって各地点の調査が行われている。畑中地点は昭和 33 年、梨木地点は 34、36 年、袖窪地点は 37 年に宮戸島遺跡調査会（東北大学教育学部）による小規模な発掘調査が行われ、縄文時代中期中葉から後期初頭にかけての貝塚が確認された。また、その後の分布調査や市道の拡幅工事に係る調査等で、標高 15 ～ 10 ｍの丘陵上の緩やかな斜面およびその縁辺部に沿って、広範囲に貝層が分布していることが明らかになっており、史跡の指定範囲は貝層の広がりが確認されている丘陵部から斜面下の低地（水田）にまで及んでいる。ただし、史跡内における丘陵斜面から低地に至る農道及び水田下の状況については、調査事例がなく詳細は不明のままだった（第 96 図）。

調査は、東日本大震災震災により被災した農地の復興整備工事に伴うもので、丘陵斜面下の農道拡幅と用排水路整備に係る部分を対象として行った。工事は農道を１ｍ程拡幅し、現田面から 30cm 下に集水パイプを埋設するもので、掘削範囲は水田の床土内に納まり史跡への影響はなく軽微な内容であったが、これまで明らかではなかった貝層の末端部の状況や泥炭層および谷奥部での水場遺構等の遺構の有無等、史跡内の内容確認を行う必要があり、工事計画に沿って確認調査を実施した。



第 96 図 東貝塚調査区位置図

② 調査の方法と概要

調査は、谷奥部の梨木地点から畑中地点にかけて、丘陵斜面下の農道（幅４～５ｍ）を挟んだ西側の旧水田の総長約250ｍを対象として、10～20ｍ間隔で17か所、丘陵斜面からの延長上に幅約３ｍのトレンチ（１～17トレンチ）を設定し、約210㎡の調査を行った（写真123）。

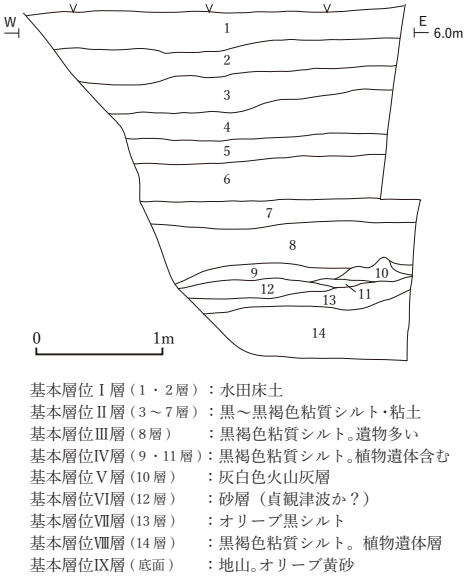
調査の結果、プライマリーな貝層･遺物包含層や遺構等は確認されず、斜面上の貝塚の末端も捉えることはできなかったが、縄文時代前期から晩期、弥生時代、古墳時代中期、平安時代（９世紀後半）の遺物が約40箱分出土した。いずれの調査区も水田の床土（耕作土）下２～３ｍ程で谷の落ち際もしくは底（岩盤）が検出され、貝塚が形成された丘陵を外洋（波津々浦）から入り込む谷が急傾斜で深く入り込み、開析している状況が確認された。

堆積土はいずれも自然堆積層（黒～黒褐色の粘質シルト・粘土）からなる。約半数の調査区の下層（地表下1.5～２ｍ）で灰白色火山灰（十和田ａ火山灰）が検出され、堆積層の大半は古代以降に堆積したものと考えられる。遺物の出土状況は面をなさず、各時期の遺物が混在するような状況で検出されたが、調査区相互で出土量や内容も異なっており、丘陵上の貝塚の時期や堆積状況、遺構の分布状況、場の使われ方等を反映している可能性が考えられる。遺物は、２～16トレンチから縄文時代前期前葉、中期前葉から晩期後葉、弥生時代後期の土器が出土した。量的には12～15トレンチで多く出土し、時期的には中期後葉から後期前葉にかけての土器が多い。７～13トレンチでは前期前葉、15・16トレンチでは晩期の土器が目立つ。また、12･13トレンチでは古墳時代中期（南小泉式）、２～９トレンチでは９世紀後半の土器が出土している。袖窪地点ではこれまでの調査で中期末から後期初頭にかけての貝塚が確認されており、今回の調査によって 東貝塚では広範囲に長期間にわたって集落が営まれていることが明らかになった。

なお、今回の調査で、現海岸から約700ｍの地点（９トレンチ）の現地表下約2.2ｍ下（標高４ｍ）で、周辺の表土や地山（岩盤）の土とは異なる海成砂を主体とした砂層が確認された（写真124）。径５～10mmの丸礫を含む厚さ15cmほどの堆積土で、その直上には灰白色火山灰（十和田ａ火山灰）の堆積が認められた（第97図）。同様の砂層は、17トレンチ付近でのボーリング調査（M7地点）でも確認され、年代測定の結果、貞観津波（869年）による堆積の可能性が指摘されている（第５章第１節１）。７トレンチで検出された砂礫層も層位的にみて貞観津波の可能性が高く、Ｍ７地点よりさらに約130ｍ奥まで到達したとみられる。

写真123 梨木・畑中地点調査区

写真124　７トレンチ堆積状況（津波層）



第 97 図　７トレンチ断面図

③ 出土遺物

土器はすべて破片で、全容がわかるものはない。ここでは、地点ごとに各トレンチから出土した時期的な特徴がわかる縄文土器のみ掲載する（写真 125 ～ 130、表 50・51）。

ａ．梨木地点

2 トレンチ（写真 125）

遺存状態が不良であるため縄文や調整等の詳細が確認できない。中期中葉から後期前葉・後葉の遺物が確認できる。

3 トレンチ（写真 125）

中期中葉の 1 点のみ確認。

5 トレンチ（写真 125）

2 トンレチと同様に遺存状態不良のため器面が荒れている。中期中葉から後期初頭の遺物が確認できる。

6 トレンチ（写真 125）

中期中葉の遺物が確認できる。器面の状態は良くない。

7 トレンチ（写真 125）

繊維を含む前期前葉土器から後期初頭・前葉の土器を含む。器面の状態は良くはない。

8 トレンチ（写真 125）

前期前半と、中期中葉から後期中葉までの土器を含む。器面の状態は良くない。この中では、南三十稲場系と推定取れる土器が注目される。類似する土器は、仙台市下ノ内浦遺跡 (吉岡ほか 1996) 等でも出土しており、県南地域では同時期にある程度組成される土器である。また、取手の一部と考えられる土器片が出土している。

ｂ．畑中地点

9 トレンチ（写真 125・126）

中期後半から後期中葉までの土器が出土している。とくに後期前葉の土器が多い。その中では、綱取Ⅱ式や堀之内 2 式と考えられる土器が確認できる。これらの他地域の土器は仙台市大野田遺跡 (主濱ほか　2014) 等でも確認されており、宮城県南地域では一般的に含まれている土器となる。なお南境式は、十腰内Ⅰ式との関連が考えられる (第 4 章第 2 節 1 参照)。そのほか、土器片を利用した円盤状土製品が 2 点出土している。

10 トレンチ（写真 125・126）

前期前葉のほか、中期中葉から後期前葉の時期の土器が確認できる。とくに中期末葉から後期前葉の土器が多く、そ

の中でも後期初頭土器が主体となる。

11 トレンチ（写真 127）

中期中葉から後期中葉の土器まで確認できる。とくに中期末葉から後期前葉の土器が多い。今回提示していない土器を含め、宮戸Ⅰｂ式とその新段階（15）が主体となっている。また、外面無文の内門ある浅鉢があり、加曽利 B1 式と推定される。器面の状態も良い。

12 トレンチ（写真 127 ～ 129）

出土遺物が多いトレンチである。前期初頭土器が少数ありつつも、中期中葉から後期前葉までの土器が多い。とくに後期の土器が、とくに宮戸Ⅰｂ式期の時期のものが主体となる。また、弥生後期の天王山式の頸部片が出土している。こうした弥生後期の天王山系の土器は、平成 9 年度調査地区（西畑北地点）でも出土している（註、会田 1998）。

13 トレンチ（写真 129）

前期初頭から後期前葉までの遺物が出土している。提示はしていないが繊維を含む土器片（胴部）も比較的出土している。

14 トレンチ（写真 129・130）

中期中葉から後期前葉の土器が出土している。とくに中期末葉からの土器が多い。三角壔土製品が出土している（写真 130 － 1 。阿部（2004）による岩手県の修正事例の中では、岩手県東和町安俵 6 区Ⅴ遺跡（瀬川ほか 2000）の事例と類似する。その事例は後期初頭（門前式）と推定されることから、本資料もその時期のものと推定される。ただし、安俵 6 区Ⅴ遺跡事例は長軸 10.3cm ×短軸 6.4cm であるのに対して、本資料（約 3.1 × 2.6cm）はおおむね 1/3 サイズとなりかなり小さい。

15 トレンチ（写真 130・131）

遺物の出土量が多く、大きさ・器面等の遺存状態が良い。中期中葉以降の土器が出土しているが、後期中葉、晩期後半（大洞 C2 式～大洞 A 式）の遺物がとくに多い。この中では、端面に赤褐色の鉱物？を埋め込んだ土器（130 － 8）が特徴的である。現在は向かって右側のみ遺存しているが、左には脱落痕がある。胎土の状態から偶発的に紛れ込んだものではなく、意図的に埋め込んだものであろう。

16 トレンチ（写真 131）

後期前葉・中葉、晩期後葉の土器が確認されている。後期前葉（堀之内 2 式）とした浅鉢は、内文があり口縁端部が直線的となっている。類似する事例は、仙台市大野田遺跡等にも認められる。また晩期の広口壺とした土器（10・11）は、接合はしないが同一個体であり、小形の土器と考えられる。

（註）　弥生土器については、鈴木雅氏（蔵王町教育委員会）、相澤清利氏（名取市教育委員会）のご教示を得た。

第 50 表 梨木・畑中地点出土縄文土器一覧表

地点名	トレンチ	前期前葉	中期前葉	中期中葉		中期後葉		後期前葉		後期中葉		後期後葉		晩期前葉	晩期中葉	晩期後葉	弥生後期
		上川名大木1	大木7b	大木8a	大木8b	大木9	大木10	門前式	宮戸Ⅰｂ	宮戸Ⅱａ	宮戸Ⅱｂ	西ノ浜	宮戸Ⅲａ	大洞B	大洞C2	大洞A	天王山
梨木地点	2				○				○				○				
	3・4				○												
	5				○	○	○	○									
	6				○												
	7	○						○	○								
	8	○		○	○		○		○	○							
畑中地点	9	○		○	○	○	○	◎	◎	○							
	10	○		○	○	○	◎	◎	◎								
	11				○	○	◎		◎	○							
	12	○			○	○	◎	◎	◎	○							○
	13	○	○		○	○	○	○	○								
	14				○	○	◎	◎	◎								
	15				○	○	○		○	◎	◎			○	◎	◎	
	16									○	○	○				○	

*型式名は、確認できた型式名のみ表示した。

1~7:2T、8:3T、9 ~15:5T、16･17:6T、
18~20:7T、21 ~31:8T、32 ~36:9T

写真125 梨木・畑中地点出土土器（1）

1~21:9T、22~32:10T

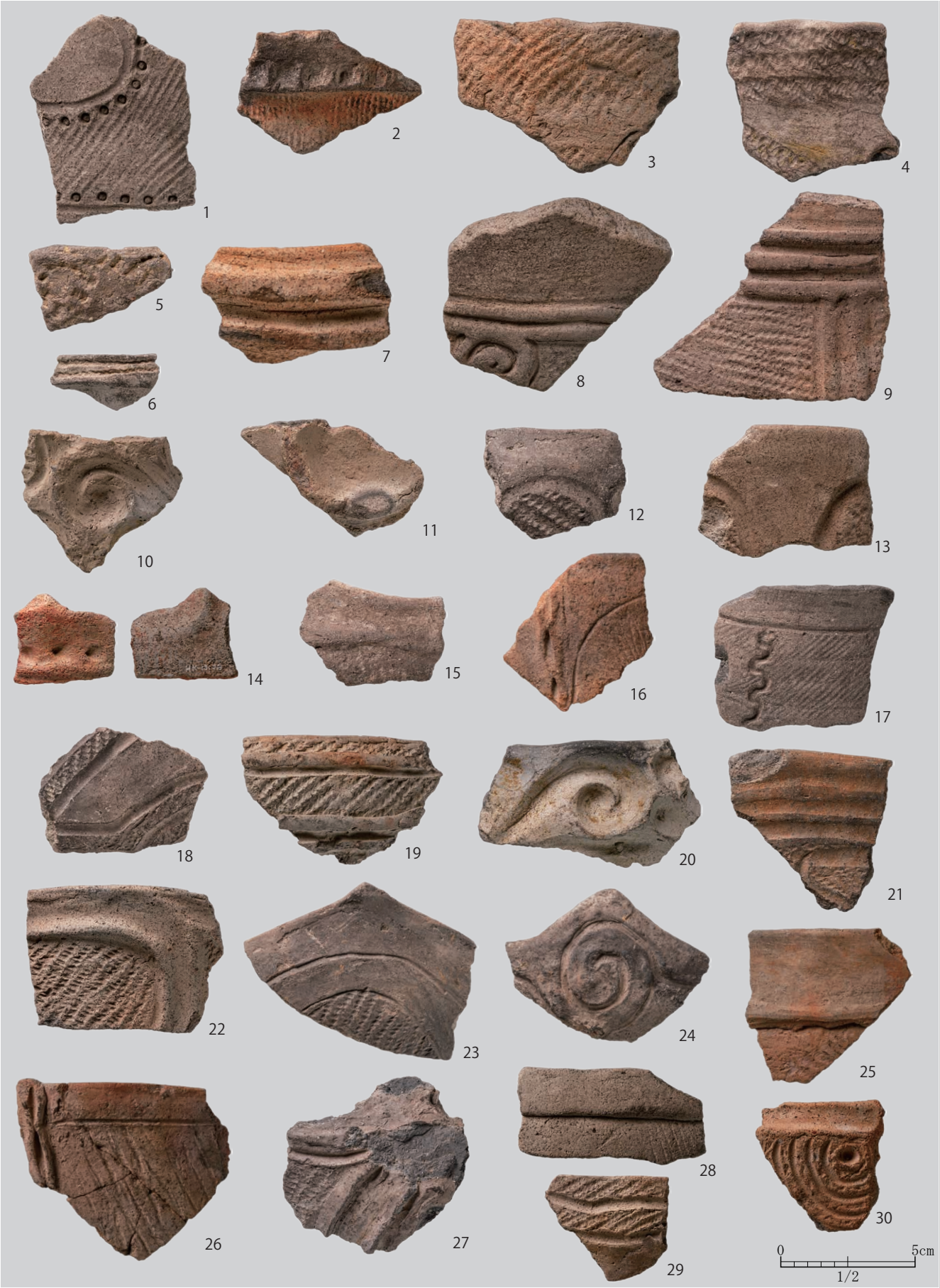
写真126 梨木・畑中地点出土土器（2）

1~5:10T、6~18:11T、19~30:12T

写真127 梨木・畑中地点出土土器（3）

1~29:12T

写真128 梨木・畑中地点出土土器（4）



1・2:12T、3~17:13T、18~30:14T

写真129 梨木・畑中地点出土土器（5）

1・2:14T、3~22:15T

写真130 梨木・畑中地点出土土器（6）

1~5:15T、6~11:16T

写真131 梨木・畑中地点出土土器（7）

第 51 表 梨木・畑中地点出土縄文土器観察表

写真	No.	区	時期	型式名	器形	部位	器厚(mm)	文様
125	1	2	中期中葉	大木8b式	深鉢	口縁部	6.5	口端部を肥厚させ端面上に沈線と渦巻文。縄文有。
125	2	2	中期中葉	大木8b式	深鉢	口縁部	8.2	口端部前面に渦巻文と刺突。
125	3	2	中期中葉	大木8b式	深鉢	口縁部	8.5	平行隆帯3条と左側に渦巻文?
125	4	2	中期中葉	大木8b式	深鉢?	胴部	9.1	隆帯で渦巻文等。
125	5	2	中期中葉	大木8b式	深鉢	口縁部	6.9	粘土貼付により口唇部肥厚。縦横沈線で文様。縄文RL縦。
125	6	2	後期前葉	宮戸Ⅰb式	深鉢	胴部	11.0	沈線で円文。縄文も施されているが不明。
125	7	2	後期後葉	宮戸Ⅲb式古段階?	深鉢?	口縁部～胴部上半	6.1	横2条の平行沈線を施し、その間に粘土粒貼付。
125	8	3	中期中葉	大木8b式	深鉢?	口縁部	7.3	端面に沈線。剥落部に刺突確認。縄文RL横。
125	9	5	中期中葉	大木8b式	深鉢	口縁部	8.5	波状口縁で端面沈線。隆帯により楕円状区画、内部に先細の円形工具で正面から刺突。下部は粘土貼付により肥厚。
125	10	5	中期中葉	大木8b式	深鉢	口縁部	11.4	キャリバー形。粘土貼付により突起部形成、上・横面に渦巻文。右側に短沈線状の連続刻目を上下二段。
125	11	5	中期後葉	大木9式	深鉢	口縁部	8.2	口縁部に粘土貼付し突起状波状口縁。その下部に円文。
125	12	5	中期後葉	大木9式	深鉢	口縁部	7.6	幅広の沈線で円文。
125	13	5	中期末葉	大木10式	深鉢	口縁部	9.0	浅く窪めた場所に上下二段の連続的な刺突。
125	14	5	後期初頭	門前式期	深鉢?	胴部	7.2	鎖状隆線の一部。
125	15	5	後期前葉	-	不明	胴部	10.8	縦方向の多状沈線文。
125	16	6	中期中葉	大木8b式	深鉢	口縁部	6.2	波状口縁。無文部下に横走沈線一条、その下に縄文。
125	17	6	中期中葉?	大木8b式?	深鉢?	胴部	6.3	円形・弧状の沈線。縄文LR縦。
125	18	7	前期前半	大木1式	深鉢	口縁部	7.5	端面に押圧。繊維を多量に含む。縄文RLループ文。
125	19	7	後期初頭	門前式期	深鉢	口縁部	8.0	小突起状の波状口縁。突起部から断面三角形の隆帯を垂下。右側には横走沈線。
125	20	7	後期前葉	宮戸Ⅰb式	深鉢	口縁部	7.6	口縁部下に横走沈線、その下に蛇行状等の縦方向沈線。
125	21	8	前期初頭～前期前葉	上川名式～大木1式	深鉢	口縁部	9.7	端面に連続する刻み。繊維を多量に含む。縄文RLR縦。
125	22	8	中期中葉	大木8a式	浅鉢	口縁部	8.3	端面に波状隆帯貼付。裏面に段がある。
125	23	8	中期中葉	大木8b式	深鉢	口縁部	6.7	キャリバー形。横走隆帯貼付。縄文RL縦。裏面に段。
125	24	8	中期末葉～後期初頭	大木10式	深鉢	口縁部	5.2	小さな波状口縁。頂部から隆帯斜位貼付。下に横走隆帯貼付し、縄文不明。
125	25	8	中期末葉～後期初頭	大木10式	深鉢	口縁部	7.9	口縁部下方に横走隆帯を貼付した痕跡が残る。
125	26	8	中期末葉～後期初頭	大木10式	深鉢	口縁部	6.8	口縁部下方に横走隆帯貼付し、その上に刺突列を施す。
125	27	8	中期末葉～後期初頭	大木10式	深鉢	口縁部	6.1	撚糸文R縦方向施文後、竹管にて横方向刺突。
125	28	8	後期前葉	南三十稲場系?	深鉢	突起部	10.8	端面に連続沈線。粘土貼付・沈線にて文様。裏面に縦沈線。
125	29	8	後期前葉	南境式?	深鉢	口縁部	6.1	縄文LR横後、横走沈線2条施す。
125	30	8	後期中葉	宮戸Ⅱa式	浅鉢?	口縁部	6.3	縄文RL縦。横走する平行沈線4条施す。裏面に段。
125	31	8	後期前葉?	-	不明	取手?	12.5	取手状。中央部に細い工具で縦方向に刺突する。
125	32	9	前期初頭	上川名式	深鉢	口縁部	8.0	繊維多量に含む。前面に粘土紐貼付し連続刺突。縄文RL横。
125	33	9	中期中葉	大木8a式	深鉢	口縁部	6.9	口唇部下に隆帯貼付、上下に押圧縄文LR。裏面に段。
125	34	9	中期中葉	大木8b式	深鉢	口縁部	5.9	頸部に横走平行沈線2条。その下部に文様。
125	35	9	中期中葉	大木8b式	深鉢	口縁部	9.0	端面粘土貼付し肥厚させ方形に。口縁部下沈線。斜行隆帯貼付し沈線を沿わせる。縄文LR横。
125	36	9	中期末葉～後期初頭	大木10式	深鉢	口縁部	7.2	口縁部下に撚糸文Rを縦後、横走沈線。
126	1	9	中期後葉	大木9b式	深鉢	胴部	7.3	縄文RL縦。丁寧に磨かれ浅い窪みとなる沈線で文様を描く。
126	2	9	中期末葉	大木10式	深鉢	胴部	7.9	隆帯貼付後、その中を粗く磨く。縄文RL縦施文し充填。
126	3	9	中期末葉～後期初頭	大木10式	深鉢	口縁部	6.5	隆帯貼付後に上部に横方向連続刺突。下部に撚糸文R縦。
126	4	9	後期初頭?	門前式期?	深鉢	口縁部	6.8	隆帯貼付後に上部に横方向連続刺突。下部に縦方向刺突。
126	5	9	後期初頭	門前式期	深鉢	口縁部	5.8	小さな波状口縁。頂部から鎖状隆線が垂下。
126	6	9	後期初頭	門前式期	深鉢	口縁部	6.8	小さな波状口縁。ボタン状貼付、鎖状隆線横走。撚糸文?。
126	7	9	後期初頭	門前式期	深鉢	口縁部	5.6	貼付による突起。ボタン状貼付。そこから沈線を垂下。
126	8	9	後期前葉	綱取Ⅱ式期	深鉢	口縁部	9.3	緩やかな波状口縁?。頂部から半円状の線。頸部横走隆帯。
126	9	9	後期前葉	綱取Ⅱ式期	深鉢	口縁部	9.3	半円状に複数弧線垂下。縄文LR縦。
126	10	9	後期前葉	南境式	深鉢	口縁部	5.6	縄文RL縦後に幅広沈線で文様。沈線の交点に垂直に刺突。
126	11	9	後期前葉	南境式	深鉢?	口縁部	8.2	縄文LR縦施文後に幅広い沈線で文様描く。
126	12	9	後期前葉	南境式	深鉢	口縁部	7.0	縄文LR横回転後に幅広い沈線横走、下部に縦方向沈線。
126	13	9	後期前葉	南境式	深鉢	口縁部	7.6	縄文LR斜位・縦後、幅広横走沈線、縦方向沈線を数条。

写真	No.	区	時期	型式名	器形	部位	器厚(mm)	文様
126	14	9	後期前葉	南境式	深鉢	口縁部	6.5	縄文LR横。その後に幅広い沈線で文様。
126	15	9	後期中葉	宮戸Ⅱa式	浅鉢	口縁部	6.8	口縁部やや肥厚、端面方形。沈線で文様。縄文LR?。
126	16	9	後期前葉	堀之内2式期	深鉢	口縁部	6.5	波状口縁頂部に粘土貼付により立体的な突起。横走隆帯を貼付後押圧。突起下にボタン状貼付。その下に沈線と縄文LR縦方向。裏側口唇部直下に横走沈線1条。
126	17	9	後期中葉	宮戸Ⅱa式	浅鉢	口縁部	6.3	口縁部をやや肥厚。平行沈線2条横走。縄文LR横。
126	18	9	後期中葉	宮戸Ⅱa式	深鉢	胴部	6.9	多条横走平行沈線を波状縦沈線で連結。縄文LR縦?。
126	19	9	後期中葉?	-	深鉢?	胴部	7.5	沈線による方形区画の中に横走沈線と縄文LR。
126	20	9	中期末葉?	大木10式?	-	-	7.3	円盤状土製品。縄文RLと幅広の浅い沈線による文様。
126	21	9	後期前葉?	-	-	-	8.9	円盤状土製品。撚糸文と沈線による文様。
126	22	10	前期前葉	大木1式	深鉢	胴部	11.2	縄文LR+RLによる羽状縄文。繊維含むが多くはない。
126	23	10	中期中葉	大木8a式	深鉢	頸部	6.9	隆帯3条、間に波状隆帯。調整はしない。隆帯間に縄文LR。
126	24	10	中期中葉	大木8b式	深鉢	口縁部～頸部	2.5	キャリパー型。口縁部に隆帯で渦巻文。頸部下平行沈線3条。縄文RL縦。
126	25	10	中期後葉	大木9式	深鉢	胴部	8.8	三角形状となる隆帯で曲線的な文様を描く。縄文RL横。
126	26	10	中期後葉	大木9式	深鉢	口縁部	5.9	幅広沈線で逆U字状文。中は丁寧には磨かない。縄文RL縦。
126	27	10	中期末葉	大木10式	深鉢	口縁部	8.0	口縁部付近は無文とし幅広で浅い沈線で曲線。縄文RL縦。
126	28	10	中期末葉～後期初頭	大木10式	深鉢	口縁部	6.8	断面三角形状の横走隆帯。以下は条線状の痕跡を残す粗い撫で。内面も同じ。下部には縄文L?の押圧。
126	29	10	後期初頭	門前式期	深鉢	口縁部	7.3	横方向連続刺突列。縦方向の刺突列を接続。撚糸文R縦。
126	30	10	後期初頭	門前式期	深鉢	口縁部	4.9	横走隆帯。隆帯上部には横方向の連続的な刺突。
126	31	10	後期初頭	門前式期	深鉢	口縁部	5.1	低い横走隆帯上に横方向連続刺突列(鎖状隆線)。横走沈線。
126	32	10	後期初頭	門前式期	深鉢	口縁部	6.7	低い横走隆帯上に横方向連続刺突列(鎖状隆線)。横走沈線。
127	1	10	後期初頭	門前式期	深鉢	口縁部	6.2	口唇部から弧状に鎖状隆線を垂下させ、横走鎖状隆線接続。
127	2	10	後期前葉	宮戸Ⅰb式	深鉢	口縁部	8.0	緩やかな波状口縁。頂部より垂線、横走沈線・弧線等。
127	3	10	後期初頭	門前式期	深鉢	胴部	8.2	横走隆帯に斜行隆帯接続。交点にボタン状貼付。縄文LR縦。
127	4	10	後期初頭	門前式期	深鉢	口縁部	7.2	粘土貼付による突起。上部に沈線による渦巻文、下部に孔。下にボタン状貼付文や沈線で文様。突起裏面に渦巻文。
127	5	10	後期前葉	綱取Ⅱ式期	深鉢	胴部	5.3	縄文RLやや斜位方向施文後、多条沈線にて円文等。
127	6	11	中期中葉?	大木8b式?	深鉢	口縁部	8.6	隆帯と沈線による文様。縄文LR確認。大木9式の可能性。
127	7	11	中期後葉	大木9式	深鉢	胴部	5.6	縄文LR縦方向施文後、幅広い浅い沈線で縦方向の文様。
127	8	11	中期末葉	大木10式	深鉢	胴部	5.3	沈線で無文部区画。無文部はやや盛上がる。縄文LR充填か。
127	9	11	中期末葉	大木10式	深鉢	胴部	7.8	隆帯貼付後に縄文LR。
127	10	11	中期末葉	大木10式	深鉢	口縁部	8.8	内湾する器形。太めの浅い沈線による曲線を描く。
127	11	11	中期末葉～後期初頭	大木10式	深鉢	口縁部	7.8	横走隆帯。その下部に撚糸文R。
127	12	11	中期末葉～後期初頭	大木10式	深鉢	口縁部	6.0	横走沈線。その下部に撚糸文R縦。
127	13	11	中期末葉～後期初頭	大木10式	深鉢	口縁部	6.1	横走隆帯。その上部に横方向の連続刺突列。
127	14	11	後期前葉	宮戸Ⅰb式	深鉢	口縁部	5.2	緩やかな波状口縁。頂部から下方向刺突。横方向刺突列。
127	15	11	後期前葉	宮戸Ⅰb式	深鉢	口縁部	6.5	横走沈線。弧状沈線を数条垂下させる。撚糸文R?縦。
127	16	11	後期前葉	宮戸Ⅰb式	深鉢	胴部	7.5	複数沈線交差。間に刺突列。上から蛇行沈線。撚糸文R縦。
127	17	11	後期中葉	加曽利B1式	浅鉢	胴部	6.4	外面無文。端面欠。内面に粘土貼付により段を作成し、上部に刺突列。その下部に浅い沈線2条引き、中央が盛り上がる。その上部に押し引き。
127	18	11	中期末葉～後期初頭?	大木10式	-		7.3	円盤状土製品。沈線1条と細かな撚糸文R。
127	19	12	中期中葉	大木8a式	深鉢	口縁部	9.1	三角形状隆帯貼付後、その上部に突起と波状粘土紐貼付し連続刻目。隆帯貼付後押圧縄文L縦。裏面に段。
127	20	12	前期初頭	上川名式	深鉢	口縁部	6.5	端面に押圧。繊維を多量に含む。縄文LR。
127	21	12	中期中葉	大木8a式	深鉢	口縁部	6.8	端面に沈線。表面に隆線3条、調整はしない。縄文LR横。
127	22	12	中期中葉	大木8b式	不明	口縁部	8.9	口縁前面に粘土貼付により肥厚。下部に太めの隆帯・沈線。
127	23	12	中期中葉	大木8b式	深鉢	口縁部	9.5	太めの隆帯及び沈線で文様を描く。撚糸文L?斜位。
127	24	12	中期中葉	大木8b式	深鉢	口縁部	8.5	波状口縁の頂部。隆帯で円文・渦巻文。
127	25	12	中期中葉	大木8b式	深鉢	口縁部	9.4	キャリパー型。縄文LR後に隆線と沈線で文様を描く。
127	26	12	中期中葉	大木8b式	深鉢	口縁部	10.2	隆帯と沈線により横展開の渦巻文等を配置。縄文LR横。
127	27	12	中期後葉	大木9式	深鉢	口縁部	7.0	逆U字状の文様を沈線で描く。縄文LR縦後、磨く。
127	28	12	中期末葉?	大木10式?	深鉢	口縁部	6.7	平らな横走隆帯。下に横走沈線。撚糸文L縦。大木8b式?。
127	29	12	中期末葉	大木10式	深鉢	口縁部	5.6	横走沈線。その下に縄文RL縦。
127	30	12	中期末葉～後期初頭	大木10式	深鉢	口縁部	5.0	口唇部やや下に横方向の連続刺突列。下に撚糸文R?縦。

写真	No.	区	時期	型式名	器形	部位	器厚(mm)	文様
128	1	12	中期末葉?	大木10式?	注口	注口部	5.4	注口下部に縄文LR。
128	2	12	中期末葉	大木10式	深鉢	口縁部	6.8	緩やかな波状口縁。頂部からノの字状貼付、下で横走隆帯接続。沈線を2本垂下させ間を磨く。撚糸文R縦。
128	3	12	中期末葉	大木10式	深鉢	口縁部	7.0	緩やかな波状口縁。頂部からノの字状貼付、下で横走隆帯接続。撚糸文R縦。
128	4	12	中期末葉～後期初頭	大木10式	深鉢	口縁部	3.4	横方向の連続刺突列。下に撚糸文R横。
128	5	12	中期末葉～後期初頭	大木10式	深鉢	口縁部	8.0	横方向の連続刺突列。下に刷毛目あるいは撚糸文?縦。
128	6	12	中期末葉～後期初頭	大木10式	深鉢	口縁部	8.2	横方向の連続刺突列。下に斜め方向の沈線確認。
128	7	12	中期末葉～後期初頭	大木10式	深鉢	口縁部	8.7	横方向の隆帯。その下に撚糸文R縦。
128	8	12	中期末葉～後期初頭	大木10式	深鉢	口縁部	6.8	内湾する器形。横方向の隆帯。その上に横方向連続刺突文。下に撚糸文R縦。
128	10	12	中期末葉～後期初頭	大木10式	深鉢	口縁部	6.5	緩やかな波状口縁。頂部からノの字状貼付、下部で隆線接続。下には沈線確認。
128	9	12	後期初頭	門前式期	深鉢	口縁部	6.9	内湾する器形。横方向の隆帯。隆帯上に横方向連続刺突文(鎖状隆線)。隆帯下位には撚糸文R縦。
128	11	12	後期初頭	門前式期	深鉢	口縁部	8.0	緩やかな波状口縁。頂部端面押圧。波長部下刺突。隆帯上部に横方向連続刺突列。下に縄文RL。
128	12	12	後期初頭	門前式期	深鉢	口縁部	8.0	緩やかな波状口縁。頂部から弧状隆線貼付、下方から刺突。この隆線の中頃から横方向連続刺突列。弧状隆線下部沈線。
128	13	12	後期初頭	門前式期	深鉢	口縁部	6.9	横方向隆帯貼付後、連続的な刺突列(鎖状隆線)。撚糸文?。
128	14	12	後期初頭	門前式期	深鉢	胴部下半	6.6	弧を描く鎖状隆線。無文部は丁寧に磨く。縄文RL斜位。
128	15	12	後期初頭	門前式期	深鉢	口縁部	7.5	突起基部。垂下する隆線の下方に鎖状隆線の一部確認。
128	16	12	後期初頭	三十稲場式期	深鉢	口縁部	6.1	波状口縁。頂部端面はやや平ら。器面は刺突にて充填。
128	17	12	後期初頭	門前式期	深鉢	口縁部	10.5	橋状突起部。端面に沈線。
128	18	12	後期前葉	宮戸Ⅰb式	深鉢	口縁部	7.4	横方向の連続的刺突列。下方からの刺突。弧線垂下。
128	19	12	後期前葉	宮戸Ⅰb式	深鉢	口縁部	7.8	幅広の浅い沈線で文様を描く。撚糸文L?斜位。20と類似。
128	20	12	後期前葉	宮戸Ⅰb式	深鉢	口縁部	8.3	幅広の浅い沈線で文様を描く。撚糸文L?斜位。19と類似。
128	21	12	後期前葉	宮戸Ⅰb式	深鉢	口縁部	8.1	波状口縁。頂部から斜位沈線。沈線にて文様。撚糸文?縦。
128	22	12	後期前葉	宮戸Ⅰb式	深鉢	口縁部	6.2	横方向沈線と複数弧線を垂下。撚糸文L?縦。
128	23	12	後期前葉	宮戸Ⅰb式	深鉢	口縁部	7.9	横走沈線。竹管刺突。沈線・蛇行沈線垂下。撚糸文R縦。
128	24	12	後期前葉	宮戸Ⅰb式	深鉢	口縁部	7.2	緩やかな波状口縁。頂部下に縦長楕円文。縦方向沈線で文様。撚糸文?。
128	25	12	後期前葉	宮戸Ⅰb式	深鉢	口縁部	6.6	横走沈線。そこから蛇行沈線垂下。
128	26	12	後期前葉	宮戸Ⅰb式?	鉢?	口縁部	5.3	緩やかな波状口縁。横走沈線。逆の字状等を沈線で描く。縄文LR横。
128	27	12	後期前葉	綱取Ⅱ式期	不明	口縁部	4.9	口縁部がくの字に屈曲。上面に深い沈線2条引き孔と接続。
128	28	12	後期前葉～後期中葉?	不明	壺?	胴部	8.5	2条の平行沈線を横走。縄文LR横。
128	29	12	後期前葉	綱取Ⅱ式期	深鉢	胴部	6.4	3条一組の沈線で文様を描く。部分的に縄文確認。
129	1	12	後期中葉	宮戸Ⅱa式	深鉢	胴部	7.2	曲線的な沈線で文様。沈線に竹管による刺突列。縄文LR。
129	2	12	弥生後期	天王山系	壺	頸部	5.9	頸部で段状に成形。段上部に連続押圧列。下に撚糸文R縦。
129	3	13	前期初頭	上川名式	深鉢	口縁部	8.8	繊維多量に含む。縄文LR横。
129	4	13	前期前葉	大木1式	深鉢	口縁部	5.9	繊維含む。ループ文で文様。
129	5	13	前期初頭	上川名式	深鉢	口縁部	6.7	繊維多量に含む。連続的な刺突による文様。
129	6	13	中期前葉	大木7b式	小型	口縁部	2.9	粘土貼付により口縁部で段を成形する。横走押圧縄文LR。
129	7	13	中期中葉	大木8b式	深鉢	口縁部	9.8	キャリパー型の器形。台形隆帯2条貼付。下部に縄文。
129	8	13	中期中葉	大木8b式	深鉢	頸部	11.8	横走隆帯2条、渦巻文を接続。縄文RL縦。
129	9	13	中期中葉	大木8b式	深鉢	頸部	8.9	横走隆帯3条、沈線沿わした隆帯垂下。縄文LR斜位。
129	10	13	中期後葉	大木9式	深鉢	頸部	6.9	断面三角形状隆帯等で渦巻文等を描く。縄文確認。
129	11	13	中期後葉	大木9式	深鉢	頸部	6.4	三角形状隆帯により弧状に成形。円文あるいは渦巻文。
129	12	13	中期後葉	大木9式	深鉢	口縁部	6.2	内湾する器形。幅広で浅い沈線による楕円文。縄文LR縦。
129	13	13	中期後葉	大木9式	深鉢	口縁部	8.3	外反する器形。幅広で深い沈線による楕円文。縄文LR縦。
129	14	13	中期末葉～後期初頭	大木10式	深鉢	口縁部	3.9	端面に粘土貼付し突起。裏にノの字状貼付。横走隆帯、その上に横方向連続刺突列。
129	15	13	中期末葉～後期初頭	大木10式	深鉢	口縁部	6.3	緩やかな波状口縁。横走隆帯。撚糸文L縦。
129	16	13	後期初頭	門前式期	深鉢	口縁部	5.2	鎖状隆線垂下。弧状の沈線の中に撚糸文R?。
129	17	13	後期前葉	宮戸Ⅰb式	深鉢	口縁部	5.2	横走沈線。蛇行沈線を垂下。縄文RL縦。
129	18	13	後期前葉	南境式	深鉢?	胴部	6.9	幅広の浅い沈線で文様描く。縄文LR斜位。
129	19	14	中期中葉	大木8b式	深鉢	口縁部	7.4	キャリパー形。縄文RL縦施文後、隆帯と沈線を横走。

写真	No.	区	時期	型式名	器形	部位	器厚(mm)	文様
129	20	14	中期後葉	大木9式	深鉢	口縁部	6.1	粘土貼付により立体的渦巻文等。隆帯断面は三角形状。
129	21	14	中期後葉	大木9式	深鉢	口縁部	7.6	幅広の浅い沈線。下にLR縄文縦後に曲線的な文様。
129	22	14	中期末葉	大木10式	深鉢	口縁部	6.7	隆帯にて方形状の文様。口縁部・隆帯間は磨く。縄文RL縦。
129	23	14	中期末葉	大木10式	深鉢	口縁部	6.2	波状口縁。頂部は粘土貼付にて肥厚。細い沈線で文様。縄文RL縦。
129	24	14	中期末葉?	大木10式?	深鉢	口縁部	6.6	内湾する器形、波状口縁。頂部に沈線渦巻文。縄文RL。
129	25	14	中期末葉	大木10式	深鉢	口縁部	6.4	横走隆帯。縄文R縦方向。
129	26	14	後期初頭	門前式期	深鉢	口縁部	6.5	口唇部から鎖状隆線垂下。横走沈線、下を撚糸文R縦。
129	27	14	後期初頭	門前式期	深鉢	口縁部	4.9	内湾する器形。橋状突起部剥落。弧状の隆帯を垂下させる。縄文RL縦。
129	28	14	後期前葉?	-	深鉢	口縁部	7.2	口縁部を折返口縁とし段を形成。撚糸文?縦。
129	29	14	後期前葉	南境式	深鉢	口縁部	6.7	幅広の浅い沈線2条。破片右端に刺突痕。縄文RL縦。
129	30	14	後期前葉	綱取Ⅱ式期	深鉢	口縁部	6.8	口縁部に段を形成し、その下部に孔を起点とした弧状沈線。
130	1	14	-	-	-	-	31.3×26	三角壔土製品。2面に刺突。長軸端部にも刺突。底面はやや凹む。
130	2	14	後期中葉	宮戸Ⅱa式	浅鉢?	口縁部	6.0	端面部がやや厚く、端面方形。横走平行沈線。縄文RL縦方向。
130	3	15	中期中葉	大木8b式	深鉢	口縁部	8.4	キャリパー形。隆帯で渦巻文等。区画内に刺突列上下二段。
130	4	15	中期中葉	大木8b式	深鉢	頸部	5.8	上半部に隆帯貼付。下部に浅い凹み状の沈線。縄文LR縦?。
130	5	15	中期後葉	大木9式	浅鉢	口縁部	6.5	粘土貼付により口唇部付近を肥厚。縦方向の細い沈線。
130	6	15	中期末葉	大木10式	深鉢	口縁部	8.7	やや内湾。粘土貼付により舌状張出し成形。縄文RL縦
130	7	15	中期中葉	大木8b式	深鉢	口縁部	5.5	キャリパー形。三角形状隆帯で渦巻文等。区画内に縄文RL。
130	8	15	後期初頭	大木10式	深鉢	口縁部	8.5	横走隆帯。上部に横方向連続刺突列。口唇部に小礫を意図的に埋め込み。
130	9	15	後期前葉	宮戸Ⅰb式	深鉢	口縁部	6.4	波状口縁。頂部は押圧により凹む。縦・横の刺突列。下に弧線・条線。
130	10	15	後期前葉	宮戸Ⅰb式	深鉢	口縁部	7.9	内湾する器形。縦方向沈線で弧状等。撚糸文R?縦施文。
130	11	15	後期前葉	南境式	深鉢	口縁部	6.2	波状口縁。幅広の浅い沈線。交点に竹管刺突。縄文LR横。
130	12	15	後期前葉	南境式	深鉢	口縁部	7.2	波状口縁。幅広の浅い沈線3条。縄文LR縦。
130	13	15	後期前葉	南境式	深鉢	口縁部	5.4	幅広の浅い横走沈線。縄文確認。
130	14	15	後期中葉	宮戸Ⅱa式	壺	胴部	6.6	2条一組の沈線で曲線的な文様。間には縄文LR。
130	15	15	後期中葉	宮戸Ⅱa式	鉢?	口縁部	5.8	口唇部がやや肥厚。裏面に段。横走平行沈線と鋭角的に屈曲する沈線。縄文RL?縦。
130	16	15	後期中葉	宮戸Ⅱa式	鉢?	口縁部	5.1	口唇部がやや肥厚。裏面に段。横走平行沈線と鋭角的に屈曲する沈線。縄文RL?縦。
130	17	15	後期中葉	宮戸Ⅱa式	鉢	口縁部	6.6	口縁部に横走平行沈線5条。その区画には縄文RL縦。
130	18	15	後期中葉	宮戸Ⅱa式	鉢	口縁部	6.7	口唇部肥厚。内側がせり出す。沈線で文様を描き、縄文RL。
130	19	15	後期中葉	宮戸Ⅱb式	深鉢	口縁部	9.8	大波状口縁突起部。突起沈線1条。下に半円状。縄文LR横。
130	20	15	後期中葉	宮戸Ⅱb式	深鉢	胴部	6.9	横走沈線。刺突列を沿わせる。縄文RL縦。
130	21	15	後期中葉	宮戸Ⅱb式	深鉢	底・脚部	9.1	文様は24と同じ。縄文LR横。
130	22	15	晩期初頭	大洞B1式	深鉢	口縁部	6.3	細い沈線で曲線状の文様。縄文LR充填。
131	1	15	晩期中葉～晩期後葉	大洞C2式～大洞A式	深鉢	口縁部～胴部上半	5.4	口唇部裏面に浅い沈線。端面に連続的な押圧。平行沈線3条。縄文RL?縦。
131	2	15	晩期中葉～晩期後葉	大洞C2式～大洞A式	深鉢	口縁部～胴部上半	4.7	口唇部裏面に浅い沈線。端面に連続的な押圧。平行沈線2条。縄文RL縦。
131	3	15	晩期中葉～晩期後葉	大洞C2式～大洞A式	深鉢	口縁部～胴部上半	6.2	やや前面に外反する小波状口縁。口縁部裏面に沈線。縄文LR横・斜位。
131	4	15	晩期中葉～晩期後葉	大洞C2式～大洞A式	深鉢	口縁部～胴部上半	5.2	緩やかな波状口縁。口縁部付近を無文とし、胴部には縦方向の条線。
131	5	15	晩期後葉	大洞A式	台付浅鉢	胴部下半～脚部	4.6	脚部に工字文。
131	6	16	後期中葉	宮戸Ⅱa式	深鉢	口縁部	6.8	口縁直下から横走する沈線・隆帯。縄文LR斜位・縦。
131	7	16	後期中葉	堀之内2式期	浅鉢	口縁部	8.3	表面無文。内面に多重沈線で文様を描く。縄文確認。
131	8	16	後期中葉	宮戸Ⅱb式	深鉢	胴部	9.8	沈線で曲線的な文様。沈線には刺突列を沿わせる。縄文LR。
131	9	16	後期後葉	西ノ浜式	深鉢	口縁部	7.6	口縁部を肥厚させ段を形成。口唇部下に太い平行沈線、下に細い沈線で文様。縄文確認。器面の状態は良くない。
131	10	16	晩期後葉	大洞A式	広口壺	口縁部～胴部	3.2	口縁部が袋状に膨らむ。平行沈線を巡らせる。11と同一個体
131	11	16	晩期後葉	大洞A式	広口壺	胴部～底部	6.7	底部に葉脈痕あり。3条セットの平行沈線を巡らせる。10と同一個体。

（2）平成 15 年度調査〈第 11 次調査〉

畑中（畑中４）地点（第 96 図）

① 調査の経緯

史跡内の住宅改築に伴う確認調査を行った。調査箇所は梨木・畑中地点貝塚の南西に張り出す丘陵の西斜面上にあたる。建物の改築に伴う史跡への影響は少ないものと考えられたが、周辺の貝層の分布状況や多量の遺物が検出された宮戸島遺跡調査会（東北大学教育学部）および町道拡幅に伴う宮城県教育委員会の調査区（宮城県教委　1986）に隣接していることなどから、計画地内における貝層（遺構）の分布・堆積状況を確認するため、確認調査を行った（写真 132）。

② 調査の概要

調査は、丘陵に平行する南北トレンチと直交する東西トレンチをそれぞれ設定して行った。調査の結果、いずれのトレンチでも貝層および遺構・遺物とも検出されず、表土下 30 ～ 40cm 程で岩盤（凝灰岩）に達し、西側斜面に向かって傾斜していることが明らかとなった。また、周辺のボーリング調査で、調査区の東側では貝層の分布域との間に南北に細い谷が入ることが確認された。現在の宅地周辺におけるほぼ平坦な地形は、本来やせ尾根上に南北に細長く延びる丘陵が後世の削平によって改変されるとともに、谷が埋没することによって形成されたものと考えられる。畑中地点の貝層はこの丘陵の西側の斜面に形成され、袖窪地点の貝層は谷を挟んで東側の斜面を中心に形成されたものと推測される。

調査箇所（貝層は奥の畑から道路の斜面下にかけて分布）

Ⅰ区調査区

Ⅱ区調査区（西側に向かって傾斜している）

写真132 畑中（畑中４）地点の調査状況

２．梨木東地点

（１）平成 26 年度調査〈第 25 次調査〉

梨木東（扇田 29）地点（第 98 図）

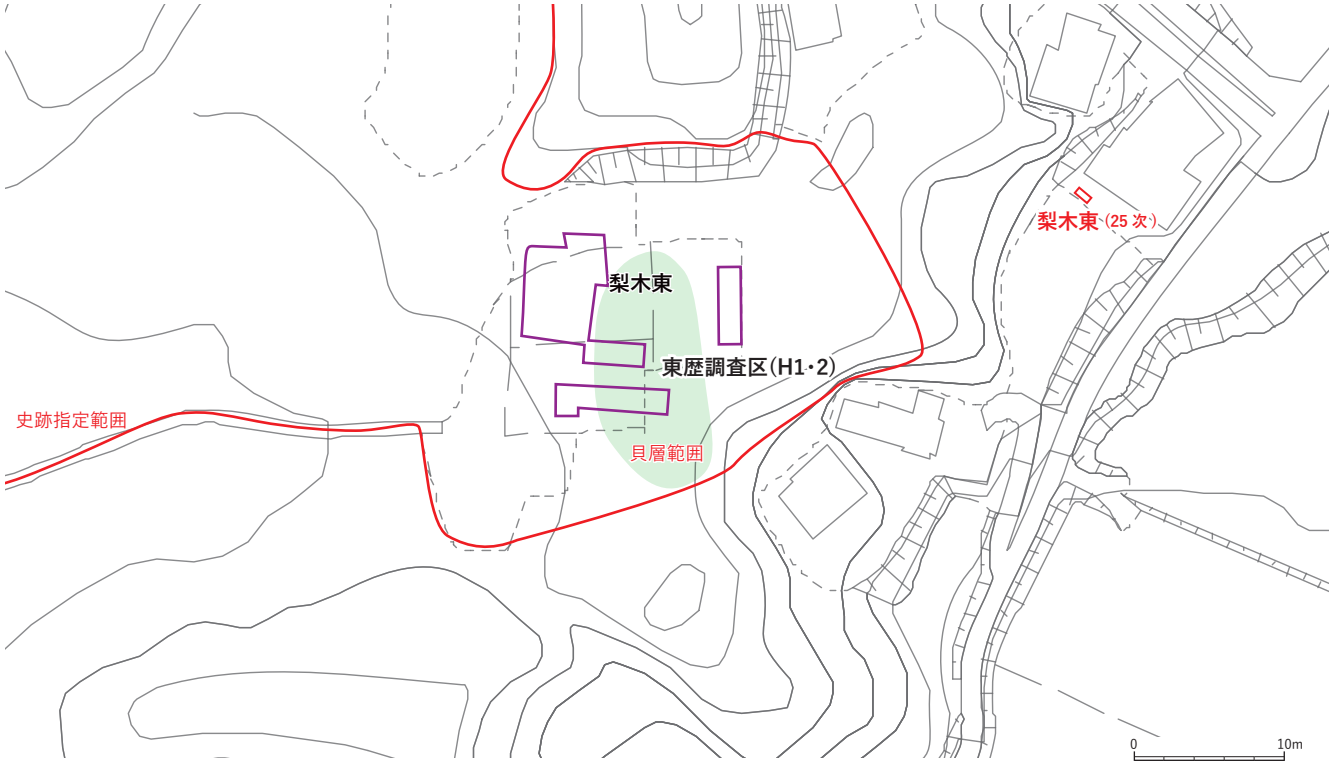
① 調査の経緯

平成元～２年に東北歴史資料館が調査を行った梨木東地点（縄文時代前期大木１式）の斜面下の宅地内から、人骨と縄文前期の土器片、石器が出土した。周知の遺跡の範囲外で、宅地内の排水側溝（土側溝）掘削時に発見されため、急遽遺物の採集と人骨の出土状況の確認調査を実施した（写真 133）。

② 調査の概要

調査は、宅地内の排水に係る狭い範囲を対象として行った。既に人骨の多くは取り上げられ、周辺の状況を含め人骨の出土状況等の詳細については確認することができなかったが、人骨は前期の土器を含む堆積層（二次堆積層？）を掘り込む土坑状の窪みから出土したものと推測された。取り上げ後の分析の結果、人骨は１体分まとまって出土したことが明らかになり、土坑に埋葬された人骨の可能性が高まった（人骨の特徴については、第４章第２節５（２）参照）。

堆積層からは繊維を含む大木１式の縄文土器片と、石器は頁岩製の縦形石匙、砂岩製の磨石が出土している（写真 133）。梨木東地点の丘陵および斜面（周知の遺跡範囲）からは離れた場所にあるが、同時期の遺構・遺物の広がりを示している。丘陵上から背後の丘陵斜面、丘陵裾を含めて、梨木東地点全体の遺構・遺物の分布状況の確認を行う必要がある。



第 98 図 梨木東地点調査区（第 25 次調査）の位置

調査区（後方の斜面上が梨木東地点）

土坑および堆積状況

調査状況

写真133 梨木東（扇田 29）地点の調査と出土遺物

第４章　これまでの発掘成果のまとめ

第１節　集落・生産地等の分布と変遷

１．時期ごとの遺跡の概要

里浜貝塚は、縄文時代前期初頭から弥生時代にかけての集落で、東西約 640 m、南北約 200 mの規模をもつ。大小の谷や入江によって、大きく北貝塚（寺下・西畑・里地点）、西貝塚（台囲頂部・東斜面・風越地点）、東貝塚（袖窪・畑中・梨ノ木地点、梨木東地点）の３つの貝塚群に区分される。

里浜貝塚の発掘調査の歴史は古く、大正７（1918）年の松本彦七郎らによる発掘調査にまで遡る。その後も、東北大学教育教養学部日本史研究室・宮戸島遺跡調査会、東北歴史資料館によって継続的に調査が行われ、平成８（1996）年からは鳴瀬町教育委員会・奥松島縄文村歴史資料館が調査を行ってきた。鳴瀬町では平成２（1991）年以降「奥松島縄文村構想」の下、奥松島縄文村歴史資料館の整備を進め、平成７（1995）年２月の史跡指定を受けて、翌８年からは里浜貝塚の史跡整備に向けて西畑･西畑北地区（北貝塚）および台囲地区（西貝塚）の確認調査に着手した。また、住宅建築や浄化槽設置等に伴う試掘・立会・確認調査、とくに東日本大震災後は里・寺下囲地区（北貝塚）の住宅の再建や梨木・畑中地区（東貝塚）の農地復旧等に伴う調査を実施してきた。これらの調査によって、里浜貝塚の面的な広がりと各地点の時期・変遷、居住域や捨て場、墓域など空間利用の一端が明らかになってきた（第 99 図)。

（１）北貝塚

１）各地点の概要

ａ．西畑・西畑北地点

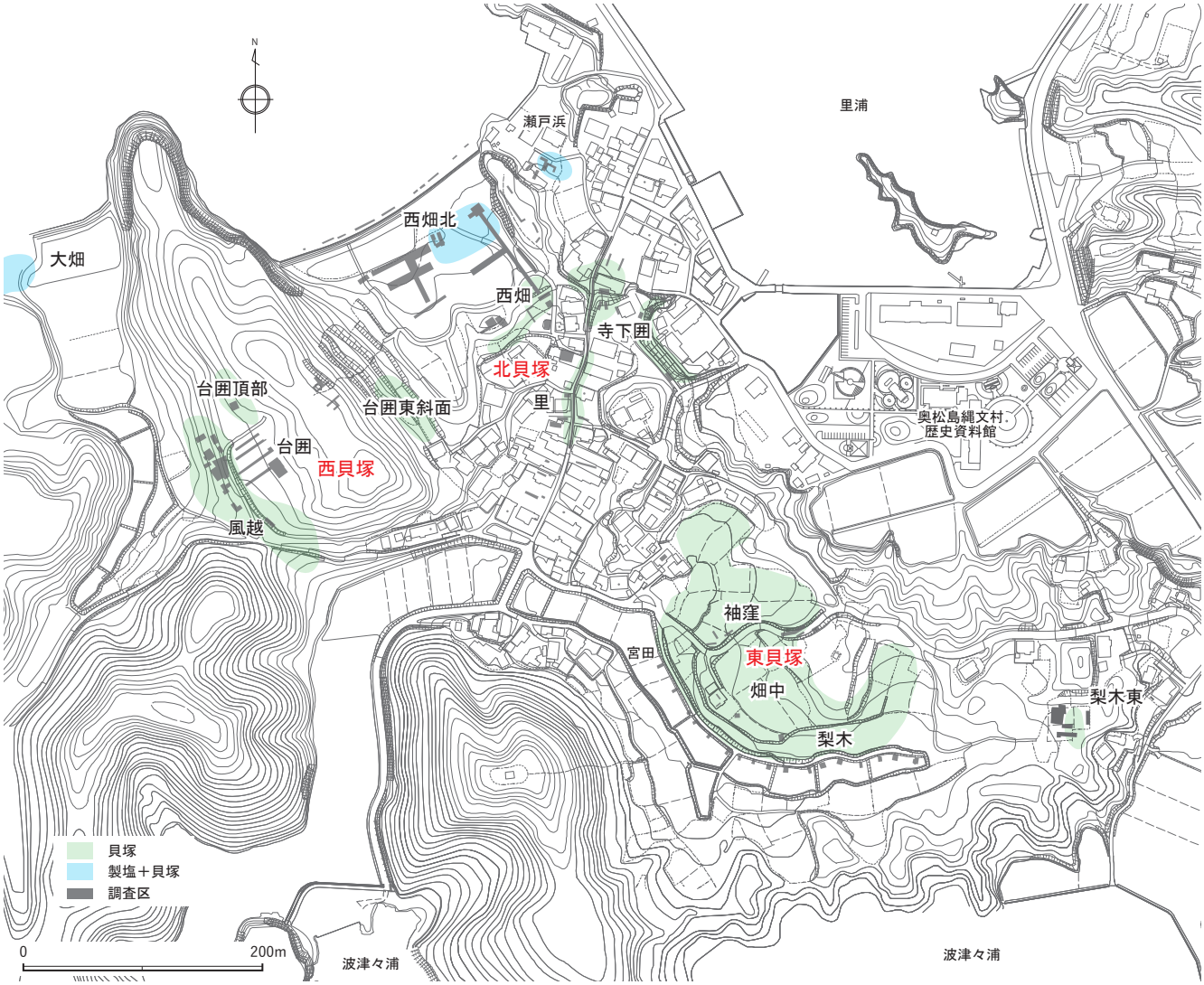
西畑地点は里地区の丘陵の北斜面に立地し、前面の入江から入り込む幅 30 mほどの小さな谷の谷頭部分に貝層が形成されている。昭和 54 ～ 59 (1979 ～ 84) 年に東北歴史資料館によって調査が行われ､縄文時代晩期中葉（大洞Ｃ２式）の厚い貝層と墓（人骨）が確認された。貝層は 416 枚の層に分層され、土器や骨角器、動物遺存体等の微細遺物を含む詳細な分析が行われた。また大洞Ｃ２式に伴う製塩土器も出土している。西畑北地点は西畑地点の北 100 m、標高３～２ｍの汀線に近い低地に立地している。昭和 59 ～ 61（1979 ～ 81）年に東北歴史資料館によって調査が行われ、晩期中葉（大洞Ｃ２式）の製塩炉と製塩にかかわる大量の製塩土器、カキ・アサリ主体の貝層が確認されている。

奥松島縄文村歴史資料館による西畑地区の調査は、史跡整備に向けた西畑地区における遺跡の範囲と内容確認を目的としたもので、平成８・９・13 ～ 17 年度の７ヶ年、９次にわたる調査を実施した。調査の結果、西畑地点の貝塚は谷地形を埋めるように東から西方向に傾斜しながら縄文時代後期後葉から晩期後葉（大洞Ａ式）にかけて形成され、その外側には貝を含まない獣骨含みの遺物包含層が広がっていることが明らかになった。東歴の調査区に隣接する汀線近くの低地では、晩期中葉（大洞Ｃ２式)、後葉（大洞Ａ式)、弥生時代中期の各時期の製塩土器とともに、晩期後葉（大洞Ａ式）および弥生時代中期（寺下囲式）の製塩炉と廃棄層、カキ・アサリ主体の貝層を検出した（第１・３・７・8・13 次)。また、古墳時代前期から中期にかけての遺構遺物（第 10・12 次)、低地では奈良・平安時代の竪穴建物と９世紀前半頃の製塩土器（第３次)、台囲東斜面の裾部では９世紀後半の貝層を確認した（第 10 次)。

これまでの調査を総括すると、西畑地区は谷頭部分および斜面は里地区に営まれた集落の縄文時代後期から晩期後葉にかけての捨て場として、汀線近くの低地は晩期中葉から弥生時代中期にかけての製塩および貝剥き作業の場として利用されていたことが明らかになった。里地区ではその後も集落が営まれ、西畑地区は古墳時代中期にはその北側の末端部にあたり、９世紀後半には漁撈活動に伴う捨て場として利用された。また、汀線近くの低地は８世紀後半から９世紀前半にかけての時期には、多賀城にかかわる塩生産の場として利用されていたものと考えられる。

ｂ．里地点

里地点は現在の里集落上に位置する。外洋の波津々浦からの谷が分岐して南から入り込む細い谷の谷頭から東側の斜面にかけて貝層（里地点貝塚）が確認されている。調査は住宅建築や浄化槽設置等に伴う狭い面積での調査が多く、居住域を含め集落としての全体像は見出せないが、東日本大震災後の住宅再建に伴い、広範囲にわたって調査が行われた結果、貝層および遺物の分布状況が明らかになった。



地点名／時期		縄文時代																					弥生時代			
		前期							中期				後期					晩期						前期	中期		後期
		初頭	前葉		中葉		後葉		前葉	中葉		後葉	前葉		中葉	後葉		前葉		中葉		後葉				
		上川名II	大木1	大木2ab	大木3	大木4	大木5	大木6	大木7ab	大木8ab	大木9	大木10	門前	宮戸Ib	宮戸IIab	西ノ浜	宮戸IIIab	大洞B	大洞BC	大洞C1	大洞C2	大洞A	大洞A'		寺下囲	桝形囲	天王山
西貝塚	台囲頂部	○	○	○	○	○	○	○	◎																		
	台囲東斜面				○	○	○			△	△																
	台囲						△	△	△	◎	◎	○	○	◎	○	○	○	○	○	△	△						
	台囲風越		△							△	△		○	○	○	○	◎	◎	○								
東貝塚	梨木東		○																								
	梨木	○	○							○	◎	◎	○	○	○		○										
	畑中	○	○						△	○	◎	◎	○	○	○	○		○			○	○					△
	袖窪							△		△	△	◎	◎	○													
北貝塚	里																◎	◎	◎	◎	◎	○	○		○	○	
	寺下囲														△	△	○	○	◎	◎	◎	◎	○		○	○	
	西畑															△	○	○	○	○	◎	○	○		○	○	△
製塩	西畑北・里																			○	○	○	○		○	○	

：貝層の時期

＊ 各地点の貝層の時期と型式名は、これまでの発掘および分布調査により確認できたものを示をした。◎は多量、△は少量。

第 99 図 里浜貝塚各地点の時期と変遷

谷の東斜面に位置するHSO地点（里28､第２次）では縄文時代後期後葉の貝層と晩期初頭から前葉にかけての土坑墓、里66地点（第19次）では晩期前葉（大洞BC式）を中心とした時期の貝層、南に隣接する八木氏宅（里65地点、東北歴史資料館　1982）では晩期中葉（大洞C1・C2式）の貝層が確認されている。里地点から寺下囲地点に至る市道下の攪乱層の中から縄文時代晩期中葉～後葉の縄文土器や骨角器､動物遺存体が多量に出土し､これに続く里64地点(第30次）では里地点の貝層南端部が確認され、晩期中葉を主体とした縄文土器、製塩土器が出土している。

一方､谷の最奥部､谷頭から谷の西斜面にかけて位置する里23地点(第21次)では貝層は伴わず､縄文時代晩期後葉(大洞Ａ式）から弥生時代中期（桝形囲式）の遺物包含層と土坑墓が検出されている。

ｃ．寺下囲地点

寺下囲地点は里浜貝塚の北端部に位置する。舌状に北に張り出す丘陵の北側の斜面で東側の斜面に厚い貝層が確認されている。北側斜面の貝層については、松本彦七郎らが斜面の中位、宮戸島遺跡調査会（東京大学人類学教室）が昭和30・31（1955・56）年に斜面の上位に調査区を設定して調査が行われ、狭い面積ながら多数の人骨が出土している。昭和34（1959）年には加藤孝らによって弥生時代中期の小規模なカキ貝層と、その上部から古墳時代中期の遺物が確認されている。東側斜面の貝層については、昭和26（1951）年に東北大学教育教養学部日本史研究室によって調査が行われ、晩期前葉～中葉（大洞BC・C1式）の貝層が確認されている。

縄文村歴史資料館の里74地点（第17次）の調査では北側斜面貝塚の貝層の北端と汀線を明らかにし、縄文時代晩期後葉（大洞Ａ式）貝層と製塩土器、汀線付近における二次堆積層を確認した。宮戸島遺跡調査会の調査区に隣接する里72地点（第29次）では、斜面上位で貝層の南東端を確認した。貝層の年代は縄文時代後期末葉から晩期前葉ないし中葉頃と推定された。貝層下の土層からは後期中葉および後葉の土器が出土しており、北貝塚の集落としては少なくとも後期中葉まで遡るものとみられる。

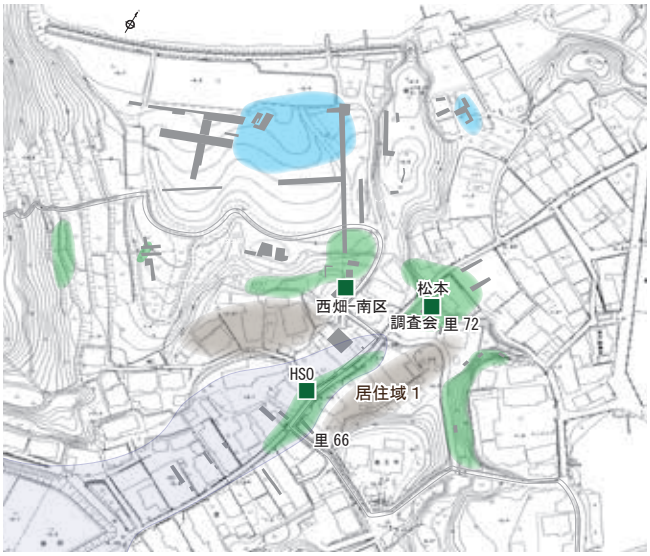
２）北貝塚の分布状況と変遷

北貝塚における集落は、地形や貝層の分布状況からみて、北に延びる丘陵とその中央を南から開析して入り込む谷との間の馬蹄形状の緩斜面に営まれたものとみられる。居住域は谷を挟んで東西の斜面上と貝塚との間に想定される（居住域１・２）。

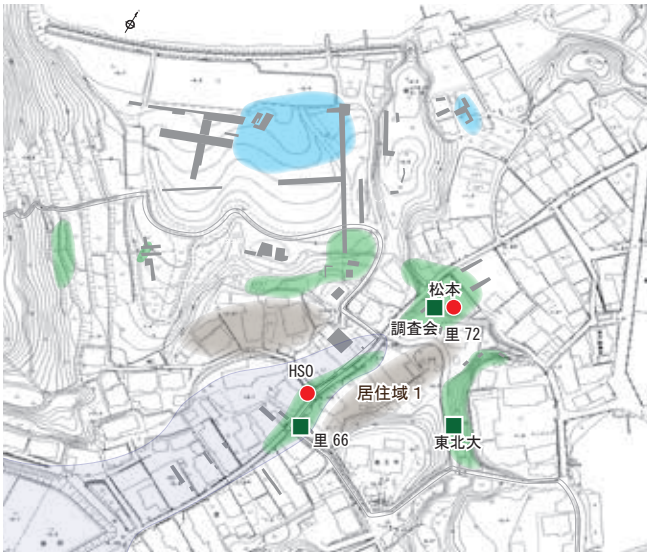
集落は縄文時代後期中葉頃から形成され､後期末には西畑地点､寺下囲地点の北斜面､里地点の東斜面で捨て場（貝塚）が形成される（第100図)。晩期前葉には谷の東斜面に中心に捨て場が形成されるようになり、寺下囲地点の北斜面と里地点（ＨＳＯ地点）では墓も確認されている。居住域１を囲むように捨て場と墓が形成されたものと考えられる（２）。

晩期中葉になると集落は拡大する傾向にあり、谷を挟んで２つの居住域が同時に存在し、囲むように捨て場と墓地が残された。西畑の汀線近くの低地では、生業の場として製塩と貝剥きの作業が行われるようになり、場の利用は弥生時代中期まで続く（３）。貝の採取や魚の漁獲もこの浜を中心に展開したものと考えられる。晩期後葉も２つの居住域と捨て場が維持されるが、貝層は西畑と寺下囲北斜面の末端部（里74地点）に限られ、谷の西側に位置する居住域２の捨て場（里23地点）では貝層を伴わなくなる（４）。

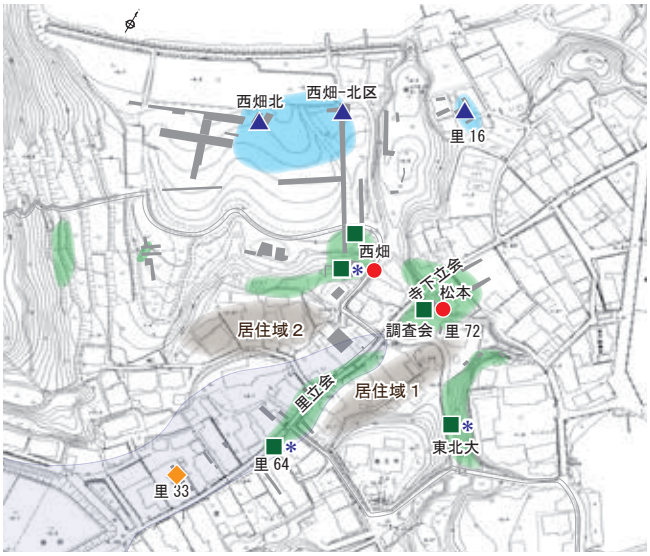
晩期末(大洞Ａ’)の貝層は今のところ確認されていない。集落としても縮小傾向にあり､居住域は居住域２のみとなる。西畑の低地での製塩や漁撈活動は継続しているが、里23地点では晩期末から弥生中期にかけての包含層は貝層を伴わず、層内から墓（人骨）が検出されている。寺下囲地点では弥生時代中期（桝形囲式）の小規模なカキ貝層や鉄製の銛頭が検出され､西畑地点では桝形囲式の鹿角製開窩式銛が出土している。西畑地点の低地での製塩も続けられているが、漁撈活動全体としては晩期中葉～後葉に比べ低調であり、季節や魚種の選択等により活動の集約化および専業化が進んだ可能性も考えられる（５）。



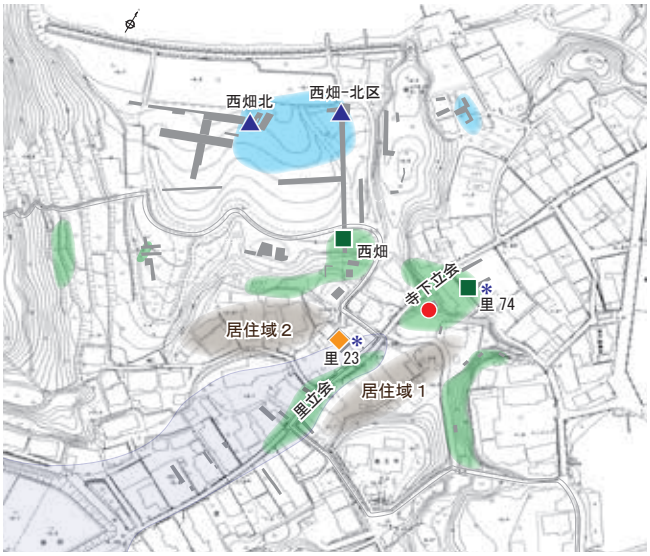
1．後期末



2．晚期前葉



3．晚期中葉



4．晚期後葉

5．晚期末～弥生中期

調査区
貝塚
製塩＋貝塚
想定される居住域
谷（推定）

■ 貝塚　◆ 包含層　● 墓
▲ 製塩＋貝塚　＊ 製塩土器

第 100 図　北貝塚の変遷と遺構の分布

（２）西貝塚

台囲地点の貝塚は里浜貝塚の西端部にあたり、標高 30 ～ 20 ｍの丘陵の西斜面の上部（台囲頂部・台囲地点）と下部（台囲風越地点）、東斜面（台囲東斜面地点）の４地点で貝層の分布が認められる。昭和 20・30 年代に東北大学教育教養学部日本史研究室・宮戸島遺跡調査会により風越地点の継続的な調査が行われ、その後東北歴史資料館によって昭和 60・61（1985･86）年に台囲頂部地点、平成３（1991）年に風越地点の調査が行われている。

台囲頂部地点は丘陵の中央やや西寄りにあり、標高 30 ～ 20 ｍ程の斜面上部に貝層が分布している。縄文時代前期初頭（上川名Ⅱ式）から中期前葉（大木７ａ式）にかけての遺物が出土している。東北歴史資料館による台 12 地点の調査で、前期中葉（大木４式）～中期前葉（大木７ａ式）の貝層が確認されている。台囲東斜面では前期中葉～後葉の遺物が採集されている。台囲風越地点は丘陵西斜面の下部に位置し、広範囲に貝層の分布が認められる。東北大学教育教養学部日本史研究室・宮戸島遺跡調査会の調査では縄文時代後期中葉から晩期前葉を中心とした貝層が確認され、東北歴史資料館による台９地点の調査では後期後葉の貝層、および貝層下から後期中葉頃とみられる竪穴建物が検出されている。

縄文村歴史資料館の台囲地点（第４・５次）の調査では、縄文時代中期中葉と後期前葉の貝層、後期後葉と晩期初頭の竪穴建物、後期後葉から晩期前半にかけての土坑墓、埋設土器（土器棺墓）を検出し、後期後葉から晩期前半にかけての時期の居住域、墓域、捨て場の位置関係を明らかにした。また、縄文前期後葉と推定される配石遺構を検出している。台囲東斜面地点の斜面上部（第９次）の調査では縄文中期後葉（大木８ｂ・９式）の遺構遺物が出土し、中期中葉における台囲集落の広がりが確認された。

なお､西畑北地点の入江奥低地の堆積層からは縄文後期末～晩期後葉の土器と僅かに縄文前期初頭が出土する一方で、台囲・台囲風越地点の中期中葉～晩期前葉の時期の土器は出土していない。台囲集落における主要な漁場は風越地点側の大畑の海が想定される。ボーリング調査の結果では約 6000 年前から 3700 年前まで海が侵入し、それ以降後退に転じている（第５章第１節１(1)）。そうした環境下で漁撈活動が営まれたものと考えられる。

（３）東貝塚

ａ．梨木・畑中・袖窪地点

梨木・畑中・袖窪地点は、外洋の波津々浦の北西部から曲がりくねって入り込む細い谷の奥部に位置し、標高 15 ～ 10 ｍの丘陵上の緩やかな斜面およびその縁辺部に沿って広範囲に貝層が分布している。ただし、発掘調査は昭和 30 年代の宮戸島遺跡調査会による梨木、畑中、袖窪地点の調査と昭和 60（1990）年の排水管工事、平成２（1990）年の道路拡幅工事に伴い実施された宮城県教育委員会による袖窪地点のごく狭い範囲での調査のみで、想定している貝層の広がりは表面的な分布調査で把握されたものである。これまでの発掘調査では縄文時代中期中葉から後期初頭にかけての貝層が確認されているが、詳細な分布状況や堆積状況、時期、変遷等については明らかではない。

平成 29 年度の梨木・畑中地点（宮田 24 ～ 31、第 29 次）の調査は、谷奥部の丘陵斜面下の旧水田の総長約 250 ｍを対象としたもので、丘陵の斜面上位から斜面の裾部にかけて分布する貝層の末端を捉えることはできなかったが、後世の堆積層から縄文時代前期から晩期、弥生時代、古墳時代中期、平安時代（９世紀後半）の遺物が出土した。時期的には従来と同様に中期後葉から後期前葉にかけての土器が多いが、畑中地点の北西部では後期中葉から晩期後葉にかけての土器が特徴的に出土している。丘陵上の集落の時期や堆積状況、遺構の分布状況、空間利用等を反映しているものとみられ、広範囲に長期間にわたって集落が営まれたことが明らかになった。また、平成 15 年度の畑中地点（畑中４、第 11 次）の住宅改築に伴う調査では、住宅が立地する丘陵の東側に波津々浦からの細い谷が分岐して入り込み、袖窪地点の貝塚と東西に分断していることが確認された。今回の調査区はこの谷頭付近にあたるものとみられ、畑中地点の貝塚は丘陵の西側斜面に、袖窪地点は谷の東斜面を中心に形成されているものと推定された。

なお、梨木・畑中・袖窪集落における漁場は、細い谷を下り波津々浦に面した入江が想定される。ボーリング調査の結果では、現在の波津々浦から約 250 ｍ奥に入った付近での海進 / 海退が確認されている。海進は 6300 年前で、3500 年前頃に海退に転じたと推定され（第５章第１節１(2)）、海岸地形および海況の変化が集落の消長に関わった可能性も考えられよう。

b．梨木東地点

梨木東地点は梨木・畑中・袖窪地点貝塚群の東約 200 m、標高約 20 mの丘陵上に立地する。平成元・２（1989･90）年に東北歴史資料館により詳細な調査が行われ、縄文時代前期初頭（大木１式）の貝塚が確認されている。

平成 26 年度の調査（扇田 29､第 25 次）では､周知の遺跡範囲外の丘陵斜面下の二次積層から､縄文時代前期土器片（繊維土器）とともに縄文的な特徴を有する時期不明の人骨が出土した。貝塚が確認されている丘陵上および斜面のみならず、丘陵裾部・斜面下まで広く遺構・遺物が分布している可能性が考えられる。

２．製塩跡の分布と概要

（１）里浜貝塚における製塩

１）製塩の調査研究の歴史

赤焼の粗雑な尖底土器（製塩土器）が、里浜貝塚から出土することは古くから知られていた。昭和９（1934）年に寺下囲地点を調査した角田文衛は、縄文時代晩期後葉（大洞Ａ式）の尖底土器に注目し、色調や剥離性などその特徴を的確に観察し報告している（角田 1936)。また、昭和 26（1951）年に寺下囲地点の試掘調査を行った斎藤良治は、出土した大洞ＢＣ・Ｃ１式の「赤褐色を呈し、粗製粗雑で輪積」の無文平底の土器を、いわゆる無文粗面尖底土器の前身と推定し、製塩土器が晩期前葉まで遡る可能性があることを指摘した（斎藤 1954)。

ただし、里浜貝塚をはじめ松島湾沿岸の貝塚から特徴的に出土するこの種の土器が、製塩土器として認識されるようになるのは、近藤義郎による香川県喜兵衛島（近藤 1958）や茨城県広畑貝塚（近藤 1962）の調査成果が発表された昭和 30 年代後半のことである。その後、松島湾沿岸でも製塩の研究を目的とした調査が行われるようになり、縄文時代、弥生時代、平安時代の製塩遺構が検出されるとともに、各時期の製塩土器の概要も把握されるようになった（加藤 1962 ～ 65・1967、後藤 1972)。

里浜貝塚における土器製塩は、昭和 54(1979）年から始まる東北歴史資料館（現東北歴史博物館）と奥松島縄文村歴史資料館による西畑地点、西畑北地点の継続的な調査によって明らかになった。縄文時代晩期中葉（大洞Ｃ２式）の集落に伴う日常的なゴミ捨て場（西畑地点）と同時期の製塩および貝剥き作業場（西畑北地点）から、それぞれ多量の製塩土器が出土し、縄文時代の製塩活動の実態や生業活動の中での位置付けなどを知る上で良好な資料が得られた（岡村 1982、小井川・加藤 1988、会田 1997･1998)。

２）里集落のハマ貝塚

里浜貝塚で製塩作業の場が明らかになった西畑北地点は、遺跡の北端部に位置し、汀線近くの標高２～３ｍの微高地上に立地する。東西約 70 m、南北約 50 mの範囲に製塩土器の分布が認められ、調査の結果、縄文晩期中葉（大洞Ｃ２式新段階)、晩期後葉（大洞Ａ式)、弥生時代中期（寺下囲式）の製塩炉が検出された（第 102 図)。製塩炉の周辺からは大量の製塩土器片が層をなして出土し、廃棄層を形成している。また、製塩遺構と重複してアサリ・マガキを主体とした貝層も検出されている。貝殻と製塩土器以外の遺物をほとんど含まないことから､汀線近くに営まれたこの場所は、おもに製塩と貝剥き作業を行う生業の場であったと考えられた。

また、100m 程離れた標高約 10 mの丘陵斜面に立地する西畑地点からも、多くの道具類や食糧残滓とともに多量に製塩土器が出土している。中には比較的保存状態の良好な製塩土器も認められるが、製塩遺構周辺から出土する製塩土器と同様に細片化したものが圧倒的に多く、器壁が剥離したものも目立つ。製塩土器から掻き取った塩のみならず、作業後の製塩土器の一部はそのまま集落に持ち帰られ、集落内での食料の調理や保存加工などにも用いられていたことを示している。

（２）製塩土器と製塩遺構

１）製塩土器の特徴

「赤焼無文粗面尖底土器」の語が示すように製塩土器は、縄文時代の土器でありながら、外面には縄目文様も、十分な器面調整も施されず、粘土の輪積痕が残るほど粗雑で、再加熱によって全体が赤褐色を呈するという特徴を有する。

角田は製塩土器としての認識はなかったものの、前述のとおり縄文晩期末の尖底土器に注目し、ⅰ）深鉢形で高さが20cm 前後と推定されること、ⅱ）器厚は極めて薄く体部で３～４mm であるが底部ははなはだ部厚であること、ⅲ）色調はほとんど一様に淡紅色のさえた色を呈し稀に紫色を帯びたり黝斑を有したりすること、ⅳ）器面は粗鬆で剥離性に富むことなど、製塩土器の特徴を的確に捉えている（角田 1936）。

その後、西畑北地点などの調査によって、製塩土器の底部形態が平底から尖底へと変化していることが明らかになったが、法量や製作技法、使用痕跡など底部形態以外の特徴に大きな違いは認められない。各時期を通じて共通した特徴をもつことが明らかになった。西畑北地点での詳細な分析をもとに、松島湾沿岸における縄文時代の製塩土器の特徴をまとめると、以下のようになる。

①器形は底部から直線的に外傾して立ち上がる単純な深鉢形の土器で、装飾や縄目文様も認められない。底部は時期によって異なり、尖底か、小さな平底である。平底の中には網代痕や木葉痕が認められるものもある。

②大きさは、口径・器高ともに 20 ～ 30cm 前後の大形のものと、口径・器高とも 10cm 前後の小形のものがある。量的には、大形のものが圧倒的に多いものと思われる。

③器厚は極めて薄く、体部で２～ 3mm 程に仕上げられている。

④「無文粗面尖底土器」と称されるように文様がなく、外面は底部付近の整形を除けば、十分な器面調整も施されず、粘土の輪積痕跡を明瞭に残すものが多い。内面はナデ調整を主体とし、丹念にヘラミガキが施されるものもある。

⑤表面は赤褐色や淡紅色の色調を呈し、焼け弾けにより器壁が剥がれたものも多くみられる。

製塩土器はあくまでも塩生産のための機能、とくに煮沸効率の向上が重視され特化されたものである。塩を採るために、海水を注ぎ足しながら土器が壊れるまで煮詰め作業に用いられ、１度の作業で壊れるまで使い切ることを前提としたものと思われ、他の煮炊き用の土器とは用途も廃棄される際の状況も大きく異なっている。

２）製塩土器の変遷

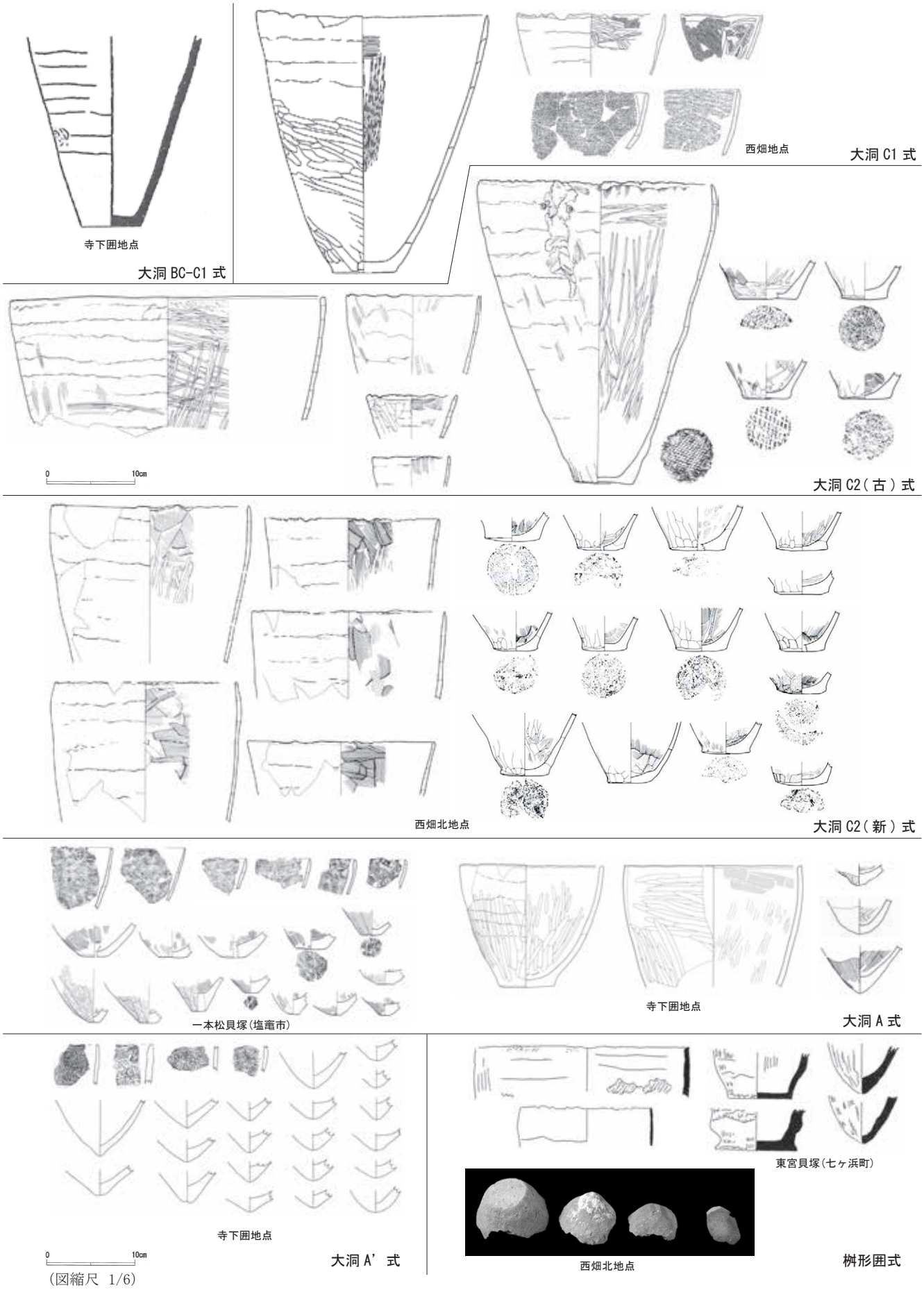
松島湾沿岸で最も古い製塩土器は、縄文後期後葉のものとして、西畑北地点の断面から採取された小さな平底をもつもの（岡村 1982）と台囲地点から出土した輪積痕跡を残す深鉢形の無文土器（後藤　1956）がある。また、晩期前葉から中葉にかけてのものとして、寺下囲地点で製塩土器の特徴を備えた大洞ＢＣ・Ｃ１式期に伴う無文平底の土器（斎藤　1954）、西畑地点では貝層最下部の層群から大洞Ｃ１式土器とともに製塩土器が出土している。このほか、近年の発掘調査で確実な共伴関係が認められているのは晩期中葉以降である。晩期中葉の八木氏宅、里 66 地点、里 64 地点、晩期後葉～弥生時代中期の里 23 地点から出土しているが、後期後葉～晩期前葉の HSO 地点、里 66 地点からは確認されていない。里浜貝塚における製塩は晩期中葉以降の可能性が高い。

晩期中葉から弥生時代中期にかけての製塩土器の特徴については、前述のとおり法量や製作技法、使用痕跡などに時期による違いは認められないが、底部形態によって“平底（東歴・西畑地点：大洞Ｃ１～Ｃ２式古段階）→やや丸味を帯びた平底＋尖底（東歴・西畑北地点：大洞Ｃ２式新段階）→尖底（西畑地点１・３次調査、寺下囲地点：大洞Ａ～桝形囲式）”の変遷が捉えられている（第 101 図）。なお、西畑北、寺下囲地点では、大洞Ａおよび桝形囲式期に平底で小形のタイプの製塩土器が客体的にではあるが、一定量含まれることが明らかになっている。製塩段階や用途などによって器種の違いがあった可能性も考えられる。

３）製塩遺構の特徴と変遷

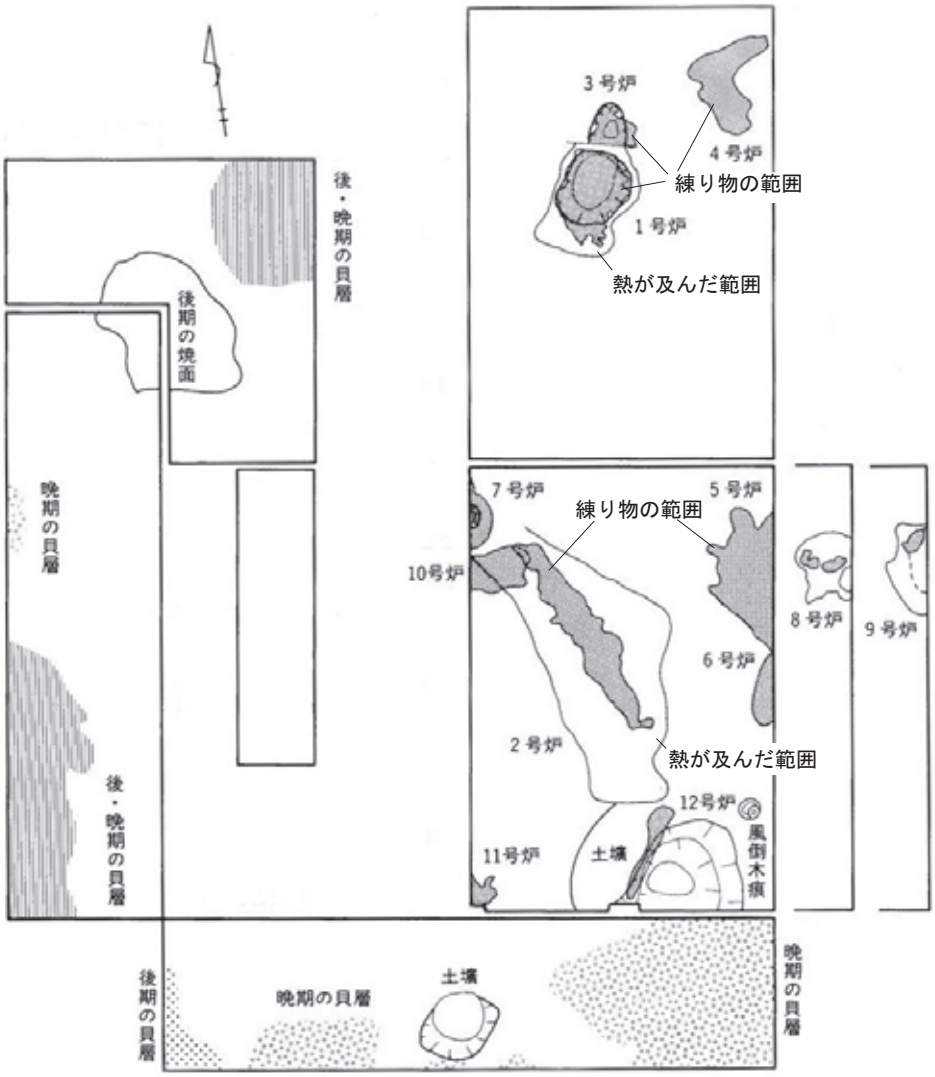
今回の西畑北地点の調査では、縄文時代晩期後半（大洞Ｃ２、Ａ式）と弥生時代中期（桝形囲式）の製塩炉が検出された。炉の形態には時期による違いがあり、縄文晩期の平坦もしくは皿状の浅い窪みに漆喰状の練り物を張り付けた地床炉から、弥生中期の凝灰岩礫を敷き詰めた石敷き炉へと変化が認められる。

東北歴史資料館による西畑北地点の調査では、晩期中葉（大洞Ｃ２式）の製塩遺構が 20 × 20 ｍほどの狭い範囲から 11 基の製塩炉が重複して検出された。最大で同時に４基、４時期の重複が確認されている。山土・灰に焼いたカキ殻や海水を混ぜて漆喰状に捏ね合わせた「練り物」を構築材として、１ｍ× 80cm ほどの浅い楕円形のくぼみに２、３cm の厚さで貼り付け、炉としている（第 102 図上）。炉の周囲や微高地の周縁には、焼土・灰をマトリックスにした

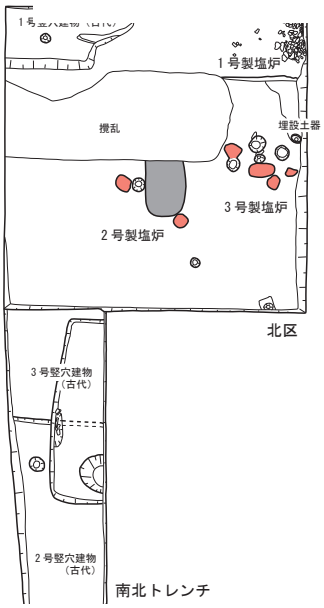


（図縮尺 1/6）

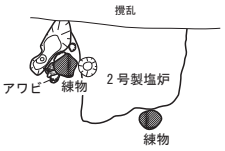
第 101 図　里浜貝塚および松島湾沿岸の製塩土器



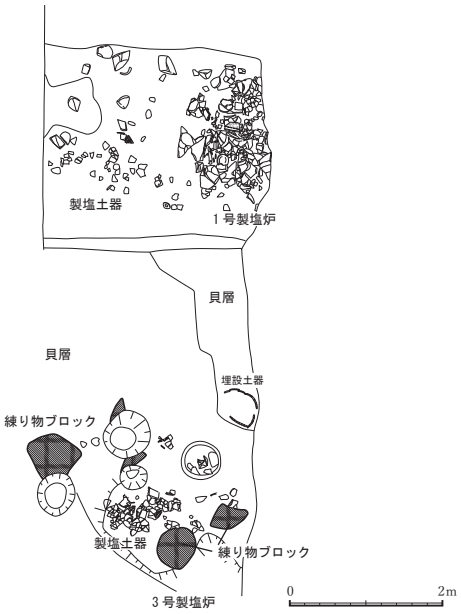
西畑北地点製塩遺構（大洞Ｃ２式、東北歴史資料館 1988）



西畑地点北区･南北トレンチ製塩遺構配置図
（第３次調査）



２号製塩炉（大洞Ａ式）



１号製塩炉（寺下囲式）**・３号製塩炉**（大洞Ａ式）

第 102 図　里浜貝塚西畑・西畑北地点の製塩遺構

製塩土器層、製塩炉の残骸とみられる練り物のブロックや焼土・灰層、アサリ・マガキを主体とした貝層が互層をなして堆積している。同じ場所で土器製塩が繰り返し行われたことを示している。練り物を配した製塩炉は晩期後葉（大洞Ａ式）まで継続し、西畑地点北区（第３次調査）で２基検出されている。大洞Ａ式の製塩炉では、製塩土器底部の尖底化に対応させたとみられるアワビの貝殻による根固めが確認されている（第 102 図下）。

なお､地床炉周辺の廃棄層からは海草に付着するマルテンスマツムシなどの焼けた小型巻貝が特徴的に出土している。小型巻貝は丘陵斜面に形成された西畑地点貝塚（ムラ貝塚）からも出土しているが、焼けたものはほとんどなく、製塩炉周辺から出土した小型巻貝は塩作りとの関わりが想定される。また、西畑地点北区の調査（第３次）で検出された練り物ブロックの中からアマモに付着するウズマキゴカイが焼けた状態で確認されている（註)。海草を焼き「藻灰」を利用した塩作りが行われていたものと推測される。

一方、弥生時代中期の製塩炉は、縄文晩期後葉の製塩炉に近接して検出された。弥生の製塩炉は凝灰岩の角礫を方形に敷き詰めたもので、その上に製塩土器を並べて火を焚いたものとみられる。周辺からは製塩土器破片がまとまって出土している（第 102 図下)。炉の変化は製塩土器の形状に合わせ、製塩の効率性を高めるためのもので、前段階のアワビ貝殻による根固めから角礫へ変更したものと考えられる。

註）　阿部芳郎氏による分析、ご教示による。

４）製塩作業の季節と場の使われ方

製塩の季節については、東北歴史資料館の調査で製塩土器の底部にみられるカシワの葉の圧痕や、製塩土器層から夏に捕獲されるコウイカの甲やムラサキウニの棘が少量ではあるが特徴的に出土していることから、製塩にかかわる一連の作業は夏に行われていたと推定されている。また、土器製塩に伴う廃棄層と互層をなす貝層は、アサリの成長線分析から春に形成されたと推定されている（東北歴史資料館　1988)。すなわち、松島湾沿岸の汀線近くに形成された製塩貝塚（菅原　2005）は、里地区に居住する集団の夏の土器製塩と春の貝剥き作業の場で、いわゆる「ハマ貝塚」(阿部 1996）としての様相を呈している。

（菅原）

第２節　遺物の特徴

１．里浜貝塚の土器

（１）縄文時代前期～中期前半の土器

１）前期前半の土器

梨木東地点出土土器（阿部ほか　1994）は、すべての土器に繊維が含まれ、貝層出土の第１群と貝層下土層出土の第２群土器に分類された。この第１群土器は、Ａグループと Ｂグループにさらに分けられている。その特徴から、Ｂグループの土器は下層の第２群土器が貝層中に混入したものと捉えられている。

第１群 Ａグループは、末端ループ文と菱形状の羽状縄文等の４つ特徴から、仙台市三神峯遺跡第Ⅱ層土器（白鳥 1974）等と類似しており、大木１式土器に相当するものと報告されている。

第２群土器は、竹管状工具による山形沈線文、短沈線、渦巻き状の撚糸圧痕文等が施文されること等が特徴として挙げられ、他遺跡出土事例との違いはあるものの上川名式に位置づけている。この第２群土器には、当該期に特徴的な撚糸圧痕により文様を施文する土器（第 103 図１：阿部ほか　1994）のほか、口縁部端面に短沈線、押圧縄文、撚糸圧痕を施すものもある（第 103 図２～５）。この種の土器は、同じ旧鳴瀬町の金山貝塚（Ａ Ⅰ～Ⅲ類：宮城県教育庁文化財保護課　1977）のほか、名取市泉遺跡第三遺物包含層（鴇崎　2010）、石巻市中沢遺跡第Ⅰ群土器（木暮ほか 2018）にも類似した事例が認められる。現在、上川名式は数段階に区分されているが、早瀬亮介氏の第１～２段階に相当するものと考えられる（早瀬　2017、註１）。

また、口唇部に縦位刻目を加えて「スリット」とし、地文が斜行縄文となるような土器（第 103 図６）は、先の遺跡群にも認められるが、田柄貝塚第Ⅰ群Ａ３類ａ種土器（相原　1986b）や吉田浜貝塚上層出土土器（後藤　1968・1991、相原　1990・2015）等の前時期にも認められる特徴となる。口唇部に山形沈線文、地文に撚糸文を施す土器も特徴的であり、うち２点は裏面が擦痕となっている（第 103 図７～９）。口縁部付近に山形沈線、地文に斜行縄文を施す例（第 103 図 10）もある。これらの土器は、出土点数が少ないため明確にはできないが、それらの特徴から上川名式より古い可能性も想定できる。

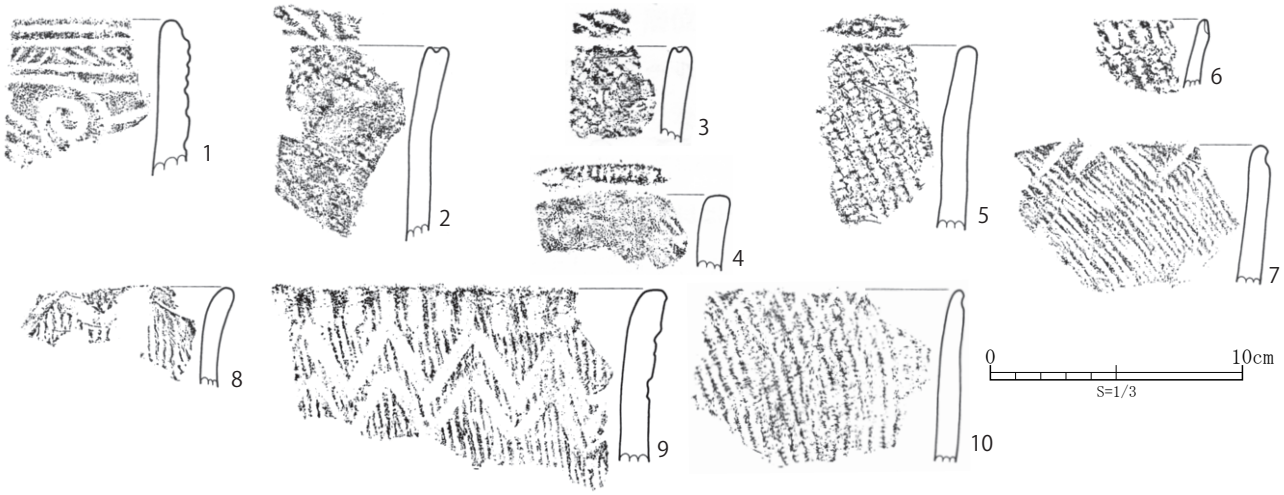
2001・2002 年度に調査された西畑北地点における調査（菅原・墓田　2003）では、Ⅱ区７・９・11 層より上川名Ⅱ式～大木１式を主体とする土器片が出土している。いずれも小破片であり、その全体像は不明である。

２）前期後半～中期前半の土器群

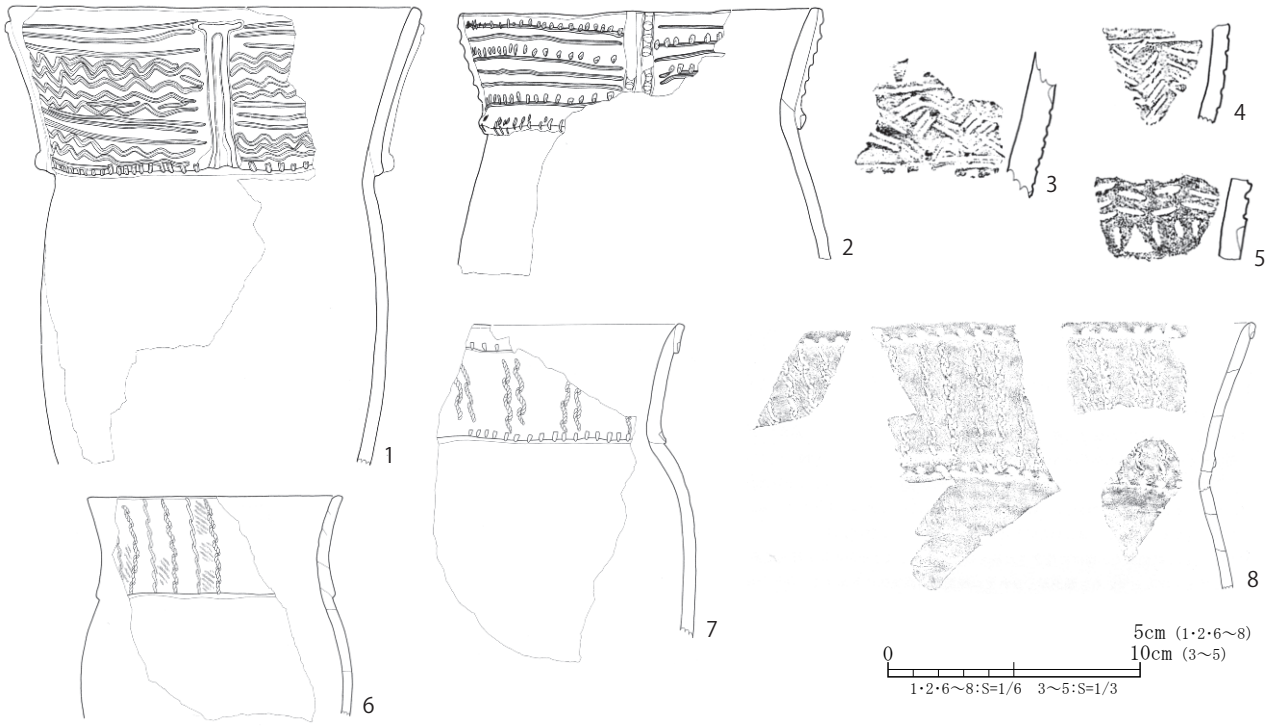
台囲頂部地点では、前期の大木２ｂ式～大木６式が少量出土したほか、大木７ａ式がまとまって出土している（加藤・山田　1991）。出土土器の中では、胴部がわずかに膨らむ長胴の深鉢で、頸部でくびれた後に外反気味に外傾する口縁部の長いものが目立つ。長い口縁部には、沈線文が横位に数条施されるが、その間に刺突等を施すものや縦位の粘土紐貼付があるのもある。胴部は無文となる。この種の土器は、登米市糠塚貝塚出土土器（第二類土器：加藤　1955、興野　1967・1981・1984）や、涌谷町長根貝塚出土土器（第一トレンチ第三群土器：藤沼　1969）と類似し、いわゆる「糠塚式」（小笠原　1963、林　1965：「糠塚式」の名称は巻末の編年表に記載されている）と呼称されていた土器群である。この土器群は、その当初より興野義一が指摘（興野　1967）していたように大木７ａ式に含まれるとされ（丹羽 1981、相原　1986a）、現在は大木７ａ式の最初期段階（大木７ａ式古相：丹羽　1988、大木７ａⅠ式：今村　2010）に位置づけられている。

なお、丹羽茂は長根貝塚の第１トレンチ出土土器を６・７層（大木７ａ式の第２段階）と８・９層（大木７ａ式の第１段階）に区分できることも指摘しており（丹羽　1981）、同様の見解を小林圭一もとる（小林　2016）。それらの見解では、長根貝塚第三群土器の第１類土器から第２・３類土器（藤沼　1969）への層位的変遷を認めるものである。台囲頂部地点出土土器では、『里浜貝塚』Ⅷにおける第 104 図１・２（第１類）から第 104 図３～５（第２類）、６～８（第３類）への変化と捉えられる。この特徴が明瞭な少数の土器からは、出土層位に基づく違いを確かに確認できるが、数量的な保証がないため判断がつかない。

そのほかの調査では、1997 年調査の西畑地点で大木５式・大木７ｂ式、1998 年度調査の台囲地点からは大木７ａ式、



第 103 図　里浜貝塚梨木東地点出土土器（阿部ほか 1994）



第 104 図　里浜貝塚台囲頂部地点出土土器（加藤・山田 1991）

1999 年度調査の台囲地点（会田　2000）では大木 6 式が出土しているが、下層の包含層等から混入した破片と推定される。なお、1998 年度調査の大木 7 a 式土器は、台囲頂部地点出土土器と同様の土器である。

（2）縄文時代中期後半の土器群

1）台囲地点出土土器群

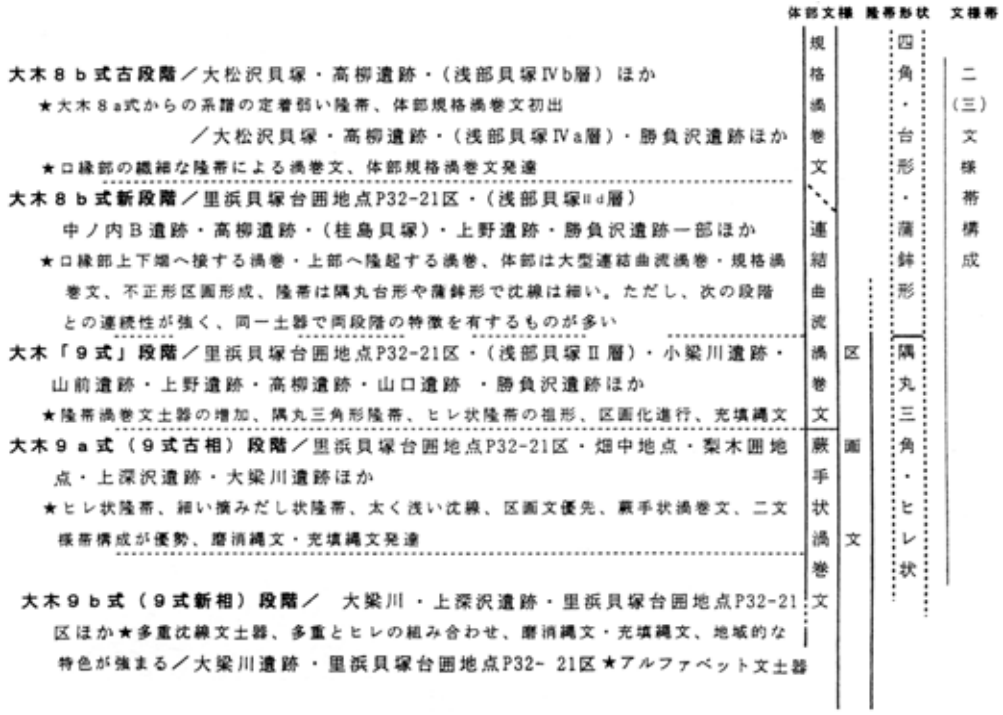
1998 年に鳴瀬町教育委員会によりなされた台囲地点の発掘調査において、後期後葉と晩期初頭の竪穴住居跡各 1 軒、土坑 9 基、埋設土器 2 基が確認されている（会田　1999）。土坑や埋設土器には人骨が遺存しており、墓として推定されている。また、それらの遺構とともに、中期中葉から後期前葉の貝層が確認された。この調査では、貝層の 2 個所について層を細分しながら掘り下げている。

P32 - 6 ・ 1 区出土土器は、宮戸Ⅰb 式を主体とし、その前後の時期の土器も多少含む。P32 - 21 区では、大木 8

写真134 里浜貝塚台囲地点 P32-21 区出土土器（1）（会田 1999）

0　10cm
S=1/4

写真135 里浜貝塚台囲地点 P32-21 区出土土器（2）（会田 1999）



第 105 図　水沢（2013）による土器変遷の理解

b 式から大木９式の土器が多量に出土している（写真 134・135）。この P32-21 区土器を検討した水沢教子は、型式設定者の山内清男が、「大木９式の文様帯では、粘土紐の太さ・高さが不定となる。それを囲む沈線が丸みを帯びて来る。時には沈線が縄文を丸く囲み、隆線がなくなったもの等もあると指摘」（興野　1996）していたことを踏まえ、隆帯・沈線の形状および文様の構成等から型式分類を行っている。水沢は、P32-21 区の土器群を大木８b 式から大木９式までの変遷をたどる基準的な資料として捉えており（第 105 図：水沢　2003a・b など）、2007 年には隆帯・沈線の様相から 151 層以下は大木８b 式、150 層～ 134 層が大木「９」式、132 層～ 111 層あたりを大木９a 式段階としている（水沢　2007、註２）。さらに後年には、登米市浅部貝塚との比較検討を踏まえ、134 ～ 137 層出土土器は浅部貝塚Ⅱａ～ｃ層に類似し大木「９」式、同様に 138 ～ 162 層は浅部貝塚Ⅱｄ層に類似し大木８b 式新段階と位置づける（水沢　2013）。水沢氏が指摘する特徴を踏まえるならば、P32-21 区出土土器の中では、134 層出土土器（写真 134 － 6・7）が大木「9」式の一つの基準となる。

水沢の指摘した「大木「９」式」は、山内清男基準資料のうち大木９式とされた土器の一部ではあるが、同資料の中の大木８b 式との区別が難しい。水沢の検討以前に、丹羽茂は大木８b 式の「新しい様相」とした部分について、「山内清男の写真資料では大木９式に分類されている」とされているが、当時の調査成果や文様が「線描文様を基本とし、文様の展開も横方向であるなど大木８b 式と共通している」ことから、大木８b 式として取り扱っている（丹羽　1988：p348）。その本文では、山内資料のどれを指しているのか不明ではあるが、山内が提示した写真のうち大木９式とされた一枚の写真（図版 104 上：山内先生没後 25 年記念論集刊行会　1996）が該当するように推定される。とくにその図版 104 上の左上は、これらの図版を解説する興野義一（1996）も指摘するように、大木８b 式とする土器との区別は難しい。また、丹羽が「最終的」とした「大木８b 式に含めるべきか、大木９式とすべきかいまだ明らかではない」とした曲流渦巻文が密接して展開するような土器は、水沢の大木「９」式に該当するものと考えられる（註３）。

なお、本地点と類似する資料は、1963 年に調査された塩竈市桂島貝塚でも確認されている（後藤　2010）。報告者の後藤勝彦は、水沢の指摘を踏まえつつ、桂島貝塚第２段階は里浜貝塚「144 ～ 152 層周辺の土器」と対応し、大木８b 新式としている。

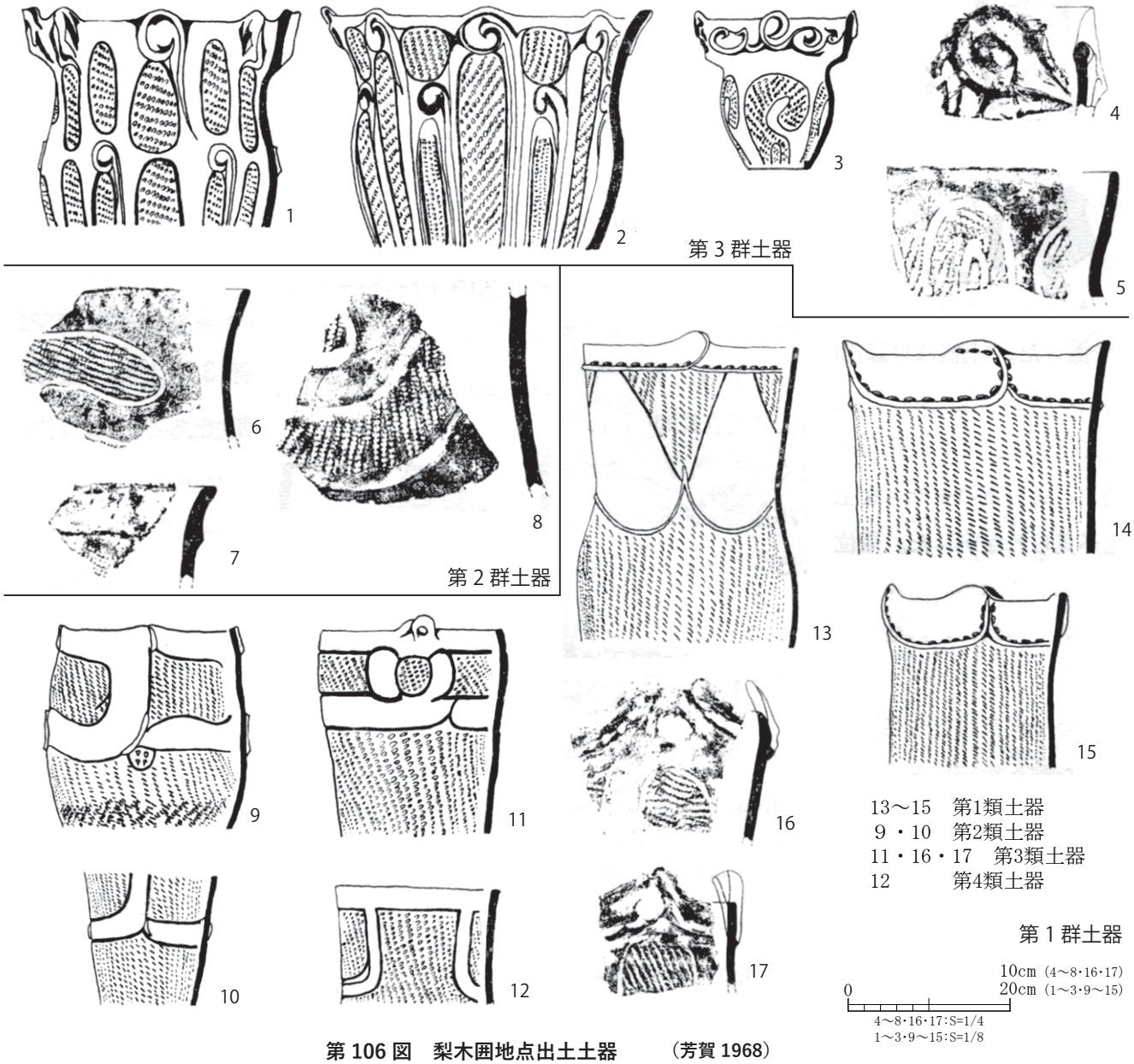
また、この大木８b 式から大木９式に至る時期については、地域性がとくに顕著に認められる。岩手県盛岡市柿ノ木平遺跡においてⅣ群とされた土器は、在地の編年で大木８b-3 式とされた土器群の特徴を強く残しつつも、渦巻文が簡

略化されつつ縦区画化が進行した大木９式に並行する土器群である（神原ほか　2008）。里浜貝塚で認められたような立体的な突起はほぼ認められず、「南東集落」の RA229 竪穴住居跡から類似土器が出土するのみとなる。今後、この時期における地域性について検討を進める必要があるだろう。

２）梨木囲地点出土土器

梨木囲地点では、1958 年に調査がなされ概要が報告されている（Taira and Kato　1959）。その中では、貝層間に破砕した魚骨を含む赤褐色の土層を挟み、貝層が上下に分かれることや、土器や人骨、鹿角器、糞石等が出土していることが報告されている。出土土器は、下部の貝層から多く出土しており、それらの土器は大木９式を主体としている。その後、1959・1961 年に調査（加藤・後藤・林　1962）がなされているが、そのうち 1961 年出土土器については、芳賀により報告がなされる（芳賀　1968）。

その報告では層出土土器のまとまりごとに第１～３群土器に分類されている（第 106 図、写真 136 － 138：註４）。第３群土器は、最下層の破砕貝層から出土した土器で点数は多くはないが、完形に近い資料も出土している（第 106 図１～５）。この種の土器について芳賀は、「渦巻隆線を主体的文様とするが、渦巻の内面が擦消され、その断面系は山



第 106 図　梨木囲地点出土土器　（芳賀 1968）

写真136 梨木囲地点地点出土土器（1）

第１群土器Ⅰ～Ⅴ、第２群土器Ⅵ～Ⅶ

写真137 梨木囲地点地点出土土器（2）

写真138 梨木囲地点地点出土土器（3）

形をなし」、「体部の隆帯にも擦消が強く用いられ、器形はキヤリパー型にくらべると、頸部の締まりが鈍く、正確にキヤリパー型とはいえないもの」であるため、「加曽利Ｅ式より１型式新しい型式に比定」できるもので大木９式と認識している。第１群土器は灰層、キサゴ層、アサリ層、純貝層出土の土器群で、大木 10 式にあたる。芳賀は第１～４類に細分している（第 106 図９～ 17）。また、第２群土器（第 106 図６～８）は純貝層下の混土層から出土した土器群で、芳賀は山内清男の「大木９・10 式の両者の土器破片」を含むものとしている。この土器群は芳賀が指摘するように破片だけであるため、判断が難しい所ではあるが、大木 10 式の前半段階（大木 10a 式：森　2008）にあたるものと捉えられる。

また、刺突文を有する土器（写真 138 － 8 ～ 41）が各層にわたり出現することから、「本地域に於ての長期の流行と見なすべきか」（芳賀　1968：pp.52）とされている。隆帯に沿うように刺突文を有する土器については、別稿（菅野 2022）において、大木 10 式の最終的段階に主体的に出現することを指摘した。この種の土器の地域的分布については以前より指摘されており（丹羽　1971 など）、同時期の仙台湾周辺域では、方形区画文を主体とする土器が分布している。その他の刺突文を有するこれらの土器の系譜についても、別途検討が必要である。

３）袖窪地点出土土器

袖窪地点では、1962 年に調査がなされ、1965 年に林謙作が袖窪地点出土土器３点と西の浜貝塚出土土器１点を提示し、称名寺式併行の土器に続くものとして「宮戸Ⅰ式（南境式）」を挙げ、それに先行するものとして袖窪地点出土土器を袖窪式として紹介している（林　1965：第 107 図）。

その後の 1993 年には、その 1962 年調査に参加していた小笠原好彦がＢトンレチ出土土器に関する報告を行っている（小笠原　1993）。その中では、Ｃ３区と拡張区の「下層の混貝土層」（pp.6）から出土した、大木 10 式の文様系譜との関係が強い土器群を袖窪Ⅰ式とした（第 108 図１～９）。そして、Ｃ１・Ｃ２区、Ｂ１～Ｂ４区において、混貝土

層より上の「黒色土層」（pp.6：註 5）より出土した土器群を主体とするまとまりを、「下層の混貝土層」出土土器より新しいものと捉え、袖窪Ⅱ式とした（第 108 図 10 ～ 18）。そして、梨木囲貝塚、西の浜貝塚出土土器（後藤　1989）と器形・文様を比較検討した上で、「梨木囲貝塚第二群土器（大木 10 古式）→西の浜貝塚第四層土器（大木 10 新式）→袖窪貝塚Ⅰ式土器→袖窪Ⅱ式土器」（pp.16：註 6）という順序を提起する。また、袖窪Ⅰ式と門前式が共伴することを確認し、林の袖窪式は袖窪Ⅱ式に該当するものと位置づける。さらに、文様のあり方から、袖窪Ⅱ式の次は南境貝塚 A 群土器から宮戸Ⅰｂ式（南境貝塚 B 群土器：後藤　1974）へと変遷すると予察的に推定する。

その後、石巻市山居遺跡（相原ほか　2007）を調査した相原淳一は、出土土器を出土層位と土器の特徴から第Ⅰ～Ⅹ群に区分している（相原　2009）。胴部に隆線による装飾を伴い、しばしば隆線上に連続刺突文を有するような土器を第Ⅵ群土器とし、それが袖窪式に該当するとしている（第 109 図 1 ～ 10）。そして袖窪式は、称名寺第 2 群土器（吉田　1960）と並行関係にあるものと指摘する。また、第Ⅶ群土器は隆線による装飾を伴い、隆線文の交点部分に 2 個 1 対の刻目文が施されるものであり、「門前式」とする（第 109 図 11 ～ 16）。この土器群は称名寺第 1 群土器に並行するものとする。

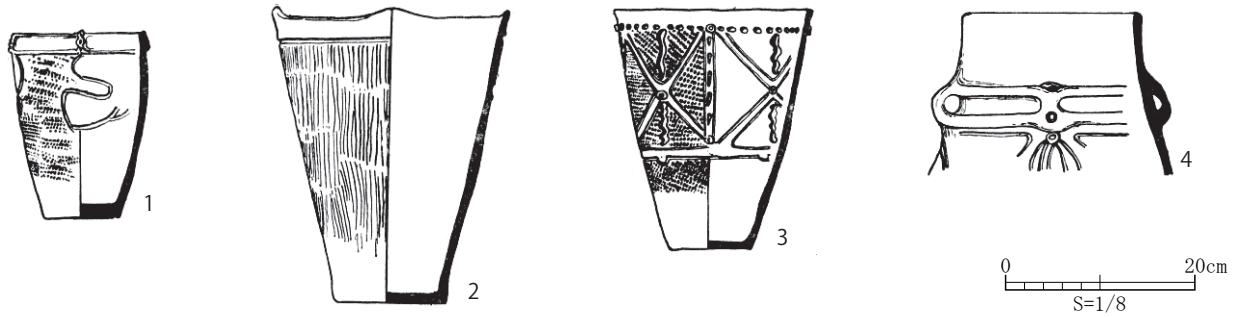
また丹羽茂は、楠本コレクションの南境貝塚出土土器を整理する中で、「大木 10 式に続くもの」として概期に関して検討を行っている（丹羽 2009）。小笠原の袖窪Ⅰ・Ⅱ式に関しては、それぞれの型式内容において共通要素が認められることなどから、袖窪Ⅰ群（古相）からⅡ群（新相）へと変遷してはいるが、独立した型式として区分することは難しいという認識を示す。

そのほかのこの時期の仙台湾周辺域の事例では、仙台市六反田遺跡の事例がある（田中　1981）。その資料は 1976 ～ 1978 年調査における B 北区、B 南区、北ハイ区第 9 層出土土器をもって、「大木 10 式の影響をうけ、後期前葉の宮戸Ⅰ式土器、南境式に先行し、後期初頭の袖窪式を含みこむものであり将来、資料の増加によっては「六反田式」設定の可能性をもの」（pp.111）とされた。資料は、文様帯の位置、文様構成等に基づくものであり、有文のものは 1 ～ 3 類に大きく分けられ、さらに細かく分類がなされている。

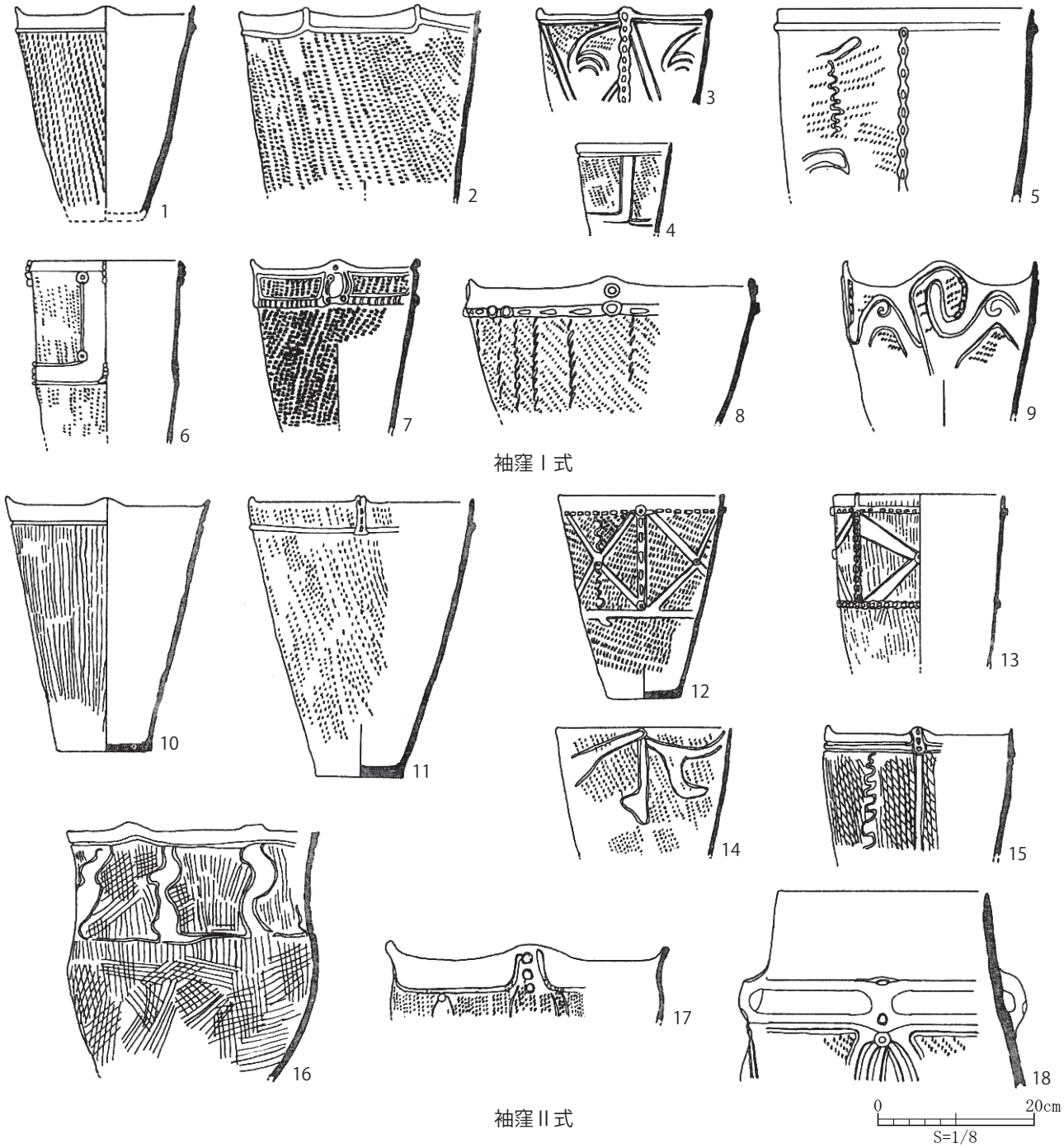
1984 年調査の報告書では、区・層位的まとまりから第Ⅰ群・第Ⅱ群土器の 2 つに大きく区分されている（佐藤 1987）。第Ⅰ群土器は、方形区画文に代表される土器で、1976 ～ 1978 年調査資料において大木 10 式とされた土器群を含んでいる。この群は綱取Ⅰ式、門前Ⅰ式あるいは門前 1b 式（熊谷　1986）の特徴を有する土器を伴う。また、この第Ⅰ群土器群は、丹羽（1981）の第Ⅲ段階から系譜として捉えているが、その第Ⅲ段階の内容に関して、刺突文を伴わない方形区画文も含まれるのではないかと指摘する。そして、その他の地域の類例と比べ、方形区画文土器は名取川水系など宮城県中央部に卓越するという地域的特徴を指摘している。

第Ⅱ群土器は、沈線文・磨消縄文が主体となる時期であり、後期前葉に認められる「蕨手文の祖型」（pp.328）が主体となる。なお、方形区画文は残っており沈線化が進んでいる。この群には、X 字状の沈線モチーフ（第 110 図）が存在することから「袖窪式」が包括されるとする一方で、宮戸Ⅰｂ式の典型的な倒卵形モチーフを有する土器が無いこと等を指摘し、「県北部の地域的な宮戸Ⅰｂ式土器分布圏とは、没交渉的な特徴も合せもっている」（pp.330）と指摘する。また、門前式や蛍沢式（成田　1981）との関連性にも触れつつ、綱取式との強い関連性を指摘している。この第Ⅱ群土器の年代的位置づけは、「綱取Ⅰ式の新しい部分から綱取Ⅱ式 a 段階に対比されるもの」とする（pp.330：綱取式は馬目（1977・1982）参照）。

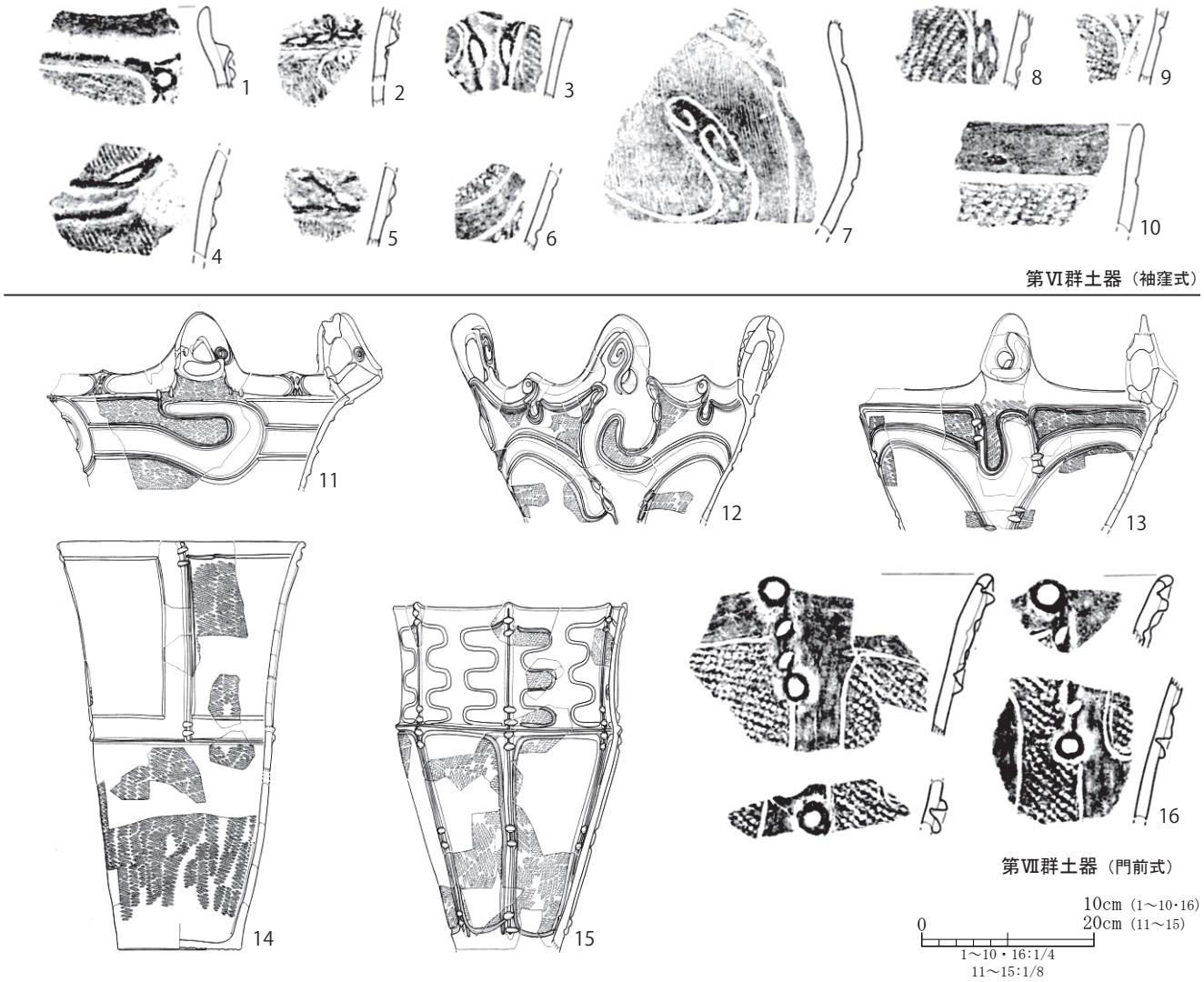
この報告書では、「宮戸Ⅰｂ式の内容が県内のこの時期の土器を代表しない」ものであり、その特徴から本遺跡の土器群は南境式と捉え、「第Ⅰ群土器は南境式の初頭段階に、第Ⅱ群土器は第Ⅰ群土器に後続するものである。これらの土器群は南境式の前半を構成するもの」と結論付ける（pp.333）。こうした、宮城県内における地域性に関する問題は、現在も課題となっている。



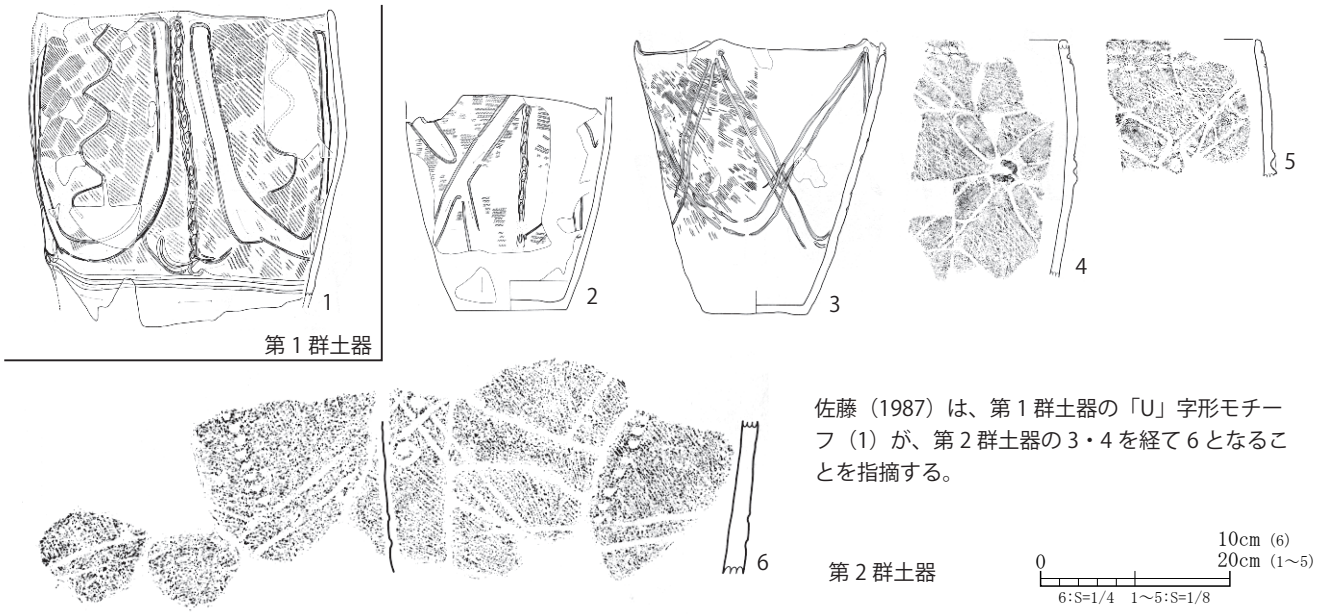
第 107 図　林謙作による「袖窪式」（林 1965）



第 108 図　小笠原好彦による「袖窪Ⅰ・Ⅱ式」（小笠原 1993）



第 109 図　山居遺跡第Ⅵ・Ⅶ群土器一部（相原ほか 2007）



佐藤（1987）は、第 1 群土器の「U」字形モチーフ（1）が、第 2 群土器の 3・4 を経て 6 となることを指摘する。

第 110 図　六反田遺跡における X 字状のモチーフ（1・2 田中ほか 1981、3 ～ 6 佐藤 1987）

（３）縄文時代後期前葉～晩期初頭の土器－台囲地点出土土器による宮戸諸型式の設定－

里浜貝塚出土土器による編年研究の中では、宮戸諸型式に関する研究が著名である。この編年研究は台囲地点を起点として進められてきた。

最初は 1952 年の台囲地点調査資料をもとに報告された事例である（後藤　1956：第 111 図）。表土から第一混土層までの出土土器を第一層土器とし、瘤状小突起、入組文、列点刺突文等を有する土器とした。同様に第二層土器は、第二貝層から第二混土層から出土した土器で、刺突列点文、Ｓ字状文様、縄文帯等を有する土器である。第三層土器は、第三貝層からその下の土層から出土した土器で、渦巻文、隆線・刻線・列点文等を有する土器となる。第一層土器は安行式、第二層土器は加曽利ＢⅠ・Ⅱ式、第三層土器は堀之内式に該当するものと指摘した。層位的な資料から土器群が分類されているが、残念ながら掲載された図が判別しづらいこともあり、その内容は判然としなかった。そのため、今回写真にて改めて提示した（写真 139・140）。

その翌年 1957 年には、同資料の整理が進んだとしてさらに検討を行っている（後藤　1957：第 113 図、この図は後藤（1962）を使用）。第三層土器は「１．隆線･陵線文土器」（第 113 図１・２）と「２．渦巻線刻施文土器」（第 113 図３）にわけ、それぞれ宮戸Ⅰａ式と宮戸Ⅰｂ式とする。これらは堀之内Ⅰ・Ⅱ式に比定する。第二層土器は、「１．帯状の擦消縄文・平行沈線施文土器」（第 113 図６・７・10・13・15・16）と「２．刻目施文土器」（第 113 図８・９）にわけ、同様に宮戸Ⅱａ式・宮戸Ⅱｂ式とし、加曽利ＢⅠ～Ⅲ式に平行するとする。第一層土器は、「１．瘤状小突起施文土器」のみ提示し、これを宮戸Ⅲａ式とし、宮戸Ⅲｂ式については台囲地点には存在しないため、「詳細は後の機会に譲り」（pp.6）とする。これは安行式に比定している。この内容は、1956 年 10 月 27・28 日に山形大学で開催された東北史学会にて、「陸前宮戸里浜貝塚出土の土器編年について」と題して報告されていたようである（東北史学会　1957）。

これらの型式の基準資料は、前年度は拓本のみであったが、破片等から推定復元の上、実測図として提示している。この中には、前年度提示した土器（写真 139・140）以外に新規の土器も加えており、実際に確認できた第二類土器２点の写真を写真 141-1・２に示した（註７）。

宮戸Ⅲ式については、1947・1948 年に調査された名取市金剛寺貝塚の報告にて再検討がなされている（第 112 図：後藤　1960）。まず、金剛寺貝塚出土土器を（1）瘤状小突起のある一群で「入組まれた磨消縄文」（pp.115）を施文するもの、（2）刺突列点文施文土器群、（3）刷毛目（櫛目）文土器群、（4）縄文施文土器群、（5）無文土器群、（6）入組文系の土器群の６つに区分する。（6）については、第一群「口縁突起の下部及び入組文の結合部に三叉文が必ずといってよいぐらい特徴的に配される」（pp.118）等の特徴があるものと、第二群「文様は口辺部に圧縮され、口辺部に沈刻の入組文が施文」（pp.118）された等の特徴を有するものに区分している。

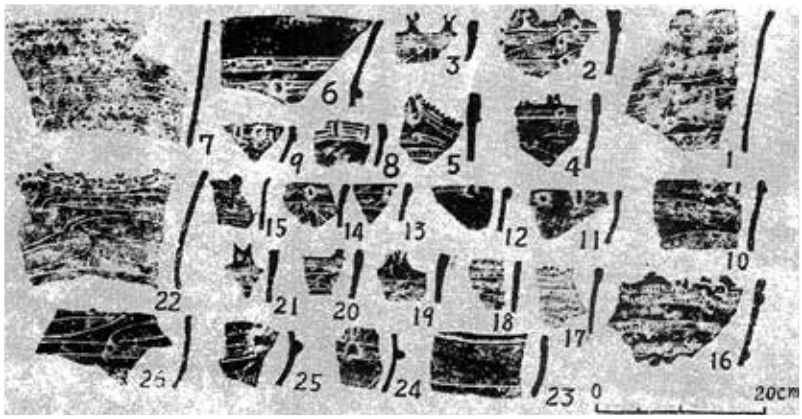
その上で、金剛寺貝塚の層位を踏まえ、表土から混土貝層と、貝層及び黒土層の出土土器群に区分されるとし、前者を金剛寺第一類「入組文を主体文様として瘤状突起を配した一群」、後者を金剛寺第二類「入組文を配し、また三叉文の施刻された一群」に分けられるとする。

第一類は当初区分の（1）に該当し、その中でも口縁部の縄文帯状に縦長の瘤状突起を施文したものを、安行Ⅰ式併行とみなし宮戸Ⅲａ式（第 112 図１）、入組文を施文し、ボタン状瘤状小突起、また棒状施文具で刺突して突起に擬したものを宮戸Ⅲｂ式、安行Ⅱ式に併行とした（第 112 図２・３）。（2）については、関東の紐線文系土器相当と捉え、詳細は不明であるが安行Ⅱ式併行（宮戸Ⅲｂ式）とする（第 112 図４～６）。

第二類は、当初区分の（6）、大洞Ｂ式に相当する。一方、女川町浦宿貝塚出土土器の中で、その土器群に類似するが、「波状口縁で突起部が三分し、その部分が八字に研磨され、そこに三叉文が彫刻され」、「縄文帯があって下部に入組文があり、結合部に三叉文があり、体部には一条の陵線などが施されたもの」（pp.120）を分離させ、大洞Ｂ式直前型式として宮戸Ⅳ式の名称を付けている（第 112 図７～10：註８）。

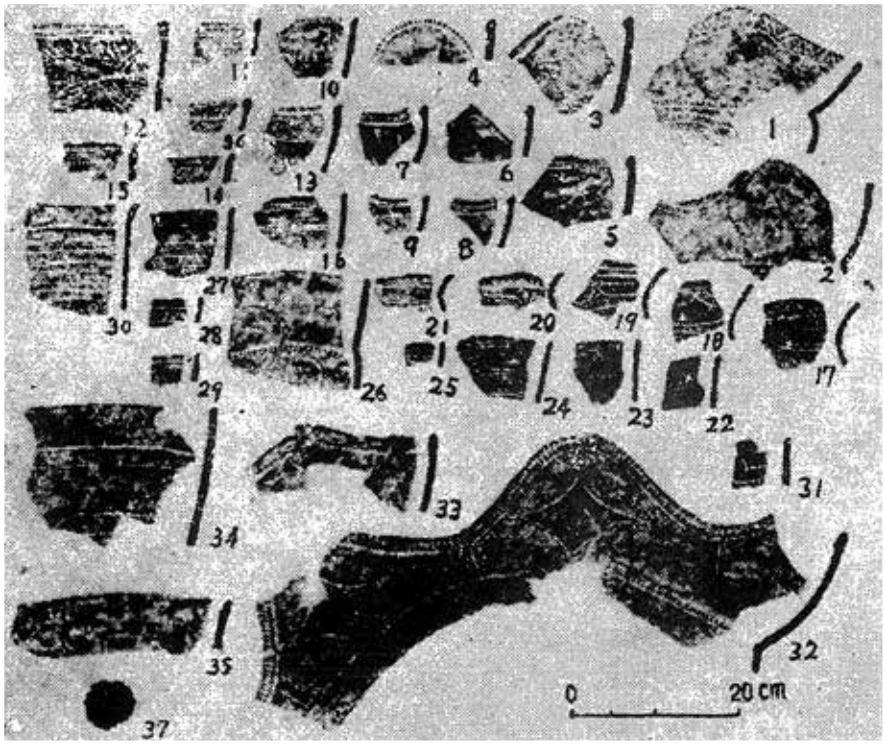
次に 1962 年には、宮城県内の資料の増加を踏まえ再度台囲地点出土土器に関する検討を行う（第 113 図：後藤 1962）。対象とするのは、先の 1952 年調査資料のほか、1955 年調査のＢ・Ｃトレンチ、1956 年調査のＧトレンチ出土資料となる。

本論では、1957 年論文と同様の分類がなされている土器群とそれ以外の新規の土器群がある。まず、第一類土器として第一群（第 113 図１・２）と第二群（第 113 図３・４）にわけており、これは 1957 年論文の第三層土器（宮戸Ⅰ



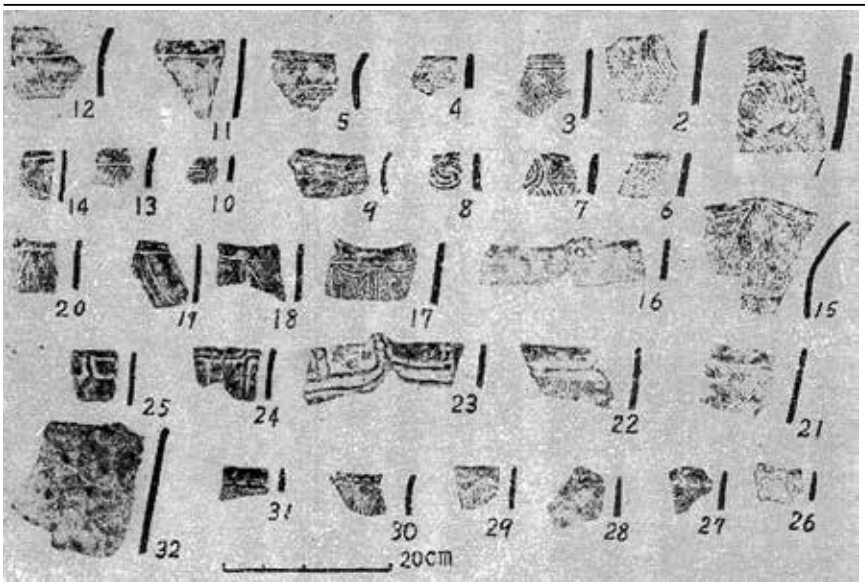
第１層土器（安行１式併行）

1. 瘤状小突起を有する土器
2. 入組文を有する土器
3. 列点刺突文を有する土器
4. 刷毛目を有する土器



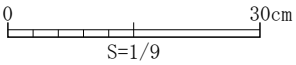
第２層土器（加曽利ＢⅠ・Ⅱ式併行）

1. 刺突列点文を有する土器
2. S 字状施文土器
3. 縄文帯施文土器
4. 刷毛目を有する土器
5. 縄文施文土器
6. 無文土器



第３層土器（堀之内式併行）

1. 渦巻文系土器
2. 隆線・刻線・列点文施文土器
3. 縄文施文土器
4. 無文土器



第 111 図　里浜貝塚台囲地点出土土器（後藤（1956）時の分類）

写真139 台囲地点出土土器（1）

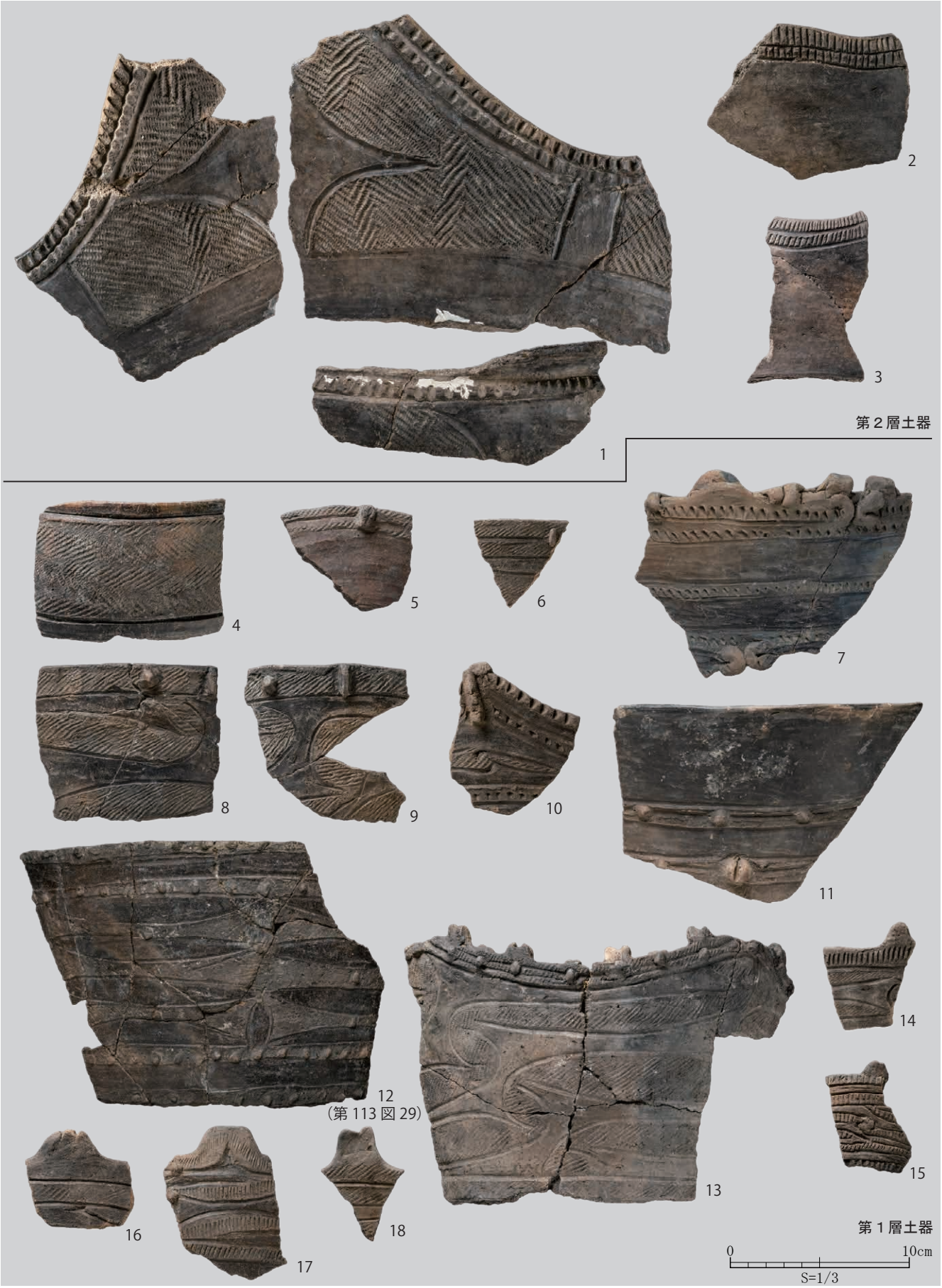


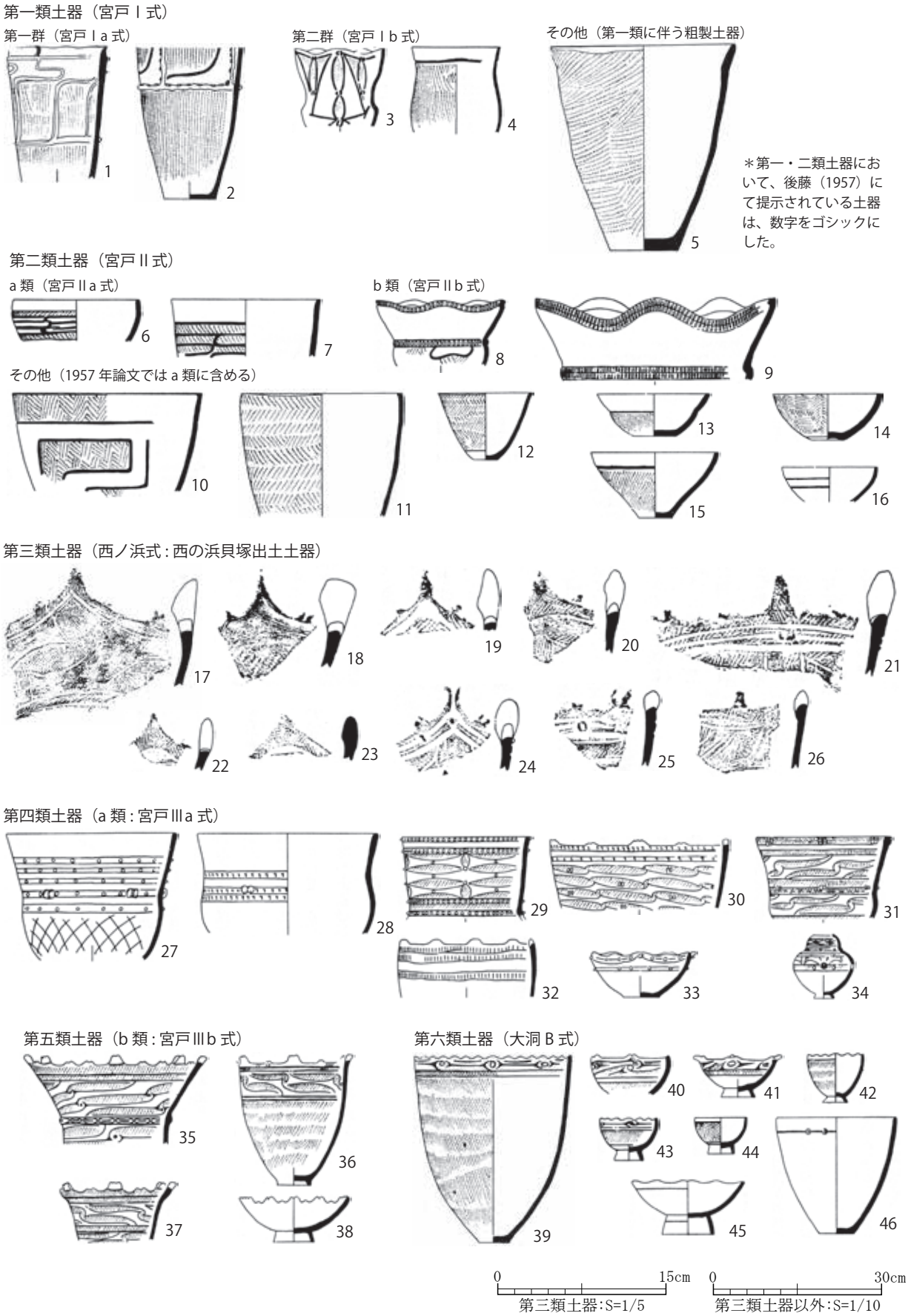
写真140 台囲地点出土土器（2）

写真141 台囲地点出土土器・土製品　（1・2: 第二類土器 : 後藤 1957）

第 112 図　後藤（1960）時の宮戸Ⅲ・Ⅳ式の基準資料　（後藤 1960 を改変）

式）の区分と同様である。第二類土器は、同様に第二層土器（宮戸Ⅱ式）に相当し、器形の分化を特徴としてあげつつも、平行沈線のもの（a 類：第 113 図 6 ・ 7 ）から刻目帯を有する土器（b 類：第 113 図 8 ・ 9 ）への変遷を想定している。ただし宝ヶ峯遺跡出土土器との比較から、台囲地点では「団扇状の扁平な突起をもった」ものが無いこと等の違いを挙げ、宮戸Ⅱ式の問題点としている。また、第四類土器は、「疣（いぼ）状小突起が器面に施された一群」であり、1957 年論文の第一層土器（宮戸Ⅲ式）に該当するものであるとしている（第 113 図 27 ～ 34、写真 143-1・3：註 9 ）。

新たに提示された土器群として、第三類土器がある（第 113 図 17 ～ 26、写真 142：註 10）。器形は「大波状か山形の口縁部で、外反し頸部で締まる」（pp.41）ものであり、口縁部・頸部に縄文帯が配され、口縁部等に瘤状の小突起が確認できる。また、大きな特徴として「波状口縁の頂部に親指状の突起があり、この突起間に小突起がいくつか配されその小突起に刻目が施されて二分される」（pp.41）ことを挙げている。また、「第二類土器の刻目文の施文された土器群の影響が非常に強いものであり、次期の疣状小突起の第四類土器への過渡的型式」（pp.46）と位置づけ、西ノ浜式と名付け、曽谷式と併行するものと推定する。



第113図　里浜貝塚台囲地点等出土土器の後藤（1962）時の分類（後藤1962を改変）

そのほか第五類土器がある（第 113 図 35 ～ 38、写真 143-2・4）。この土器群では、第四群土器に認められた疣状突起がなくなる。そして、大突起と小突起が配された口縁部となり、「擦消手法によって入組文が配され、結合部分に三叉状の文様」(pp.43)が展開する。この土器群は、大洞Ｂ式ではなく安行Ⅱ式に並行するものとして捉えている。そして、第四類土器を宮戸Ⅲａ式、この第五類土器を宮戸Ⅲｂ式とした。第六類土器は、文様帯が口縁部付近に集約され、入組文が施文される土器群となる（第 113 図 39 ～ 46、写真 143-5・6）。この土器群は大洞Ｂ式で、安行Ⅲａ式に併行するものとする。1960 年論文と比較すると、1960 年論文の（1）瘤状小突起のある一群で「入組まれた磨消縄文」を施文するものと（2）刺突列点文施文土器群を宮戸Ⅲａ式、（6）入組文系の土器群のうち宮戸Ⅳ式としたものを宮戸Ⅲｂ式としたことになり、宮戸Ⅲ・Ⅳ式の取り扱いを大きく変更している。

また 1960 年には、1955 年度台囲調査地点Ｃトレンチの資料に関する報告が斎藤良治によりなされる（斎藤 1960）。その出土土器は、最上層の第１貝層より主として出土する土器群、その次の中間層の第一混土層・第二貝層・第二混貝土層より主として出土する土器群、最も下層の第三貝層・第三混土層より主として出土する土器群の３種に分けることができ、上層のものは大洞Ｂ式、中層のものは大洞Ｂ式より一型式前のもの、下層のものは後期のものと判断している。

その後 1968 年には、この台囲地点Ｃトレンチ出土上層の土器群を第５類土器、中層の土器群を第４類土器（第 114 図 23 ～ 27）、下層の土器群を第３類土器（第 114 図 15 ～ 21）とした上で、西の浜貝塚Ｒトレンチ出土土器との比較検討を行っている（斎藤　1968）。西の浜貝塚Ｒトレンチ出土土器のうち、上部の第一混土層から出土した土器群は、台囲地点の第３類（宮戸Ⅲａ式）と同様の土器であり、その下層の第１貝層・第二混土層から、第１・２類とした土器群が出土している。この第１・２類土器に関しては、発掘中に区分することはできなかったことから、層位的な関係は不明（pp.57）ではあるが、第１類土器は西ノ浜式（第 114 図１～６）、第２類土器は宮戸Ⅲａ式に相当する（第 114 図７～ 14）。ここで問題となるのが、第２・３類の位置づけである。その特徴の違いは、①体部に付された小突起は鋭さを失いボタン状の突起となる、②口縁部等に付されていた比較的大きい突起は、２個の連続した突起に変化している、③第２類土器では入組文系と平行沈線文系に分けることができるが、第３類ではそのような系統は認められず、１つの土器に統合される可能性を推定できることなどを挙げている。そのため、第３類土器は、宮戸Ⅲａ式に後続する型式として指摘する。なお、第２類土器の第 114 図７、第３類土器の第 114 図 18・20・21 は、後藤（1962）が宮戸Ⅲａ式とした土器にあたる。

そのほか、同時期の宮戸編年に関わる報告には、槇要照が台囲地点 1958 年度調査資料を用いて検討し、西ノ浜式から大洞Ｂ式までの各型式の土器を確認している（槇　1968）。

宮戸諸型式に関する研究が進められたほぼ同時期の『宮城県史』1（1957）には、伊東信雄により後期の型式として南境式、宝ヶ峯式、金剛寺式の３型式が提示されている（第 115 図：伊東　1957）。宮戸諸型式との関連で触れておきたい。

南境式は、石巻市南境貝塚出土土器を基準としている。その土器群は、器形分化・磨消縄文のさらなる盛行から「大木 10 式の延長」（pp.44）とみなし、文様は「隆線文は口縁部に圧縮されて口縁部の装飾になり、そのあとに曲線的な擦消縄文が発達」（pp.44）し、上部の開いた深鉢、口の狭まった壺、蓋のある土器の存在を指摘する。その基準資料としては南境貝塚出土の壺１点のみが提示されている（第 115 図①：註 11）。

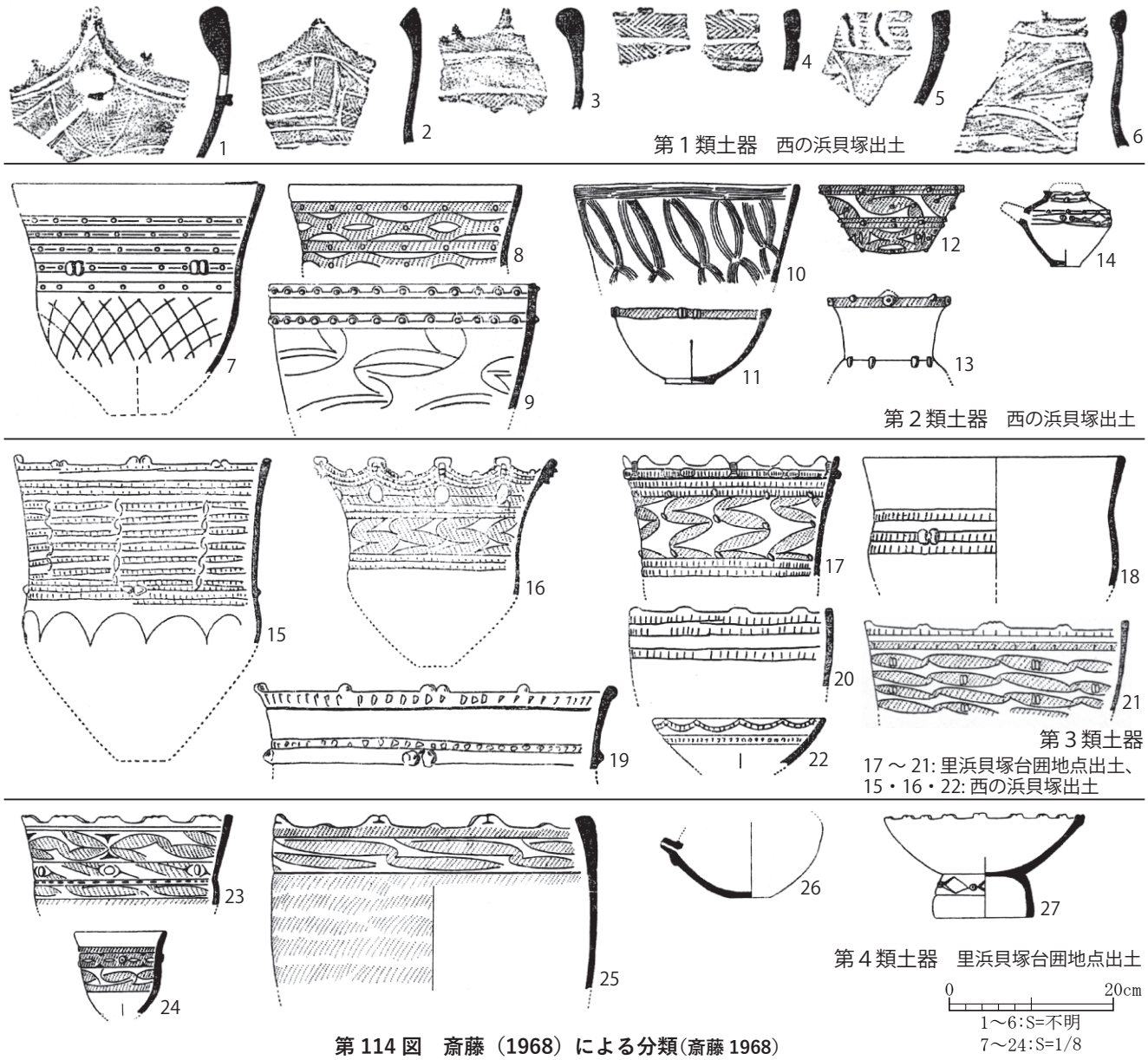
宝ヶ峯式は、宝ヶ峯遺跡出土土器を基準としている。「関東の加曽利Ｂ式に並行する土器」（pp.44）であり、「土器型式はもつと細かに分類し得るが、ここではその必要はなかろう」（pp.44）としている。器形の分化が著しいとし、各種の器形を写真で提示する。精粗の区別があり、精製土器の文様は「縄文擦消の手法によってあるいは曲線的な、あるいは帯状の文様に表している」（pp.44）とする。基準として示されている土器は、写真が鮮明ではなく見づらいが、後に宝ヶ峯遺跡の報告書（志間　1991）が刊行されており、そこで図化等されている（第 115 図②・③）。

金剛寺式は、金剛寺貝塚の名を取って名称が設定された。「文様としては入組文があり、所々に疣状の小突起が附けられる」ものとしている。その事例として宝ヶ峯遺跡出土の人面付香炉形土器を提示している（第 115 図④）。なお、この土器は、現在所在不明とのことである（志間　1991：pp.14）。

これらの伊東の後期型式は、宝ヶ峯式のみは比較的多くの基準資料も提示されており、ある程度編年的位置も明確ではあるが、それ以外の型式についてはその内容が不明である。

写真142 西の浜貝塚出土西ノ浜式基準資料

写真143 台囲地点出土土器
（1・3: 第四類土器、2・4: 第五類土器、5・6: 第六類土器、後藤 1962）



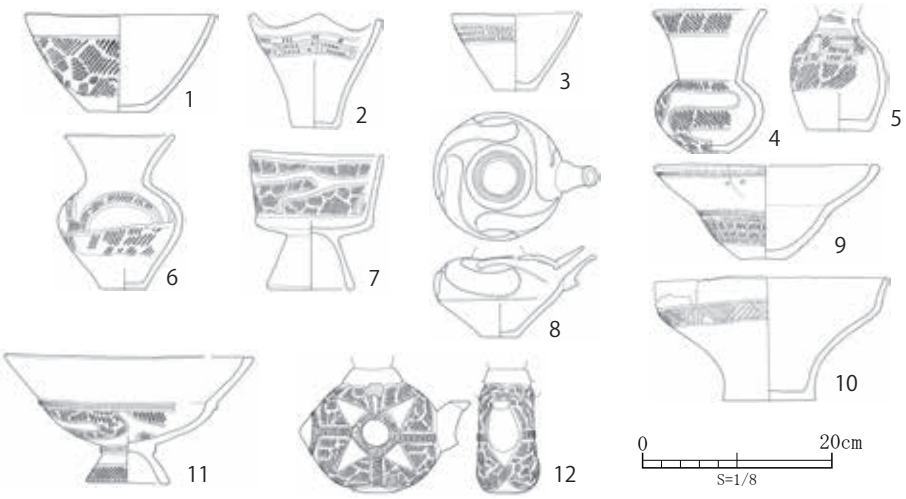
第 114 図　斎藤（1968）による分類(斎藤 1968)

その後、石巻市沼津貝塚出土遺物を考古資料第１～３集として紹介する中で、これらの型式について触れている。まず 1962 年の第１集では、写真 144 － 4 の土器を解説する際に、「縄文後期末、福島県で新地式、宮城県で金剛寺式と呼ばれている型式」（伊東 1962：pp.5）とする。1964 年の第３集では、最初に紹介資料に金剛寺式が多いことから「金剛寺式はさらに細分せられるべきものと最近は考えているが、本集では後期末の土器を一括して金剛寺式として取扱った」とする（伊東 1964：pp.2)。そのうえで、南境式（写真 144 － 1)、宝ヶ峯式（写真 144 － 2 ・ 3)、金剛寺式（写真 144 － 5 ～ 11) の土器について解説をする。これらの資料の理解は、『宮城県史』(1957) と同様のものであろう。

後の『宮城県史』34（1981）では、「後期は土器編年が最も遅れていた時期で、「古代史」（註 12）では、南境式、宝ヶ峯式、金剛寺式の三型式に大別されていたのみである。その後、後藤勝彦を中心としてその細別が推しすすめられたが、その内容についての受け取り方にくいちがいが生じている」と評されている（藤沼　1981：pp.389)。そして、「はじめに」で示された伊東による編年表（伊東　1981：pp.381）では、南境（宮戸Ⅰ b)、宝ヶ峯（宮戸Ⅱ ab)、金剛寺（宮戸Ⅲ ab）と併記されている。これらのことから、後藤の宮戸編年は、伊東の後期編年より後出で、その細別として理解されている様相が窺える。

この『宮城県史』34 における宝ヶ峯遺跡の項目説明は伊東が担当し、図版 74 の宝ヶ峯遺跡出土土器を基準として設

①南境式基準資料
（上：伊東（1957）より作成
下：石巻市教育委員会提供）



②宝ヶ峯式基準資料（伊東（1957）掲載資料を元に志間（1991）より選択し作成）

③宝ヶ峯式基準資料（伊東（1957）より作成）

④金剛寺式基準資料
（伊東（1957）より作成）

第 115 図　伊東信雄（1957）による後期編年基準資料

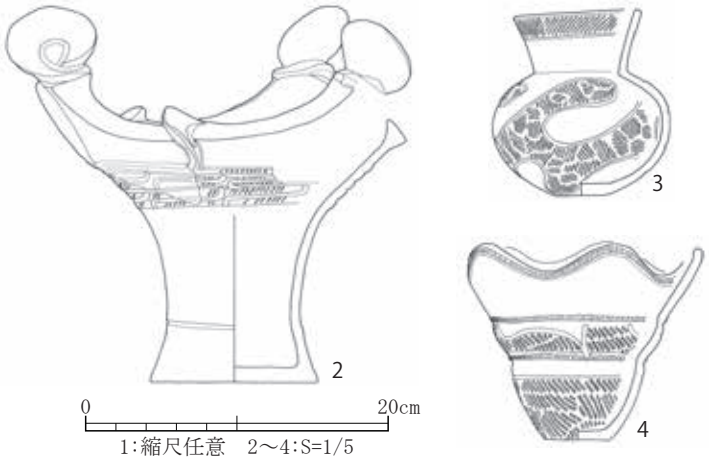
定した旨が記載されている（伊東 1981：pp.395）。この図版 74 掲載土器のうち、1957 年論文のものと同じものは、図版 74 － 5 の 1 点（第 115 図－②－ 10）のみであり、それ以外は新たに掲載された土器になる（第 116 図）。その中には、立体的な突起を有する深鉢（第 116 図 2 ）も含まれているが、この種の土器を指して後藤氏は、「団扇状の扁平な突起をもった」ものが台囲地点には無いと指摘しているのであろう。なお、図版 74 － 1 の土器（第 116 図 1 ）も現在所在不明となっている（志間　1991：pp.11）。

こうした型式名称について、小林圭一は気仙沼市田柄貝塚出土事例をもとに須藤隆（1995）が西ノ浜式～宮戸Ⅲｂ式新段階と呼称していることに関して、例えば宮戸Ⅲｂ式は更に細分される可能性があることから、古・新という名称ではさらに細分する際に複雑になること、宮戸Ⅰｂ式以外の他の型式名称が使われていないことで「いきなり宮戸Ⅲというような言葉がはじまる」ということを問題点として上げ、伊東の型式名を採用して加曽利Ｂ式に対応するものを宝ヶ峯１～３式、曽谷式や氏の瘤付土器Ⅰ段階に対応するものとして西ノ浜式、Ⅱ段階が金剛寺１式、Ⅲ・Ⅳ段階を金剛寺２a・２b 式と提唱する（pp.143:：谷藤・関根編　2001）。なお、金剛寺式の名称は、福島県荒屋敷遺跡報告書（中村　1990）にて中村五郎が金剛寺１期、２期としているということを指摘し、プライオリティーはそちらにあることを記す（註 13）。また、近年では「郡山低地編年」（小林　2022）を提示している。この論考は、「下ノ内遺跡→六反田遺跡→下ノ内浦遺跡→大野田遺跡への変遷序列を前提として」、「大木 10 新式→門前式・袖窪式→南境１古式→南境１新式→南境２式の５階梯の型式内容を吟味」（pp.87）することを目的としたものであり、後期前葉についても南境式の名称を用いて編年を提示する。

伊東信雄による後期土器編年が提示された『宮城県史』1 は、1957 年 3 月 31 日に刊行されている（伊東　1957：註

縮尺は任意　1: 南境式、2・3: 宝ヶ峯式、4 ～ 11: 金剛寺式

写真144 沼津貝塚出土後期土器（伊東 1962・1964 より作成）



第 116 図　『宮城県史』（1981）宝ヶ峯遺跡出土宝ヶ峯式基準資料
（1:『宮城県史』34 より作成、2 ～ 4:『宮城県史』34 を元に志間 1991 より選択し作成）

14)。一方で、後藤勝彦は、1952 年の里浜貝塚台囲地点調査資料に関して、1956 年 11 月 1 日に刊行された『地域社会研究』７・８にて概要（後藤　1956）をまとめ、1957 年論文（後藤　1957）において宮戸の各型式名を提示している。その 1957 年論文の文末には伊東信雄･加藤孝より指導を受けた旨と、1957 年 1 月の記載がある。また、『地域社会研究』７・８刊行前の 1956 年 10 月 27・28 日に開催された東北史学会において、後藤は「陸前宮戸島里浜台囲貝塚出土の土器編年について」と題して報告（東北史学会　1957：pp.67）していたことも記載されている。

この『地域社会研究』７・８では加藤孝により、1956 年東北史学会での後藤報告を註とし「宮戸島貝塚の発掘調査により、陸前地方における後期縄文式文化の各型式が判明し、宮戸Ⅰab 式、宮戸Ⅱa 式、宮戸Ⅱb 式、宮戸Ⅲab 式の名称せられている」（加藤　1956：pp.48）と宮戸各型式名称を示す。さらに、加藤は 1955 年論文にて早期から晩期の編年表を提示する際に「昭和 30 年度宮戸島遺跡調査会に於いて、調査成果を基礎として成る型式名」（加藤　1955：pp. 3）とし、括弧付で宮戸島Ⅰ A.B、宮戸島Ⅱ A、宮戸島Ⅱ B、宮戸島Ⅲ A.B の名称を記載している。名称設定の経緯や型式内容等の詳細が不明なので明確な判断はできないが、宮戸島調査会において 1955 年当時には宮戸編年の大筋は完成していたものと推察される。

以上のように、後藤等による宮戸編年研究が進められてきた様相を示した。今回、頁数の都合もあり、宮戸編年研究の基礎的な部分の提示に留まった、その後の宮戸各型式については別稿にてまとめたい。宮戸Ⅲb 式以降の晩期土器に関しては、東北歴史資料館による西畑地点調査出土土器の大洞 C2 式土器に関する研究（藤沼ほか　1983）を初めとして多くの研究が進められてきた。また、後期後半を含め晩期の土器については、小林圭一氏によって的確にまとめられている（小林　2010・2013 など）。他には、加藤孝らにより調査された寺下囲地点出土弥生土器に関しては、日下氏により丁寧にまとめられている（日下 2007）。

註１）概期の土器については、早瀬亮介氏（株式会社加速器分析研究所）からご助言を頂いた。

註２）里浜貝塚 P32‐21 区出土土器については、水沢教子氏（長野県立歴史館）からご助言やご意見等頂いた。

註３）この丹羽論文が掲載されている『縄文土器大観』では、該当する土器が大木８b ～９式と表記されている。なお、「最終的」とされた土器は、論文で示される図番号と実際の図がずれている。論文では「882 ～ 885」（pp.348）とされているが、文中での説明を踏まえると「887 ～ 889」（pp.228）だろうか。

註４）写真 136 ～ 138 にて掲載した資料は、現在確認できたもののみ提示した。これらの資料は、2011 年の東日本大震災による津波により被災したものであり、その後の文化財レスキューにより回収された資料となる。そのため、現在は確認できない資料も多数認められた。被災した古い調査資料の中には、注記が不明瞭になっているものもあり、特定が困難なものもある。将来的に別の収蔵場所から発見される可能性もあることから、今回接合等の復元は積極的に行っていない。なお、本稿において里浜貝塚出土土器の写真資料を提示する場合は、同様の状況となる。

註５）小笠原（1993）３図に記載された層名と合わせると、「下層の混貝土層」は「下層の混土貝層」、「黒色土層」は「黒土層」であろう。

註６）梨木囲地点出土土器について紹介されている第二群土器の内容が、芳賀氏が分類した内容とは異なる（芳賀 1968）。ただし、結果としては、第二群土器は「大木 10 古式」（pp.16）として認識されている。

註７）写真 141 には、本論の主旨とは異なるが三十稲場系の刺突文を有する土器（３）、巻き貝形土製品（４）も加えた。また、第 113 図と対比した場合に確認できた資料は、写真 139 ～ 143 に示した。第 113 図 1 は、写真 139 － 1 である可能性も考えられる。写真 139 － 1 の部分より上部に、第 19 図 1 のような文様が続く類例はおそらく無い。

註８）なお、浦宿（尾田峯）貝塚出土土器 4 点のうち 1 点（第 112 図８）は、図から判断すると『女川町誌』続編（茂木 1991：図９－５、pp.465）にて実測図が掲載されている。

註９）なお、文中では明確に記されていないが、第 4 類土器第 113 図 27 は、（斎藤　1968）において西の浜貝塚出土土器とされている。西の浜貝塚Ｒトレンチ出土土器（第３図１：後藤　2008b）であろう。同様に第 113 図 33 の土器も西の浜貝塚Ｎトレンチ出土土器（後藤　2009）の可能性もあるが、微妙に細部が異なる。また、第三類土器とした全ての資料も、松島町西の浜貝塚Ｓトレンチ出土土器（後藤　2008b）である。

註 10）この資料は、松島町教育委員会にて所蔵している。資料の調査・利用にあたっては、松島町教育委員会の森田義史氏、米城百合子氏にご配慮頂いた。

註 11）この資料は、現在は石巻市博物館にて所蔵しており、写真の借用・掲載にあたっては、柳沢佳奈氏（石巻市教育委員会）のご配慮を得た。なお、伊東は、後に山内清男の編年についてまとめて回顧した際に「大木 10 ＝境１」、堀の内２と併行して「大洞 Pre-B ３＝境２」と記載している（伊東　1977）。境は、南境貝塚のことで毛利総七郎収蔵資料を見たのだろうと記載する。後期前葉の型式名に南境貝塚を用いたのは、こうした学史的背景もあるのだろう。

註 12）『宮城県史』１の（伊東　1957）のこと。

註 13）なお、中村氏は「仙台湾周辺のこの時期を宮戸Ⅲａ・ｂ式と呼ぶことも考えたが、研究史を振り返ると混乱を招きかねない。後藤の新たな命名を期待して、以下では金剛寺１期・同２期との仮称で説明しよう」（中村 1990：pp.247）としている。

註 14）この時期の学史については、（相原　2008）が詳しく、本論でも参考とした。

引用参考文献

会田容弘 1999　『里浜貝塚平成 10 年度発掘調査概報』鳴瀬町文化財調査報告書第５集　鳴瀬町教育委員会

会田容弘 2000　『里浜貝塚平成 11 年度発掘調査概報』鳴瀬町文化財調査報告書第６集　鳴瀬町教育委員会

相原淳一 1986a「東側遺物包含層」『小梁川遺跡遺物包含層土器編 原頭遺跡・養源寺跡・大熊南遺跡』宮城県文化財調査報告書第 117 集　宮城県教育委員会・建設省東北地方建設局七ケ宿ダム工事事務所　pp.23-608

相原淳一 1986b「第Ⅰ群土器」『田柄貝塚Ⅰ』宮城県文化財調査報告書第 111 集　宮城県教育委員会・建設省東北地方建設局　pp.307-　312

相原淳一 1990　「東北地方における縄文時代早期後葉から前期前葉にかけての土器編年－仙台湾周辺の分層発掘を中心に－」『考古学雑誌』　76-1　pp.1-65

相原淳一 2008　「阿武隈川流域における縄文時代後期初頭の土器編年研究序説」『蔵王東麓の郷土誌』中橋彰吾先生追悼論文集刊行会 pp.97-132

相原淳一 2009　「東北地方における縄文時代中期末葉から後期前葉に関する土器編年 - 宮城県石巻市山居遺跡の調査成果から -」『東北歴史博物館研究紀要』10　pp.1-10

相原淳一 2015　『東北地方における最古の土器の追求 1914.1.28-2011.3.11』　纂修堂

相原淳一ほか 2007　『山居遺跡（縄文時代編）ほか』宮城県文化財調査報告書第 214 集　宮城県教育委員会

阿部博志ほか 1994　『里浜貝塚Ⅸ』東北歴史資料館資料集 36　東北歴史資料館

伊東信雄 1957　「古代史」『宮城県史』1（古代・中世史）　宮城県史刊行会　pp.3-171

伊東信雄 1962　「解説」『沼津貝塚出土石器時代遺物』考古資料第一集　東北大学文学部東北文化研究室　pp.2-6

伊東信雄 1964　「解説」『沼津貝塚出土石器時代遺物』考古資料第三集　東北大学文学部東北文化研究室　pp.2-9

伊東信雄 1977　「山内博士東北縄文土器編年の成立過程」『考古学研究』24-3・4　pp.164-170

伊東信雄 1981　「はじめに」『宮城県史』34（資料編 11）　財団法人宮城県史刊行会　pp.379-381

今村啓爾 2010　『土器から見る縄文人の生態』　同成社

小笠原好彦 1963　「東北地方南部における前期末から中期初頭の縄文式土器」『仙台湾周辺の考古学的研究』　法文堂　pp.21-35

小笠原好彦 1993　「袖窪貝塚出土の縄文後期初頭土器」『宮城史学』特別号（14・15・16 合併号）　pp.4-22

加藤孝 1955　「宮城県登米郡新田村糠塚貝塚について」『登米郡新田村史』　宮城県登米郡新田村役場　附録 pp.1-11

加藤孝 1956　「考古学上よりみた宮城県」『地域社会研究』7・8　地域社会研究会　pp.45-68

加藤孝・後藤勝彦・林謙作　1962　「宮城懸宮戸島貝塚梨ノ木囲地区出土縄文式土器についての一考察」『日本考古学協会第 28 回総会研究発表要旨』　日本考古学協会　p.14

加藤道男・山田晃弘　1991　『里浜貝塚Ⅷ』東北歴史資料館資料集 32　東北歴史資料館

神原雄一郎ほか　2008 『柿ノ木平遺跡・堰根遺跡』 盛岡市都市整備部区画整理課
菅野智則 2022 「大木式土器の終焉－西の浜貝塚第 2 貝層出土土器の位置付け－」『宮城考古学』24　pp.117-128
興野義一 1967 「宮城県糠塚貝塚の吟味 (1)」『歴史』35　pp.87-88
興野義一 1981 「糠塚貝塚について」『迫町史』 迫町　pp.1105-1136
興野義一 1984 「大木式土器について」『宮城の研究 1』考古学篇　清文堂出版株式会社　pp.173-190
興野義一 1996 「山内清男先生供与の大木式土器写真セットについて」『画龍点睛 山内清男先生没後 25 年記念論集』 山内清男先生没後 25 年記念論集刊行会　pp.215-224
日下和寿 2007 「宮戸島里浜貝塚より発見せられた弥生土器」『考古学談叢』六一書房 pp.531-576
熊谷常正 1986 「門前式土器の検討」『岩手県立博物館研究報告』4　岩手県立博物館
木暮　亮ほか 2018 『中沢遺跡』石巻市文化財調査報告書第 14 集　石巻市教育委員会
後藤勝彦 1956 「宮城県宮戸島里浜台囲貝塚の研究」『地域社会研究』 7 ・ 8　東北大学地域社会研究会　pp.191-202
後藤勝彦 1957 「陸前宮戸島里浜台囲貝塚出土の土器編年について」『教育論文』2　塩釜市教育委員会　pp.1-6
後藤勝彦 1960 「宮城県名取市高館金剛寺貝塚出土縄文式土器の研究」『地域社会研究』9・10　東北大学地域社会研究会　pp.109-122
後藤勝彦 1962 「陸前宮戸島里浜台囲貝塚出土の土器について - 陸前地方後期縄文文化の変年的研究 -」『考古学雑誌』48-1　pp.37-48
後藤勝彦 1968 「宮城県七ヶ浜町吉田浜貝塚 (1)」『仙台湾周辺の考古学的研究』 宝文堂　pp.1-20
後藤勝彦　1974 「縄文後期宮戸Ｉｂ式周辺の吟味－南境貝塚出土の土器をもとにして－」『東北の考古・歴史論集－平重道先生還暦記念論集－』 宝文堂　pp.79-110
後藤勝彦 1989 「西の浜貝塚」『松島町史』資料編 1　松島町　pp.441-528
後藤勝彦 1991 「吉田浜貝塚」『多賀城市史』4 考古資料　多賀城市　pp.536-541
後藤勝彦 2008a『西の浜貝塚』松島町文化財調査報告書第 1 集　松島町教育委員会
後藤勝彦 2008b『西の浜貝塚Ｒ・Ｓトレンチの調査（昭和 34 年・昭和 35 年)』松島町文化財調査報告書第 3 集　松島町教育委員会
後藤勝彦 2009 『西の浜貝塚Ｎトレンチの調査（昭和 34 年)』松島町文化財調査報告書第 4 集　松島町教育委員会
後藤勝彦 2010 『桂島貝塚』塩竈市文化財調査報告書第 8 集　塩竈市教育委員会
小林圭一 2010 『亀ヶ岡式土器成立期の研究』 六一書房
小林圭一 2013 「東北中部における縄文時代後期後葉の型式変化－田柄貝塚と里浜貝塚の出土層準の再確認－」『研究紀要』12　東北芸術工科大学東北文化研究センター　pp.45-105
小林圭一 2016 「会津地方の大木 6 式土器と沼沢火山の噴火」『研究紀要』15　東北芸術工科大学東北文化研究センター　pp.25-77
小林圭一 2022 「郡山低地遺跡群からみた縄文時代後期初頭～前葉の土器型式」『宮城考古学』24　pp.87-116
斎藤良治 1960 「宮城県鳴瀬町宮戸台囲貝塚の研究－昭和三十年度Ｃトレンチ－」『地域社会研究』9・10　東北大学地域社会研究会　pp.123-131
斎藤良治 1968 「陸前地方縄文文化後期後半の土器編年について－宮戸台囲貝塚及び西ノ浜貝塚出土の土器を中心として－」『仙台湾周辺の考古学的研究』 宝文堂出版　pp.54-67
佐藤　洋 1987 『六反田遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第 102 集　仙台市教育委員会
志間泰治 1991 『宝ヶ峯』 財団法人齊藤報恩会
白鳥良一 1974 「仙台市三神峯遺跡の調査」『東北の考古・歴史論集』 宝文堂　pp.1-54
菅原弘樹・墓田裕二　2003 『里浜貝塚平成 13・14 年度発掘調査概報』鳴瀬町文化財調査報告書第 8 集　鳴瀬町教育委員会
須藤　隆 1995 『縄文時代晩期貝塚の研究 2 中沢目貝塚』 東北大学文学部考古学研究会
Shigemichi Taira and Takashi Kato.　1959　On The Earthen Wares of The Third Jomon Culture from Nashikigakoi in Miyato Island. *Saito Ho-on KaiMuseum Research Bulletin* 28.　pp.49-57.